

神奈川大学建築学研究

REPORTS FOR ARCHITECTURE AND BUILDING
ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY

NO. 2

神奈川大学建築学研究所

INSTITUTE FOR ARCHITECTURE AND BUILDING
ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY

目 次

1. 「神奈川大学建築学研究」第2号発刊にあたって……………島崎和司…………… 1
2. 建築学科教育・研究費重点配分採択研究報告
 - 2-1 体育館を対象とした継続使用性判断に向けた計測……………白井佑樹, 島崎和司…………… 2
 - 2-2 センサ技術を活用したインフラ施設のアセットマネジメントに関する研究
……………落合努, 朱牟田善治…………… 4
 - 2-3 近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究 (1)
ーフーリエ主義にもとづく集合住宅の試みについてのー考察ー
……………印牧岳彦, 須崎文代…………… 6
 - 2-4 小開口を有するRC造方立壁の耐震診断に関する基礎研究
ー縮小試験体を用いたせん断耐力の検討ー ……………中村慎, 藤田正則…………… 8
3. 科学研究費間接経費を資源とする研究報告
 - 3-1 神奈川大学国際寮と横浜キャンパスの地盤増幅特性の比較検討
……………落合努, 朱牟田善治…………… 10
 - 3-2 いすみ鉄道沿線空間における価値発見のための調査課題
……………高橋寿太郎, 塩脇祥…………… 12
 - 3-3 徳島県牟岐町をモデルとした集落の新たな調査手法の研究
ー建築フィールドワークによる集落のオープンデータ化ー
……………塩脇祥, 野村和宣…………… 14
 - 3-4 CFT円形短柱におけるエネルギーパスを考慮した軸耐力の研究
……………島崎和司, 楊迪, 趙衍剛…………… 16

4.	研究紹介（2023年度）	
4-1	研究分野紹介および研究活動	18
4-2	講演会開催記録	33
4-3	卒業研究・修士論文・博士論文テーマ	35
5.	研究室紹介（2024年度）	39
6.	北京交通大学との学術交流（JSTさくらサイエンスプログラム）実施報告	63

「神奈川大学建築学研究」第2号発刊にあたって

島崎 和司*

On the publication of the Second Issue of "Reports for Architecture and Building Engineering, Kanagawa University"

Kazushi SHIMAZAKI*

1. ごあいさつ

2022年4月、建築学科はさらなる発展を目指し、建築学部生まれ変わりました。創設以来の教育理念の実現化に向け、新たな教育体制・教育環境に移行するためです。地球環境の悪化による自然災害の増加や人口減少などの社会構造の変化の中で、現代社会はこれまでにない新たな解決すべき課題を抱えています。こうした複雑な課題に対応するためには、これまでの建築技術者ではなく、人間愛に溢れ、かつ、学際的な豊かな知識と教養を兼ね備えた“建築専門家”が求められているのです。それは、まさに本学建築学部の教育理念に則した人材そのものなのです。本学建築学部では、建築とは、「さまざまな機能（使われ方）と諸技術、そして美とを調整し、それらの最善の総合化を図ることによって、人間の多様な営みにとって使いやすく、安全で快適、かつ感動を呼ぶ空間や形態・環境を創造すること」を目的とした活動と考えています。そのため、建築を学ぶことは、人間とその営み（社会・経済・文化など）から科学や技術まで、極めて幅の広い分野を学ぶことになります。その学びの成果を集めたものが、この「神奈川大学建築学研究」と思っています。

2. 建築学研究所による研究の推進

研究所が推進する研究には以下の3つがあります。

- (1)建築学科教育・研究費重点配分採択研究（以下、学科内重点配分）
- (2)研究所研究
- (3)文科省科学研究費補助金の間接経費を原資とする研究（以下、間接経費）

学外から客員教授、客員研究員、特別研究員を採用してこれらの一層の研究の推進を図ることができます。2023年度に入って規定が整備され、募集、審査、採択が行なわれました。その成果は、第1号に報告されています。

内田初代所長により文科省科学研究費補助金の間接経費の一部を用いて研究助成を行う制度が創設され、全学に広がりました。建築学研究所では、2022年9月に初めて募集され、10月に審査・採

択され、その成果は、第1号に報告されています。研究費利用は間接経費の利用範囲内にとどまりますが、有効な研究助成といえます。今年度の成果は、今年度に報告されることとなります。

3. 建築学研究第2号の発刊について

建築の助成を受けた研究における研究成果の発表として2023年度に初めて『建築学研究』第1号が発行され、2024年度に第2号が発行されることになりました。上記の研究助成のうち、学科内重点配分4件と間接経費による研究4件、2023年度国際青少年サイエンス交流事業（北京交通大学）実施報告について、その成果をまとめました。また、第1号と同じく工学部通信にならって、2023年度の研究所員の研究活動、講演会開催記録、博士論文・修士論文・卒業論文テーマ一覧も掲載しました。

4. 今後の建築学研究所

研究所内には神奈川大学建築学研究所建築設計事務所を置くことができる、と規定されています。第1号にも書かれていますが、こちらはまだ運用段階にありません。来年度こそ、これを実現し、他にも課題はありますが、建築学部の発展に寄与してもらいたいものです。

*教授 建築学部長

Professor, Dean, Dept. of Architecture and Building Engineering

体育館を対象とした継続使用性判断に向けた計測

白井 佑樹* 島崎 和司**

Strain measurement for determining the continued usability of a gymnasium

Yuki SHIRAI* Kazushi SHIMAZAKI**

1. 緒言

神奈川県横浜市内市立小学校等に設置された体育館の多くは、地震や台風等の災害時に避難所として機能する。地震時に避難所は、自宅が被災した住民にとっての避難中の生活空間となるだけでなく、地域の物資的拠点として、一時的なものだけでなく継続して機能することが求められる。そのため地震本震だけでなく、余震経過後も避難所として継続使用できるかどうかを被災区分判定に基づいて適切に判断することが重要となる。

既往研究[1]において、実在の鉄骨造体育館を対象としたひずみ計測を行い、桁行方向の鉛直ブレースの地震時挙動について検証した結果、対称配置となっているブレースが正負交番で応答していることなどを確認した。

本研究テーマの最終課題である継続使用性判断のために、健全時と損傷時の違いを指標とする手法を検討している。ここでの健全時とは、構造設計で長期荷重相当時で期待される応力状態にあると言える。しかし実際の建築物では、部材の接合部において構造設計ではピンとしていても剛接合に近い場合や、非構造部材の影響などにより、構造設計とは大きく異なる応力状態である可能性があることが指摘されている[2]。

そこで本稿では、小地震時の梁間方向の柱、梁および類材の応力分布求め、1次設計で仮定している応力分布との違いについて考察する。

2. 鉄骨造体育館の観測概要

2-1. 建物概要

計測対象は神奈川県横浜市内の市立小学校体育館である。図1に計測対象建物の骨組全体概要を示す。体育館は基礎が鉄筋コンクリート造、上部構造が鉄骨造であり、桁行方向はブレース構造、梁間方向は山形ラーメン構造である。1977年に竣工し、1996年頃の耐震補強工事によって、梁間方向の柱梁接合部への方杖、および桁行方向への補強ブレースとして円形鋼管 Φ -101.6 \times 4.2、 Φ -114.3 \times 4.5の増設が行われている。

2-2. 計測システム

図2に加速度計測ユニットとひずみ計測ユニットを示す。加速度

*助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**教授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

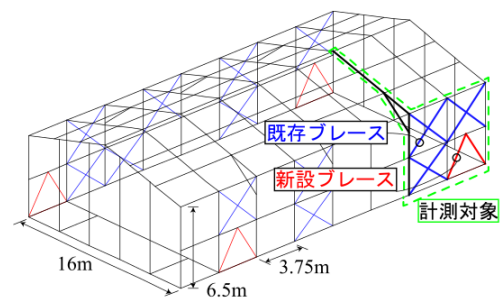
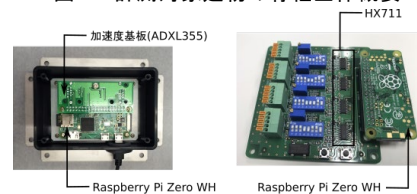


図1 計測対象建物の骨組全体概要



(a)加速度計測ユニット (b)ひずみ計測ユニット

図2 計測ユニット概要

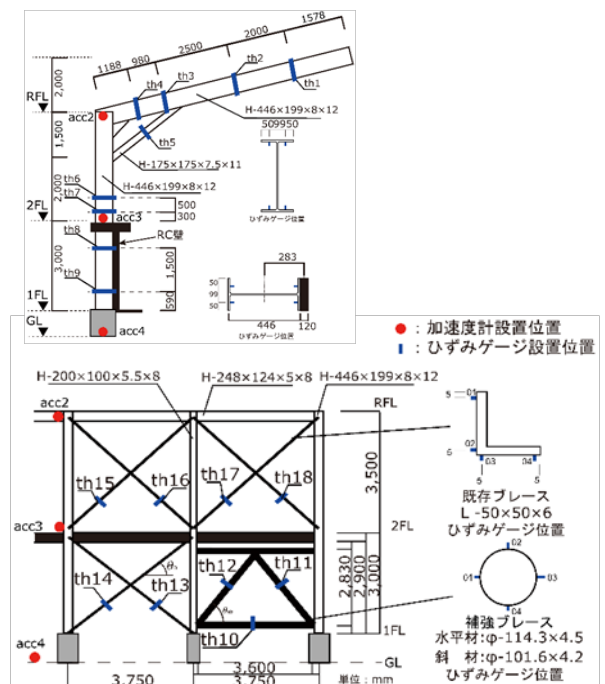
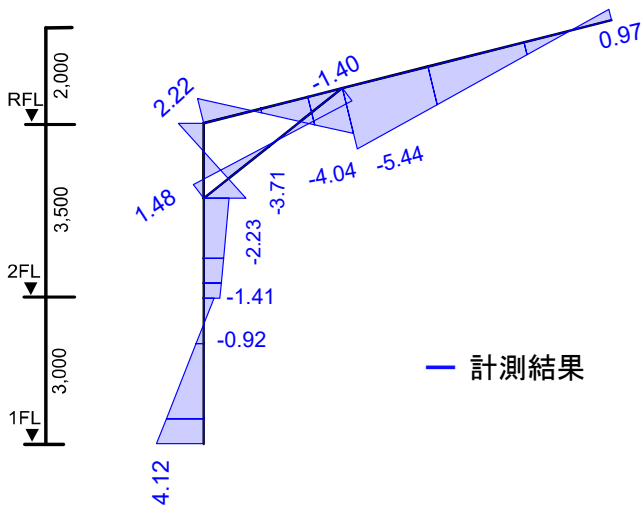


図3 計測位置



(a) 曲げモーメント分布(単位:kNm/mm)

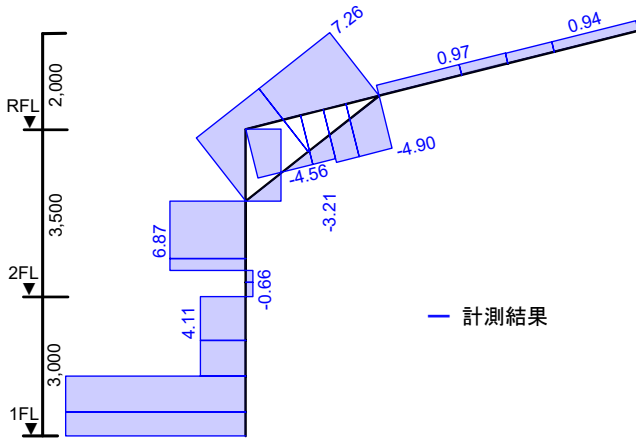


図5 計測対象の詳細写真

(b) 軸力分布(単位:N/mm)

図4 水平変位1mmあたりの応力分布

計測ユニットは、MEMS 加速度センサ ADXL355 を取り付けた基板を Raspberry Pi Zero WH に SPI により接続している。今回の計測では、データ取得の安定性と適切なサンプリング周波数の範囲から、サンプリング周波数を 125Hz、計測レンジを±2.0G とした。

2-3. 計測位置

図3に梁間方向、桁行方向の計測位置を示す。梁間方向は柱頭2箇所、キャットウォーク位置に1箇所、柱脚基礎に1箇所の計4箇所に加速度計を1台ずつ設置し、柱4断面、梁4断面、方杖1断面の計9断面に半導体ひずみゲージ(共和電業製, KSNB-2-120-E4-11)を貼付した。ひずみゲージは、軸力および曲げモーメントが計測できるように、各断面のH形鋼フランジの内側に計4枚ずつ貼付している。なお、柱と間柱は桁行方向が弱軸となっている。また、補強ブレース、既存ブレースともに柱のフランジにピン接合されている。

3. 計測結果

図4に2023年3月15日6時5分ごろに発生した地震記録を用いて算出した、RFLにおける水平変位で除した応力分布を示す。なお、対象建物最寄りの気象庁発表の震度階級は1であり、RFLにおける水平変位は0.1mm程度であった。(a)は曲げモーメント分布、(b)



図5 計測対象の詳細写真

は軸力図である。ここで、曲げモーメント分布は、計測断面間あるいは計測断面から部材端の曲げモーメント分布が線形であると仮定し、線形補間によって部材全長にわたって曲げモーメントを計算した。また、柱梁接合部の曲げモーメントは連続するものと仮定した。図5には、計測対象の詳細写真を示す。

図4より、架構の頭頂の曲げモーメントは零に近く、対称性があることがわかる。一方、写真5に示すような柱脚は一般的にはピンとして構造設計されているが、小地震では大きなモーメントを負担していた。このことは、これまでの研究でも指摘されていることであるが[2]、具体的な数値として得られた意義は大きいと考える。非構造部材として、2FLにはキャットウォークとしてコンクリートスラブがあるが、曲げモーメント負担は小さいことがわかる一方、軸力が大きく変動しており、柱とキャットウォークの接合詳細について確認する必要がある。頬杖の曲げモーメントは小さく、大きな軸力が作用していた。この接合部は比較的ピンとして機能していることがわかる。

4. 結語

建築物の継続使用性判断を加速度やひずみにおいて、健全時との比較による手法とする場合に重要となる、接合部や非構造部材の影響について、実計測結果を用いて検討した。その結果、一般的な構造設計の仮定とは異なる応力状態を確認した。

参考文献

[1]涌井将貴, 白井佑樹, 伊山潤, 鉄骨造体育館のひずみ計測に基づく地震時のブレース挙動, 鋼構造年次論文報告集, 29, 226-231 (2021.11).
 [2]山田哲, 島田侑子, 戸松一輝, 白井佑樹, 松本由香, 長谷川隆, 向井智久, 竹内徹, 繰り返し荷重を受ける鉄骨置き屋根定着部の実験 鉄骨置き屋根定着部に関する研究 その1, 日本建築学会構造系論文集, 79(705), pp.1687-1697 (2014.11).

センサ技術を活用したインフラ施設のアセットマネジメントに関する研究

落合 努* 朱牟田 善治**

Research on Asset Management of Infrastructure Facilities Using Sensor Technology

Tsutomu OCHIAI* Yoshiharu SHUMUTA**

1. はじめに

本報告は、既投稿済みの第 14 回インフラ・ライフライン減災対策シンポジウム (2024) ¹⁾ の一部 (主に道路橋に関する内容) を抜粋、要約したものである。

日本の道路等のインフラ施設は高度経済成長期に整備され、現在、老朽施設の維持管理・更新に関わる費用が増加することが懸念されている。たとえば、神奈川県においては、平成 22 年 3 月に「神奈川県橋りょう長寿命化修繕計画」を策定し、予防保全型の維持管理を指向しながら、橋りょうの長寿命化を図れるようなアセットマネジメントの検討を強化している ²⁾。

これに対し筆者らは、社会インフラのアセットマネジメントに寄与する基盤技術として、構造物の周辺環境とその状態をリアルタイムでモニタリングして、災害時にはその被災状況を推定し、常時には、構造物の状態変化を把握して劣化診断等を行うことを可能とする汎用的なセンシング技術の構築に取り組んでいる ³⁾。このうち、本研究では、構造物の劣化診断に寄与するセンサネットワークシステムを設計・試作することを目的とする。まず、道路橋を対象としたセンシングシステムの具体的なニーズを例示する。次に、社会的ニーズをふまえ、構造物の劣化や被害を引き起こす気象環境と構造物の挙動 (振動等) を同時にモニタリングして、通信ネットワークを確保しながら、遠隔で監視・収集できるセンシングデバイスを試作し、実道路橋に設置した例を示す。最後に、センシングにより得られたデータの分析事例を例示し、今後の課題について考察する。

2. アセットマネジメントからのニーズ

現状で、老朽化によって社会インフラ施設の健全性が低下し、維持管理・更新に要する費用が増加することが懸念されている。これら社会インフラ施設の維持管理上の課題として、たとえば神奈川県では、以下を指摘している ¹⁾。

- (1) 老朽化による事故等が発生するリスクの増加
- (2) 必要な維持管理・更新を実施する予算の不足

図 1 は、神奈川県が公表している道路施設の保全の考え方 ²⁾ を示す。神奈川県では、予防保全型、早期措置型、時間計画型、および

事後保全型と管理区分を道路施設ごとに設定し、5 年に一度の詳細点検 (目視点検) により、道路施設の健全度を判定し、維持管理を行っている。この健全度が低下していく過程を示した曲線が図 1 に示している劣化曲線である。この劣化曲線を目視点検だけで定量的に精度よく評価することは、一般に困難である。加えて、補修などによりどの程度健全度が回復し、劣化の進行がどの程度抑制できるのかを精緻に定量化することはさらに困難となる。このため、これら劣化曲線の評価技術を、センシング技術を応用して確立することが課題となっている。

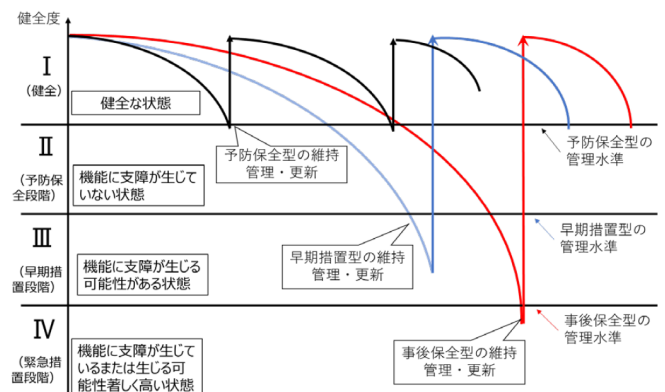


図 1 道路施設の維持管理の基本的な考え方 ²⁾

3. センサネットワークシステムの概要

筆者らの研究グループでは、社会インフラ施設に加え、重要文化財や老朽構造物をセンシングの主な対象としている。これら人工物の劣化診断にとって有益な物理量として、気象環境、腐食環境および振動特性に着目している。このうち、本研究では道路橋を対象としたセンサネットワークシステムを構築するために、まずは、振動と気象環境のモニタリングに注力したシステムを試作した。

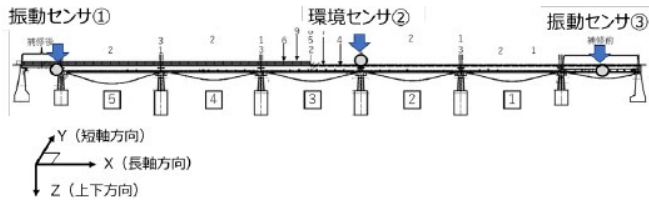
気象環境の測定のために、ミツミ電機社製の環境センサユニット (ENVVDT2-WR: 試作品) を選定した。本ユニットは、I2C の通信方式を採用し、8 つの物理量 (レイン、照度、UV、気流 (風向、風速)、温度、湿度、気圧、加速度) を同時計測することが可能である。

加えて、道路橋の振動特性を計測するために、EPSON 社製の加速度センサである M-A352AD10⁵⁾ と Netplus 社製の高精度 MEMS 加速度計「検震くん」を採用した。

図 2 に神奈川県内の実道路橋 (PC 単純 T 桁) に振動センサと環

*助教 建築学部建築学科
Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering
**教授 建築学部建築学科
Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

境センサの設置位置を示す。対象とした道路橋は、2023 年度に、振動センサ③を設置した径間に補修工事（床板補強工事）を行う予定である。このため、補修の有無で振動特性の変化をモニタリングすることを主な狙いとして同図のような配置にセンサを設置し、2023 年 9 月から長期モニタリングを開始した。



実道路橋上のセンサ設置位置



振動センサ①③ (MA-352)



振動センサ③ (検震くん)



環境センサ② (左: 本体, 右: 電源 BOX)

図 2 試作したセンサネットワークシステムの設置概要

4. 事例検討

図 3 は、2023 年 9 月～12 月にわたる約 4 ヶ月間の気温の異なる 11 時期の X 方向（長橋方向）の平均卓越振動数 (Hz) を、気温の低い順に左から並べて比較して示す。同図は、図 2 で示した振動センサ③で記録された ALLX (平均), 30AmaxX (平均), 30AminX (平均) を併記して示している。振動センサ③の地点は、今後床板補修工事を実施する予定の地点であり、補修が必要な地点と判断された径間である。同図は、気温上昇とともに、高振動数成分が卓越してくることを示唆しており、結果として、平均卓越振動数が高くなっている。このような傾向は、短軸方向 (Y 方向) や Z 軸 (上下) 方向にも同地点ではみられており、振動センサ③の地点には、平均卓越振動数に温度依存性が確認できる。

図 3 のような温度依存性がある特性は、同一道路橋のなかでも、特に補修が必要であると判断される部位に顕著に認められたことから、床板補修後の振動特性も今後継続的に計測することにより、このような現象のメカニズム解明が期待できる。

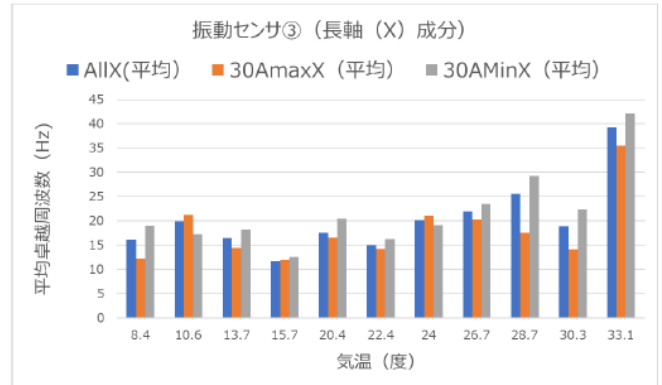


図 3 気温による平均卓越振動数の変化事例 (振動センサ③)

5. まとめ

本論では、社会インフラ施設の資産マネジメントに寄与するセンサネットワークを試作し、その社会的ニーズも含めて道路橋に適用した事例を紹介した。本研究から得られた知見を以下に示す。

- (1)道路や電力流通設備などの都市に膨大な数が敷設されている社会インフラ施設は、老朽化が急速に進み、より精度の良い劣化診断、余寿命評価、およびリスク評価技術が求められている。
- (2)社会インフラ施設に適用可能なセンサネットワークシステムを試作し、神奈川県内の道路橋に設置して、長期モニタリングを開始した。その結果、補修が必要と判断されている部位の卓越振動数が、気温により高振動数成分が卓越する温度依存性の兆候を計測した。

このような温度依存性の現象のメカニズム解明と一般性を確認できれば補修の要否判断にも応用することが期待できる。今後は、補修予定の道路橋の振動特性が補修後にどう変化するのか分析し、補修の効果の定量化やセンシング技術を用いた余寿命評価の方法論について検討していく予定である。

参考文献

- [1] 朱牟田善治, 落合努, 道路橋の振動特性を把握するセンサネットワークシステムの試作と計測, 第 14 回インフラ・ライフライン減災対策シンポジウム講演論文集, 122-127 (2024).
- [2] 神奈川県県土整備局道路部道路管理課, 神奈川県道路施設留意寿命化計画 (2022.3).
- [3] 朱牟田善治, 落合努, 構造物の劣化診断と災害復旧迅速化に寄与するセンシングデバイスの試作, 2023 年電気学会 電子・情報・システム部門大会予稿集, OS8 防災保全分野における予測・情報・センシング応用技術, OS8-9, 1066-1070 (2023).
- [4] 朱牟田善治, 村田颯也, 落合努, 道路橋の定期点検記録に基づく劣化要因の特定, 土木学会全国年次学術講演会, 78, VI-499 (2023).
- [5] SEIKO EPSON CORPORATION:M-A352AD10 データシート (2022).

近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究（1）

フーリエ主義にもとづく集合住宅の試みについての一考察

印牧 岳彦* 須崎 文代**

A Study on Modern Utopian Communities and Their Buildings: Housing Experiments Based on Fourierism

Takahiko KANEMAKI* Fumiyo SUZAKI**

1. 緒言

産業革命後のヨーロッパ、とりわけ急激な人口増大を被った都市部における労働者の住環境の悪化の問題は、19世紀前半の時期、そうした問題を一種の理想社会の建設によって乗り越えようと試みる思想家や実業家の一群を生み出した。フランスのアンリ・ド・サン＝シモン（1760-1825）やシャルル・フーリエ（1772-1837）、あるいはイギリスのロバート・オーウェン（1771-1858）などに代表されるこれらの理想主義者たちは、のちにマルクス主義の立場から「空想社会主義者（ユートピア社会主義者）」と総称されて批判の対象となるが¹⁾、彼ら自身またはその影響下にある人々による理想社会建設の試みは、たとえ小規模あるいは一時的なものであったにせよ、既存の住宅・都市の問題を乗り越える集合的な生活のあり方を示し得たという点において、現在改めて関心と呼ぶものとなっているように思われる。

本報告では、上記のようなユートピア構想とその建築への影響に関する研究の一環として、シャルル・フーリエの思想（フーリエ主義）の影響下にある建築事例とその特徴を概観する。また、とりわけフランスの事例に関して、2024年3月に実施した現地調査の内容を踏まえてその現状について報告を行う。

2. フーリエ主義とその建築への影響

シャルル・フーリエは、1808年の最初の著書『四運動の理論』をはじめとする多数の著作において、人々のあいだに働く「情念引力」によって結び付けられる（いくらか奇妙な）共同体構想を提示したことで知られる。「ファランジュ」と呼ばれるこの共同体に属する人々が暮らすための住まいが「ファランステール」と呼ばれる建築物であり、1828年の著書『産業の新世界』には回廊によって結び付けられた居住棟からなるその具体的なプランも掲載された²⁾。

フーリエによるこうした共同体の構想は、とりわけ19世紀半ばの時期に国内外に影響を及ぼし、例えばアメリカ合衆国においても

フーリエ主義の共同体の建設が数多く行われた^{3) 4)}。ただし、アメリカにおけるそれが概ね短期間の実験に終わったのに対し、フランスにおいては比較的長期に渡ってコミュニティが存続し、建物としても現存する事例が見られることが注目される。以下では、そうした事例として、パリ市内の集合住宅であるシテ・ナポレオンおよび、北部の都市ギーズに位置するファミリステールの例を取り上げる。

3. フランスにおける事例①シテ・ナポレオン

1851年、ナポレオン3世統治下の政府によって建設された労働者向け住宅であるシテ・ナポレオンは、厳密にはフーリエ主義の建築物というわけではないが、例えば中野隆生は、この建物の以下のような建築的特徴を「ファランステールの要素」として挙げている。「幅六メートルの廊下に見られるごとく、廊下や階段といったスペースが広く、しかも、ガラス天井で覆われていたこと、その階段と廊下をはさんで住戸が二列に向かい合って並んでいたこと、給水泉が大きな中庭におかれ、流しや便所は各階ごとの共同使用となっていたこと、洗濯場、乾燥室、浴室、保育所のほか、暖房付きの集会場といった施設が計画されていたこと⁵⁾。

パリ市内に現存する実際の建物においては、各住戸の内部に関しては改装工事が進められているものや、既にリノベーションが完了しているものも存在したが、上記で「ファランステールの」として挙げられた要素、例えばガラス天井で覆われた廊下や階段からなる広い共用部や中庭の給水泉、各階の共同便所などは現存しているのが確認され、とりわけ中央の共用空間は各住戸の住人による生活の延長のなかで活用されていることが観察できた。



図1 シテ・ナポレオン、4階共用部（2024年3月、筆者撮影）

*助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**准教授 建築学部建築学科

Associate Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

4. フランスにおける事例②ファミリステール

フランスにおけるフーリエ主義の共同体実験としてもっともよく知られるのが、ストーブ製造会社「ゴダン」を経営する実業家のジャン＝バティスト・ゴダン（1817-1888）によって建設されたファミリステールである。ギーズにあるゴダンの工場に隣接して計画されたファミリステールの建物は、1858年から1884年にかけての長期に渡って段階的に建設され、ゴダン自身も含む工場の従業員が最大で1800名程度居住していた。ファミリステールは20世紀に入って以降、二つの大戦も乗り越えて存続したものの、1968年には運営主体である協同組合が解散し、自主管理的な共同体としての活動は一旦の幕引きを迎える。その後、1991年に歴史的建造物に指定されたのち、2000年代以降には段階的に修復・公開が行われ、現在は見学可能な博物館施設として活用されている。



図2 ファミリステール、正面外観および中央棟中庭（2024年3月、筆者撮影）

ファミリステールの位置付けとしては一般的に、フーリエの思想に忠実な実践例と見なされることが多く、例えば前述の中野は「ひとりの産業家がファランステールの居住空間をできるだけ忠実に具体化しようとした事例である」⁵⁾と述べ、月尾嘉男らによる研究でも（フーリエの構想との家族構成などの相違を指摘しつつも）「ファランジュの概念を実現した唯一の成功例」「ファランステールの小型版」と評価されている⁶⁾。

その一方で、白承冠による近年の研究では、ゴダンの思想から建物の特徴に至るさまざまな点において、ファミリステールはフーリエの思想（およびファランステール）の忠実な実践あるいは模倣というよりもむしろ、それらを独自に発展させたものであるという点が指摘されている^{7) 8)}。例えば、白が指摘する建築的特徴の相違点として注目されるものとして、ファランステールにおいてはあらゆる人々が通過可能な回廊（ギャラリー）が全体を結びつける役割を果たしているのに対し、ファミリステールにおいては各住棟の中心にある大きな中庭がその（全体の接続という）役割を果たしているという点が挙げられる。フーリエの建築構想においては、回廊によって象徴される「循環」や「流れ」といったテーマが重要であったとされるが⁹⁾、ファミリステールにおいては、空間構成はより求心的なものとして捉えられていたとも考えられる。

さらにまた、当初ゴダンが協働を考えていたフーリエ主義者の建築家ヴィクトール・カルランが、結局のところファミリステールの計画に関わらなかった理由として、白は両者の建設プロセスについての考え方の違い、すなわちゴダンが（カルランとは違って）建物の漸進的・段階的建設を望んでいたことを挙げている。そうした段階的建設の採用は、ゴダンの現実主義的な考え方に基づくものであり、ファミリステールが長期に渡って存続しえたひとつの理由とも考えられる。とりわけこの点に関して比較可能な事例として、ファ

ミリステールと同様に比較的長期に渡って存続した共同生活の試みといえる、アメリカ合衆国シカゴのセツルメントハウスであるハル・ハウスにおいても、段階的な建設プロセスが採用されていたことは注目される¹⁰⁾。加えてまた、プランに関しても、（修道院がひとつのモデルとなったと考えられる）中庭を取り囲む構成において両者のあいだには共通性が見られる。もとより、地域や機能の異なる二つの建物の比較に関してはより詳細な検討が必要であるが、コミュニティの継続性に関する建築的条件を考える上では、重要な手がかりを提供するものと思われる。

5. 結言

本報告では、産業革命以後の近代におけるユートピア構想の建築への影響およびその特徴に関する研究の一環として、フーリエ主義の影響下にある集合住宅・コミュニティの事例を取り上げ、その現状および特質について既往研究での評価を踏まえた考察を行なった。フーリエ主義者によるコミュニティ建設がしばしば短命のうちに終わったのに対し、ファランステールの特徴を有するものの、必ずしもフーリエ主義の思想にもとづくものではないシテ・ナポレオンや、フーリエの思想から出発しつつ、独自の展開のもとで実践を行なったゴダンのファミリステールは、今日に至るまでの継続性という点では優れていたと評価できる。また、そうした継続を可能とする上で、建設プロセスの漸進性・段階性が有効に働いたのではないかと推測でき、このことが現在における博物館施設としての段階的な公開・利用へと接続されていると見ることもできるだろう。

参考文献

- [1] エンゲルス、空想より科学へ：社会主義の発展、大内兵衛訳、岩波文庫（1966）。
- [2] シャルル・フーリエ、産業の新世界、福島知己訳、作品社（2022）。
- [3] カール・J・ガーネリ、共同体主義：フーリエ主義とアメリカ、宇賀博訳、恒星社厚生閣（1989）。
- [4] D. Hayden, *Seven American Utopias: The Architecture of Communitarian Socialism, 1790-1975*, The MIT Press (1976)。
- [5] 中野隆生、プラーグ街の住民たち：フランス近代の住宅・民衆・国家、山川出版社（1999）。
- [6] 月尾嘉男、北原理雄、実現されたユートピア、鹿島出版会（1980）。
- [7] 白承冠、理想的コミュニティーを目指すゴダンのファミリステールについて：19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、75(647)、219-225 (2010.1)。
- [8] 白承冠、ゴダンのファミリステールのオリジナリティとその建築・都市史的特性：19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その2、日本建築学会計画系論文集、75(654)、2039-2045 (2010.8)。
- [9] 小澤京子、シャルル・フーリエの建築構想における「循環」、和洋女子大学紀要、64、13-27 (2023.3)。
- [10] 井口力哉、須崎文代、印牧岳彦、倉田慧一、田中和幸、水野僚子、泉水英詩、《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(4)：ハル・ハウスの建築群拡大の変遷、日本建築学会大会学術講演会梗概集 (2024.7)。

小開口を有する RC 造方立壁の耐震診断に関する基礎研究 — 縮小試験体を用いたせん断耐力の検討 —

中村 慎* 藤田 正則**

Basic Study on Seismic Evaluation of RC Partial Walls with Small Openings - Examination of Shear Strength by Small-scale Specimens -

Makoto NAKAMURA* Masanori FUJITA**

1. 本研究の背景

近年の大地震では、現行の耐震基準を満足しない既存不適格建築物のみならず、耐震的には問題ないとされた建築物の非構造部材が破壊する事例が確認されている。RC 造建築物においては、雑壁が破壊することで機能性や使用性が損なわれ、震災後の継続利用が困難になる場合があり、同様の被害を防止するための雑壁の損傷抑制や改修に関する研究が多数実施されている(例えば¹⁾)。

ここで、方立壁をはじめとする RC 造の雑壁は、新築工事の設計では非構造壁(構造耐力に寄与しない部材)として、耐震診断・耐震改修においては構造壁(構造耐力に寄与する部材)として扱われることが多い。現状では必ずしも構造壁として取り扱う決まりがないため、ときに簡易な検討をもってその撤去、部分撤去(小開口の追加などを含む)が実施されることがある。しかしながら、小開口の追加等の部分撤去がなされた雑壁の力学的性状は、方立壁だけを取ってみても、その研究事例がほとんどみられない。より正確に建築物の耐震診断・改修設計を進めるためには、小開口を有する雑壁についてもその評価方法を検討する必要がある。

2. 本研究の目的

既往の研究では、1/2 スケールの小開口を有する方立壁付き RC 造骨組の水平載荷実験を実施し、そのせん断耐力等を確認している。

本研究では、既往の研究に引き続き、水平載荷実験の方立壁を模擬した縮小試験体を製作する。開口の有無や数、その補強の有無等をパラメータとした静的載荷実験を行い、そのせん断耐力を耐震診断基準(以降、診断基準という)²⁾に基づき検討する。

3. 方立壁を模擬した縮小試験体の静的載荷実験

3-1. 実験概要

RC 造骨組の水平載荷実験(以降、水平載荷実験という)で確認した小開口を有する方立壁のせん断耐力について、壁板(柱なし壁)

のみを抽出した縮小試験体を製作し、検討する。逆対称曲げを受ける柱や壁等のせん断実験には建研式加力(例えば³⁾)、梁のせん断実験には大野式加力などが多く採用されるが、本研究では基礎的なデータ採取を目的とし、単純梁式の加力方法を用いる。図1に曲げモーメント分布の想定を示す。RC 造骨組み試験体の a 部に着目し、その応力状態を模擬する1点載荷3点曲げの壁板の実験として計画する。

試験体一覧を表1に、試験体形状を図2に示す。図2の a) に示す小開口付き試験体(No.1)を基準試験体とする。No.1R は No.1 と同形状の壁板に開口補強筋を加え、開口補強の影響を確認する。No.0 は開口なしとし、開口有無の影響を確認する。No.2 は No.1 の開口下部に小開口(呼び径 50 φ, 実径約 57mm)を追加した壁板とする。

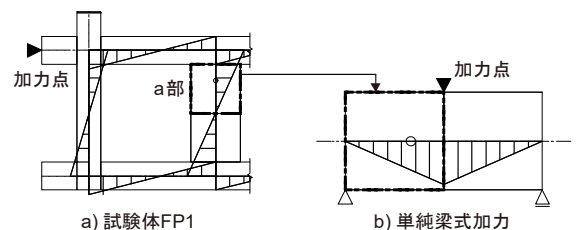


図1 試験体の曲げモーメント分布の想定

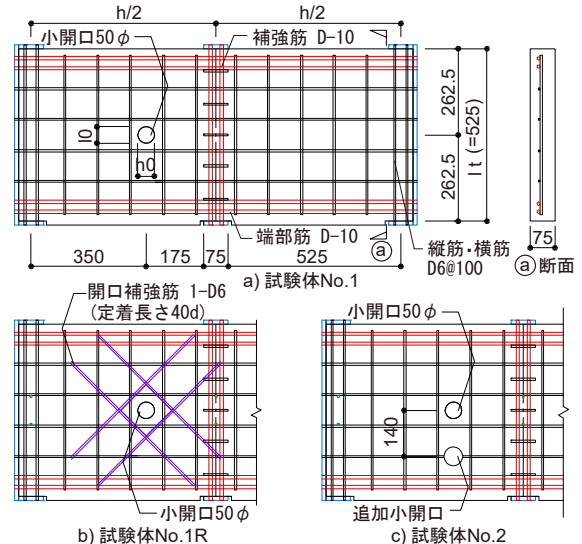


図2 試験体形状

* 助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**教授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

表 1 試験体一覧

試験体	l_t mm	h mm	l_0 mm	h_0 mm	l mm	せん断耐力等の低減率			圧縮強度 N/mm ²	M_u kN・m	Q_{mu} kN	Q_{su} kN	Q_{su}/Q_{mu}	F値	破壊形式
						r	r_2	r_1							
No.0	525	1125	0	0	450	1.000	1.000	1.000	21.1	31.9	56.7	81.0	1.43	1.71	曲げ壁
No.1,1R			50	50		0.889	0.889	0.895	20.9	31.9	56.7	71.1	1.25	1.42	曲げ壁
No.2			107	53.5		0.762	0.762	0.776	22.6	31.9	56.7	63.0	1.11	1.18	曲げ壁

追加の小開口はコアドリルを用いて穿孔し、壁の縦筋を1本切断した。なお、2つの小開口は診断基準の解付図2-7（複数開口を有する壁）を参考に、2つの開口間の距離(mlw)を2つの開口間の高さ(mh_w)の1.5倍以上の約87mmとし、開口間の壁に圧縮場が形成される想定とした。載荷は1000kNの万能試験機を使用し、一方向の単調載荷とする。試験体は耐力が最大耐力の80%以下になるまで載荷を継続する。

3-2. 実験結果

せん断力-部材角関係を図3に示す。ここで、せん断力 Q は単純梁式の加力方法より、載荷時の荷重 P の1/2とし、部材角は壁板の構造芯の傾きより算定する。

開口なしのNo.0が最も早期かつ急激に耐力低下しているが、これは載荷部直下のPLと縦補強筋の定着部（溶接部）が破壊し、載荷部直下のコンクリートが支圧破壊したことによる。No.0を除いて比較すると、いずれの試験体も部材角1/150を超えた範囲で耐力低下し、その耐力低下の度合いは開口補強筋ありとしたNo.1Rが最も緩やかになる。耐力低下が生じる部材角は水平載荷実験よりも遅れるが、これは加力方式の違いによる曲げ変形の影響と考える

3-3. 考察

(1) 診断基準の1次診断における強度指標の検討

水平載荷実験と同様に、診断基準の1次診断で実験結果を考察する。1次診断時の鉛直部材のせん断耐力を表2に示す。

計算値 Q_{c1} はいずれも開口部面積を低減して (A_{w3} から小開口の水平投影面積を除き) 算定している。計算値 Q_{c1} はいずれも実験時のせん断力の最大値 Q_E を上回り、その余裕度は小開口ありの試験体で2.25から2.56となる。診断基準が定める τ_{w3} の低減までは要さず、開口部の水平投影面積の低減を行うことでせん断耐力を安全側に評価できた。

(2) 耐震診断基準の2次診断における強度指標の検討

水平載荷実験と同様に、診断基準の2次診断にて実験結果を考察する。2次診断時の鉛直部材のせん断耐力を表3に示す。

縮小試験体は壁板のみ（柱なし）となるため、 $Q_{e2}=Q_w$ となる。ここでは Q_{e2} に Q_{mu} を用いた場合と Q_{su} を用いた場合の両ケースとも算定している。実験値の Q_{E2} は表1のF値に対応する部材角時のせん断力より抽出する。ただし、No.0は対応する部材角以前に載荷を終了しているため、最大のせん断力を抽出する。

表3より、小開口ありのNo.1, No.1R, No.2の Q_{E2}/Q_{C2} はいずれも1.00以上となる。これによれば、水平載荷実験と同様に、一つあたりの開口周比がおよそ0.06となる小開口を有する方立壁のせん断耐力は、現行の診断基準と耐力壁のせん断強度低減率を準用して算定が可能であると考えられる。ただし、その破壊形式は Q_{su}/Q_{mu} が1.00以上でもせん断破壊となるため、そのせん断耐力は Q_{mu} および Q_{su} の小さい値とし、あわせて、破壊形式は Q_{mu} , Q_{su} の大小によらず、靱性がないものと考え、せん断破壊とする（せん断壁の $F=1.0$ を採用する）ことで、安全側に評価できるものと考えられる。

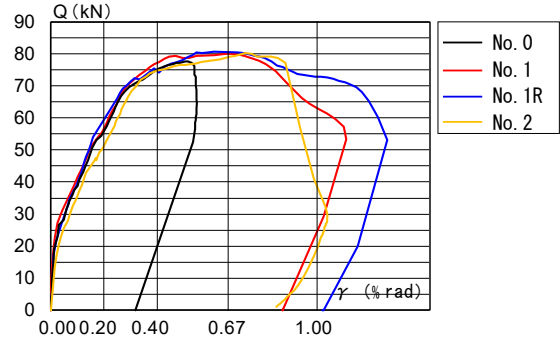


図 3 せん断力-部材角関係

表 2 一次診断による計算値と実験値の比較

試験体	Q_E kN	τ_{w3} N/mm ²	τ_c N/mm ²	Q_{c1} kN	Q_E/Q_{c1}
No.0	77.6	1.00	1.00	39.4	1.97
No.1	80.0	1.00	1.00	35.6	2.25
No.1R	80.6	1.00	1.00	35.6	2.26
No.2	80.3	1.00	1.00	31.4	2.56

表 3 二次診断による計算値と実験値の比較

試験体	Q_{E2} kN	Q_{mu} kN	Q_{su} kN	Q_{E2}/Q_{C2}	
				Q_{E2}/Q_{mu} kN	Q_{E2}/Q_{su} kN
No.0	77.6	56.7	81.0	1.37	0.96
No.1	77.9	56.7	71.1	1.37	1.10
No.1R	79.1	56.7	71.1	1.40	1.11
No.2	77.7	56.7	63.0	1.37	1.23

4. 結

本研究では、一つあたりの開口周比がおよそ0.06となる小開口を有するRC造方立壁の縮小試験体を用いた静的載荷実験を行い、以下の知見を得た。

- 1) 診断基準の1次診断を用いた評価では、小開口部分の水平投影面積を除いてせん断耐力を計算することで、 τ_{w3} の低減までは要さず、せん断耐力を安全側に評価できる。
- 2) 診断基準の2次診断を用いた評価では、小開口を有する方立壁のせん断耐力を Q_{mu} と Q_{su} の小さい値とし、破壊形式は Q_{mu} , Q_{su} の大小によらずせん断壁とする（せん断壁の $F=1.0$ を採用する）ことで、実験時のせん断耐力を安全側に評価できる。

参考文献

[1] 尹ロク現, 真田靖士, 松尾啓斗, 越智健太郎, 杉本佳奈, 損傷抑制型RC造方立壁の構造性能に関する実験的研究, 日本建築学会構造系論文集, 87(794), 362-371 (2022.4).

[2] 中村慎, 藤田正則, 岩田衛, 小開口を有する方立壁の水平載荷実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 2020, 651-652 (2020.9).

[3] 日本建築防災協会, 2017年改訂版 既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準同解説 (2017.7).

[4] 前田匡樹, 建築分野におけるせん断耐力算定式の発展—実験式からトラス・アーチ理論式へ—, コンクリート工学, 51(9), 743-749 (2013.9).

神奈川大学国際寮と横浜キャンパスの地盤増幅特性の比較検討

落合 努* 朱牟田 善治**

Comparative Study of Ground Amplification Characteristics

Between Kanagawa University International Dormitory and Yokohama Campus

Tsutomu OCHIAI* Yoshiharu SHUMUTA**

1. はじめに

2023年5月11日4時16分、千葉県南部を震源とするマグニチュード5.2の地震が発生した¹⁾。最大震度は千葉県木更津市の5強であり、神奈川県でも一部で震度4を記録している。

この地震により、神奈川大学国際寮（横浜キャンパスから南側に約500m）で若干の被害が発生した。建物被害についての詳細な調査等は、大学の施設課や実務設計者を中心に進められている。

一方で、神奈川大学では、横浜キャンパスやみなとみらいキャンパスで、研究活動や大学の事業継続などに資するためなどを目的に、地震観測が行われている²⁾。筆者らは、施設課などと協力してこれらの地震観測データの一部について整理、分析などを進めている³⁾。そこで、今回の地震で国際寮にどの程度の地震動の入力が想定できるかなどについて検討を行うために、常時微動計測を用いてそれぞれのサイト増幅特性について若干の検討を行った。

2. 神奈川大学国際寮の概要

神奈川大学国際寮は、多様なバックグラウンドを持つ者同士が起居を共にし、多彩な交流や体験を通して、文化的・歴史的背景に由来する価値観や個々の特性の差異を乗り越え、多様性を尊重し、新たな価値を生み出すコミュニティを創造することを目的に設置された⁴⁾。「まちのような学生寮」をコンセプトにオープンし、留学生・日本人学生が寮生活を送る中で多様性を体感し国際的感覚を養うことができる。2020年度には、グッドデザイン・ベスト100を受賞しさまざまなメディアで紹介されている建築物である⁵⁾。

RS+S造、地上4階建、延べ床面積は6,065㎡。低層階には3つの多目的スタジオ・多目的和室や課外活動の部室などをテーマ別に配置。1階から4階までの吹き抜け部分には複数の階段を配置し、踊り場など周辺部分には少人数で作業や会話ができる「キッチンポット」や「人工芝ポット」「畳の小上がりポット」などのオープンな出会いのスペースを全館に約20個設置している。



図1 神奈川大学の外観⁴⁾

3. 周辺の地形概要

神奈川大学は、東神奈川駅や東白楽駅付近の氾濫平野（谷底低地：過去に河川によって削られその後軟弱な土が堆積した部分）からやや標高が上がった台地面に立地する（図2）⁶⁾。周囲は小さな谷底低地が樹枝状に発達し、標高の変化に富んだ複雑な地形を有する。実際に白楽駅から大学まで歩いてみると、白楽駅（台地上）からいったん低地に下がり（六角橋の交差点付近）、そこから大学（台地）に向かい再び標高が高くなることが実感できると思う。

また、神奈川大学横浜キャンパスから国際寮付近までの直線の標高変化も図2に併記する。横浜キャンパスは標高が23m程度であるが、南側に行くに従い多少の上り下りをしつつ国際寮付近では標高が高くなり（約45m）、その標高差は20m程度とかなり大きい。さらに南側に向かうと、こんどは急激に標高が下がり、崖地のようにになっている。

*助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**教授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

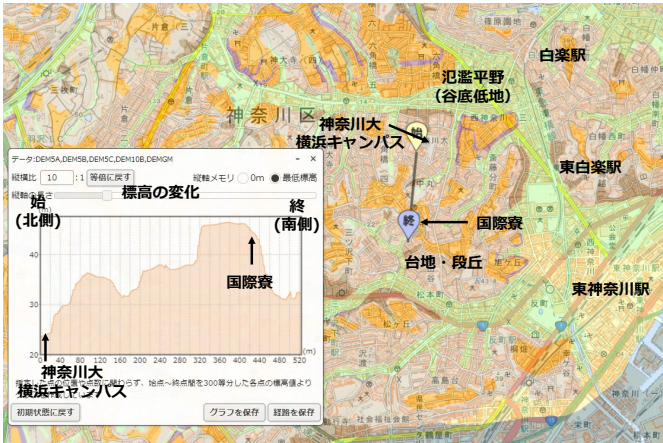


図2 神奈川大学周辺の地形と大学から国際寮付近の標高の変化⁶⁾

4. 常時微動観測を用いたサイト増幅特性の比較

一般に、建物に入力される地震動の特性は、「震源特性」、「伝播経路特性」、「サイト増幅特性」の3つの特性によって決まることが知られている。今回の地震の場合震源位置が千葉県と十分遠いため、横浜キャンパスと国際寮では「震源特性」と「伝播経路特性」は、概ね同等であると考えることができる。よって、両者のサイト増幅特性がどの程度異なるかに着目した検討を行った。

ある地域のサイト増幅特性を簡便に知る方法として、常時微動計測が知られている。実務設計などの場合でも、常時微動計測から得られる地盤の卓越周期を用いて、地盤種別が求められることができる。横浜キャンパスと国際寮での常時微動観測から得られた H/V スペクトル比を図3に示す。図より、それぞれのピークを整理すると表1となる（振動数 F と周期 T は逆数： $T=1/F$ ）。

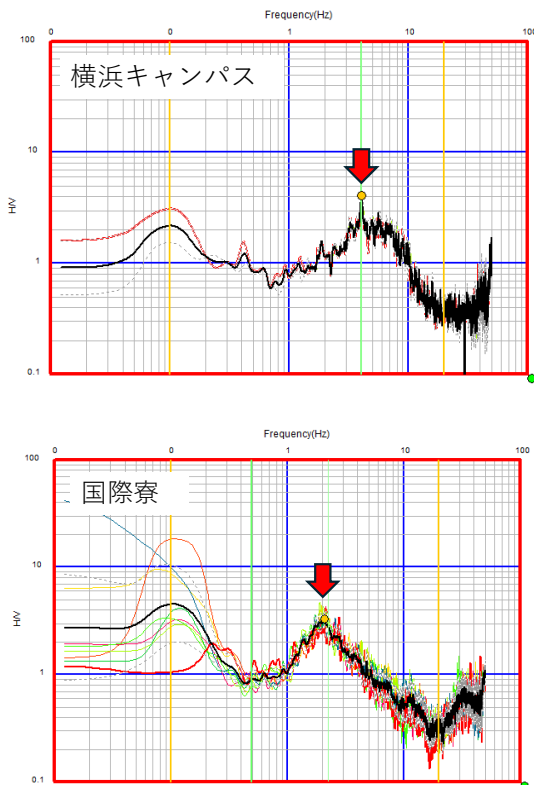


図3 横浜キャンパスと国際寮の常時微動計測結果

横浜キャンパスと国際寮のピーク振動数（周期）と地盤種別を表1に示す。両地点ではピークの振動数（周期）がだいぶ異なるため、地盤種別も変わる。地盤種別はI種地盤が硬質で良好な地盤、III種地盤が軟弱地盤、II種地盤がその間に当たるとされており、横浜キャンパスと比べると、国際寮の地震動が大きくなる可能性が示唆される。

また参考に、今回の地震で観測された横浜キャンパスでの地震記録を図4に示す。横浜キャンパスでの最大加速度は45galとなり計測震度は概算で4程度であったと考えられる。そのため、国際寮ではそれよりも大きな地震動が入力された可能性がある。

表1 横浜キャンパスと国際寮のピーク振動数（周期）

	振動数 (Hz)	周期 (s)	地盤種別
横浜キャンパス	3.5	0.28	I種
国際寮	2.0	0.50	II種

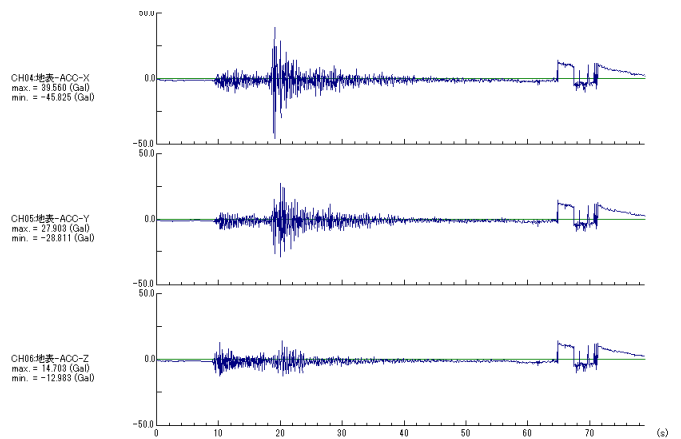


図4 2023年5月11日の地震の記録
(横浜キャンパス3号館付近の地表の記録)

5. まとめ

神奈川大学の国際寮を対象に、常時微動によるサイト増幅特性を求め、横浜キャンパスとの比較を行った。微動から得られた結果より、国際寮は横浜キャンパスよりも揺れやすい地盤に立地していることが示唆された。

【参考文献】

[1] 気象庁, 令和5年5月11日04時16分頃の千葉県南部の地震について, <https://www.jma.go.jp/jma/press/2305/11b/202305110615.html>
 [2] 神奈川大学 TEDCOM プロジェクト.
 [3] 落合努, 他, 常時微動と地震記録を用いた超高層制振建物の振動特性評価, 日本建築学会学術講演梗概集 (北海道), 253-254 (2022).
 [4] 神奈川大学 HP 粟谷谷アカデメイア, <https://www.kanagawa-u.ac.jp/campuslife/living/akademeia/>
 [5] 神奈川大学 HP プレリリース, https://www.kanagawa-u.ac.jp/pressrelease/details_20777.html
 6) 国土地理院, 地理院地図 地形分類 (自然地形).

いすみ鉄道沿線空間における価値発見のための調査課題

高橋寿太郎* 塩脇祥**

Research Issues for Discovering Value in the Space along the Isumi Railway Line

Jutaro TAKAHASHI* Sho SHIOWAKI**

1. はじめに～地方鉄道の価値と可能性～

本研究の目的は、いすみ鉄道沿線空間の魅力を再発見し、地域社会の持続的な発展と地方創生の一角を担うことである。地域内外の視点から鉄道施設や沿線空間の魅力的な要素やデザインに関する基準を明確化し、共有知とすることを目指している。地域の住民や外部からの利用者と協力して、沿線の魅力に関するワークショップ(以下、WS。)を行い、地域特有の魅力を引き出し、広く伝える手段を探る。これにより、ローカル鉄道沿線空間を具体的に理解し、保護・増進するための基準を図り、広く認知・共有することを目指し、研究結果を地方創生の推進に活用することで地域の特性を活かしたプランの策定に貢献することを期待する。ひいては地域社会の持続可能性や住民の生きがい、自己実現を促進させることができると推察する。

2. 研究の方法～【沿線遺産】のヴィジュアル化と言語化～

本研究では、実地調査からローカル鉄道の沿線の持つ魅力に着目した。沿線の価値向上に寄与するのであろう景観をはじめとした、看板や建物、橋、道、季節ごとの植栽なども含めた物質から現象そのものを【沿線遺産】と捉えた。有識者や鉄道関係者によるWSを用いて、これらの価値をヴィジュアル化、または言語化する。その後、冊子として、エリアごとにその成果が【沿線遺産】の一つの基準として成立するようにまとめた。

2-1. 鉄道沿線の魅力 WS 企画から実施

今回のWSは、いすみ鉄道の城見ヶ丘駅～西大原駅の区間を2駅ずつ、3つのエリアに分けた。実地調査を通じて、鉄道沿線の魅力と感じるデザインに関する基準を明確にし、駅間における沿線周辺にて重点的に散策した。WSでは、地域活動団体であるいすみラーニングセンターの参加者やいすみ鉄道職員の協力のもと地域内外の視点からローカル鉄道施設や沿線空間の価値をグループとして把握し、その魅力の共通項を見出すことを目指した。WS後には、各エリアでの発見をプロジェクターに投影し、各々議論を行い、価値の基準についての評価を見出した。

2-2. 沿線遺産再発見 冊子の製作

鉄道沿線の魅力WSを通じて、エリアごとの各々の価値として捉えたものを画像の中から抜粋し、言語にて再抽出した。WSの内容や企画に至る経緯を明確にし、調査方法をより厳密に記載した。その結果を冊子として具現化することで、WSの参加者だけでなく、地域住民や行政職員、いすみ鉄道職員、商工会、まちづくりNPO等、多くの人々に確かな情報として伝えることを意図している。



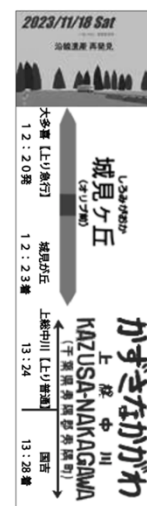
写真1 沿線遺産についての議論の様子



写真2 企画説明/ワークショップ風景



国吉・新田野エリア



城見ヶ丘・上総中川エリア



上総東・西大原エリア

図1 ワークショップエリア決めのくじ引きデザイン
※調査で発見したいすみ鉄道の駅看板をモチーフにしている。

*教授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**助手 建築学部建築学科

Research Associate, Dept. of Architecture and Building Engineering

【沿線遺産】に関する具体例



写真3



写真4

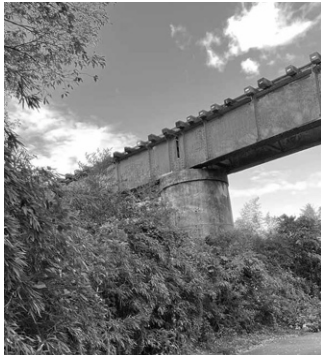


写真5



写真6

(以下、鍵括弧部は実際に記載された文章を抜粋)

写真3：生垣改札

「無人駅にて改札もどきになるところがなんか、いい感じ。改札はあるけどこちらが改札。」

写真4：うつつ

「国吉駅でミラーを見ると、電車と線路と自分が映りこんでいた。国吉へ足を運び(行動に移る)/ミラーを見る(鏡に映る)/写真として思い出に残す(写真に写る)がここに記録される。」

写真5：空飛ぶ鉄橋

「鉄道を下から見上げ、さながら飛ぶである景観。木々の小道を抜けて飛び出す陸橋は萌。」

写真6：芝のホーム

「通常の硬いイメージのある駅舎だけれど、ホームが季節により、芝になると柔らかい印象が生まれる。ピクニックができそうな優しいここだけのホーム。」

3. 研究結果～地方鉄道と地域社会～

ローカル鉄道であるいすみ鉄道は、長年にわたり地域住民の移動手段として重要な役割を果たしてきた。その古き良き鉄道施設の景色やデザインには、なつかしさやのどかさを想起させ、鉄道ファンだけでなく、地域外からも幅広い層を魅了した。

本研究結果は、地方創生の視点から重要な課題解決の手法の一つとなると考える。地域の発展と持続的な成長を目指す地方創生において、その局所的とも言える価値が何を示し、どのようなものであるかに触れることに発展の意義がある。果ては、いすみ鉄道の魅力を守り増進することとなる。

今回の冊子では沿線空間を、評価可能なひとつの基準となった。その基準は更新可能な現象であり、こうした実験検証を繰り返すこ

とで【沿線遺産】という価値基準の一般化を目指す。本研究により。地域内外より見た価値が見過ごされることなく、いすみ鉄道の持つ魅力や特色がより広く認知・共有され、地域社会の持続的な発展に寄与することを示す。

この魅力は地域の観光収益や地域外からの移住定住の課題を超えて、「地域社会の持続可能性」や「生きがいや自己実現」といった要素にも関わる重要な要素となる。

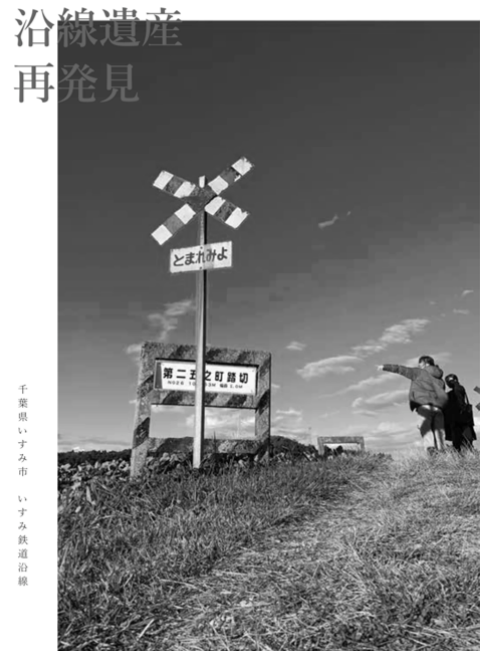


図2 「沿線遺産再発見」の冊子

※調査で発見したいすみ鉄道の駅看板をモチーフにしている。

実施調査の概要

鉄道沿線の魅力ワークショップ

日時 2023（令和5）年11月18日/場所 千葉県いすみ市大原

沿線遺産再発見 冊子の製作

期間 2023（令和5）年12月～3月/製作 高橋寿太郎研究室

浅川果音（神奈川大学）/高橋美莉（神奈川大学）

塩脇祥（神奈川大学）/高橋寿太郎（神奈川大学）

発行 シュープリント

協力 いすみ鉄道株式会社/いすみラーニングセンター

参考文献

[1] 真鶴町, 真鶴町まちづくり条例：美の基準：Design Code (2015).
 [2] 乾久美子/東京藝術大学 乾久美子研究室, 小さな風景からの学び：さまざまなサービスの表情, TOTO 出版 (2014).
 [3] 新潟県立佐渡総合高等学校, 佐渡に暮らす私は, 3710LAB (2021).

徳島県牟岐町をモデルとした集落の新たな調査手法の研究

ー建築フィールドワークによる集落のオープンデータ化ー

塩脇 祥* 野村 和宣**

Research on a New Survey Method for Villages Modeled on MuGi Town, Tokushima Prefecture

-Open data of settlements through architectural fieldwork-

Sho SHIOWAKI* Kazunori NOMURA**

1. はじめに

新たな都市開発の仕組みが都市部で形成されつつある一方で、地方集落では現状の情報や記録が曖昧であり、デジタル化していく社会構造の中で取り残されている状況が見受けられる。この状況は今後ますます広がる可能性がある。本研究では、地方に残された町並みや集落の文化構造を維持し、新たな調査手法を創出することを目的とし、実験的な調査手法による集落研究を行う。

2. 研究対象地

徳島県牟岐町を対象敷地として研究を行った。牟岐町は人口 2000 人の漁村や農村など複数の集落が存在する。その中でデジタル化としての調査対象を絞り、宮ノ本エリアと呼ばれる、徳島にいくつもある昔ながらの漁村集落に着目した。

本集落には、港町特有の漁港と住居の配置形成が見られ、特異な路地形状として知られる「あわえ」が複数存在する。本調査はこの「あわえ」に焦点をあてつつ、漁業集落における空間形成をより詳細に解析した。

これまでの建築的なフィールドワークだけではなく、3D スキャンによるモデル化を取り入れた新たな調査手法を行い、さらには、映像などを用いて集落の状態をより詳細に記録する。集落が持つ価値や町の歴史をアーカイブできるシステム構築を目指した。



図1 牟岐町俯瞰写真

*助手 建築学部建築学科
Research Associate, Dept. of Architecture and Building Engineering
**教授 建築学部建築学科
Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

3. 研究の方法

本研究では、実際に現地にて複数の調査方法を用いて集落の情報を記録した。以下の 3 つの具体的な実験方法による集落の研究を行った。

3-1. デザインサーヴェイ調査

デザインサーヴェイ手法を用いて、集落の調査を行った。実際に足を運び、実測や部分的な図面化（デジタル化）を行い、牟岐町に保管されている既存資料の収集も行った。

3-2. デジタル機器を用いた 3D による集落形成の分析

調査範囲を限定し、デジタル機器を用いて漁村特有の路地形状である「あわえ」において 3D スキャンによるデータ集積、360 度カメラ(静止画)による景観分析を行った。また、調査対象物を効果的に記録・分析できる機器の選定調査も同時に実施した。



図2 3D スキャナーによる撮影風景/i-pad を用いた集計

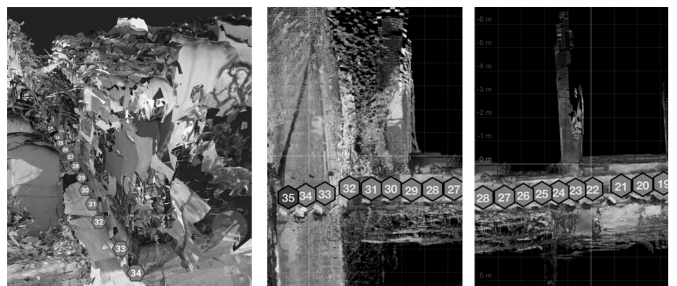


図3 点群データによる「あわえ」の 3D モデリング化

3-3. 映像/空撮を用いた集落景観のアーカイブ

映像による景観の記録方法を研究した。ドローンを用いて上空からの撮影を行い、多様なアングルでの撮影や環境音の記録など、実験的な調査を行った。また360度カメラを用いた動画による記録も実施した。

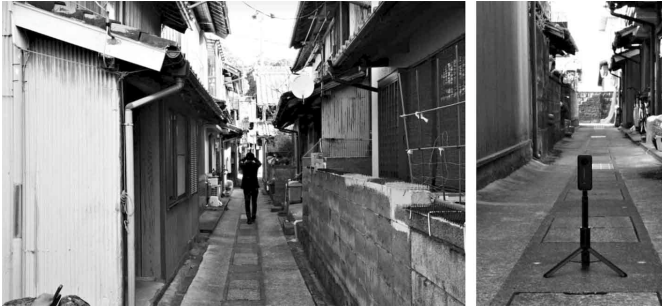


図4 360度カメラによる撮影風景(動画/静止画)



図5 360度カメラによる映像記録



図6 ドローンによる空撮記録(1)



図7 ドローンによる空撮記録(2)

4. 研究結果

今回の調査手法により、集落の情報を綿密に収集し、その形成や景観を記録・分析することができた。地方集落の文化や歴史をアーカイブし、保存・保護するための貴重な情報を得ることが本研究の取り組みである。集落においては、町の形式は様々に展開がみられ、そこには従来型の建築手法による調査では記録できない情報も多く存在したことは事実であろう。本研究での調査方法は、社会的な状況の変化を背景とした、建築の形式の変遷を読みとることができ、地方集落を更新し、保存するための新技術となる。今後、貴重な地域の文化や遺産を保護する一助となることを期待する。

【牟岐町調査詳細】

第一回調査

期間 2023(令和5)年9月3日～9月4日

場所 徳島県海部郡牟岐町牟岐浦宮ノ本

調査員 塩脇祥(神奈川大学)

野村和宣(神奈川大学)

山下由聖(神奈川大学).

①デザインサーヴェイ調査:

- 街並みのスケール感、素材、色彩の記録
- 建物の形態、構造、素材の調査
- 路地空間の形態、寸法、環境の調査
- 既存資料の収集

第二回調査

期間 2024(令和6)年3月5日～3月7日

場所 徳島県海部郡牟岐町牟岐浦宮ノ本

調査員 塩脇祥(神奈川大学)

野村和宣(神奈川大学)

関目峻行(調査協力者).

②デジタル機器を用いた3Dによる集落形成の分析:

- 「あわえ」を含む路地空間の形状の詳細な計測
- 3Dデータを用いた路地の形状、建物の形状、構造の立体的理解
- 通常画角と360度カメラを用いた宮ノ本エリアの景観撮影
- 通常画角カメラによる路地空間の視覚的特徴の記録
- 360度カメラによる俯瞰的な路地空間全体の把握

③映像/空撮を用いた集落景観のアーカイブ

- 宮ノ本エリアの空撮による集落形式の記録
- 集落全体の配置や地形の把握

参考文献

- [1] 牟岐町教育委員会, 牟岐町史 (1976).
- [2] 牟岐町, 牟岐町総合計画 (2021).
- [3] 明治大学神代研究室・法政大学宮脇ゼミナール, デザイン・サーヴェイ, 彰国社 (2012).
- [4] PLATEAU 技術チュートリアル編集委員会, 3D都市モデル PLATEAU 公式ファーストガイドスマートシティ・デジタルツイン・まちづくり DXに欠かせない「3D都市モデル」を理解し、実践するための入門解説集一, KADOKAWA (2023).

CFT 円形短柱におけるエネルギーパスを考慮した軸耐力の研究

島崎 和司* 楊 迪** 趙 衍剛***

ENERGY PATH ANALYSIS OF CIRCULAR CONFINED CONCRETE COLUMNS SUBJECTED TO AXIAL COMPRESSION

Kazushi SHIMAZAKI* Di Yang** Zhao Y.G.***

1. 緒言

本研究では、CFT 円形短柱におけるコンファインド効果を定式化するために、径厚比、鋼管強度とコンクリート強度をパラメータとして一体型平押し実験とアンボンド型中押し実験を行い、得られたデータをもとに、載荷経路、コンクリートの拘束係数 k 、鋼管の周方向応力成分比率 α と軸方向応力成分比率 β を算出し、付着の有無による耐力効果、寸法や径厚比効果とコンファインド効果の関係について定量的に考察する。現在までの CFT 円形短柱における実験データを収集し、整理・分析した上でデータベースを構築し、構築したデータベースを利用して、CFT 円形短柱の軸圧縮強さに関する各国の計算式を考察した上、新たに簡明な計算式を提案することを目的とする。

2. 研究方法

- 1) コンクリートの拘束係数の考察。コンファインド効果を定式化するには、まず CFT におけるコンクリートの拘束係数 k を明らかにする必要がある。コンクリートの拘束係数 k については 3.5~5.2 或いは 2.6~4.1 の範囲にあるといわれ、日本建築学会 CFT 指針、SRC 基準では $k=4.1$ を採用しているが具体的な根拠が示されず、拘束係数 k 、径厚比及び強度比にどのような関係があるか明確になっていない。本研究ではまず径厚比と強度比をパラメータとし、鋼管に軸方向力が作用していない中押しの中心圧縮実験を行い、拘束係数と径厚比及び強度比との関係を考察する。
- 2) 鋼管の周方向と軸方向応力成分比率の考察。累加強度理論から導いた CFT 柱の耐力式に鋼管の周方向応力成分比率と軸方向応力成分比率の影響を含んでおり、コンファインド効果を定式化するには、鋼管の周方向と軸方向応力成分比率、いわゆる載荷経路の影響を明らかにする必要がある。鋼管の周方向と軸方向応力成分比率について多く研究されているが、ほとんど実験で得られた応力歪み関係か

ら求めている。降伏後の多方向の応力歪み関係が複雑であり、鋼管の周方向と軸方向応力成分比率を正確に確定することが困難である。本研究では径厚比と強度比をパラメータとし、上述の中押しの中心圧縮実験と同じ条件で鋼管とコンクリートに両方とも載荷する平押しの中心圧縮実験を行い、2 種類の実験結果を比較することより鋼管の周方向と軸方向応力成分比率をそれぞれ算出し、鋼管の周方向と軸方向応力成分比率と径厚比及び強度比との関係を考察し、博士後期課程の学生を指導してまとめる。

3) 鋼管コンクリート以外への適用

鋼管コンクリート以外へ適用できるかの検討。一般的な拘束材料として繊維強化ポリマー (FRP) があり、これは耐食性に優れ、軽量で弾力性が高く、施工も容易である。

4. 研究内容

CFST 柱でも FRP 拘束コンクリート柱でも、軸耐力は構造工学において重要な安全設計の要素である。

長年にわたり、多くの実験的及び理論的研究が進められている。これらの研究は、実験データの経験的解析に基づくモデルや、能動的拘束コンクリートの理論に基づくモデルが含まれている。能動的拘束コンクリートと異なり、受動的拘束コンクリートは軸方向応力の増加に伴い横方向応力も増加する。

荷重過程で軸方向変形が増加すると、受動的拘束コンクリートのひび割れが進み、拘束応力も変化する。受動的拘束コンクリート柱の耐力モデルは、コンクリートと拘束材の相互作用メカニズムに基づいて確立されている。

鋼管 FRP ジャケットによるコンクリートの拘束は、本質的にエネルギー伝達プロセスである。この観点から、軸圧縮下で受動的に拘束されたコンクリート柱のエネルギー関係を詳細に分析し、ピーク強度でのエネルギー特性を比較することは、充填コンクリートと外部拘束材との相互作用の理解において重要である。

本研究では、受動的に拘束されたコンクリート柱のコンクリートと拘束材間の相互作用メカニズムをエネルギーの観点から初めて検討し、拘束材とコンクリート間のエネルギー関係を反映するエネルギーパス法を提案した。また、エネルギー比は拘束材とコンクリートが吸収するエネルギーの相関関係を示す。

*教授 建築学部建築学科

Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**大学院生 (工学研究科建築学専攻博士後期課程)

Graduate (D.C.), Course of Architecture and Building Engineering

***客員教授 建築学研究所

Visiting Professor, Institute for Architecture and Building Engineering

ピーク応力時のエネルギー比を分析することで、受動的に拘束されたコンクリート柱のエネルギー分布状態を明らかにすることができる。

5. 結論

本研究で得られた重要な結論を簡単にまとめると以下のようになる。

- 1) CFST 柱のコンクリートと鋼管の相互作用メカニズムを、エネルギーの観点から検討した。
- 2) CFST 柱のエネルギー伝達経路を定義し、一軸圧縮強度や鋼材強度、径厚比などのパラメータを基に実験的に分析した。
- 3) FRP 拘束コンクリート柱と FRP ジャケットの相互作用を、エネルギーの観点から調査した。
- 4) 一軸圧縮強度や FRP 層数などのパラメータに基づき、FRP 拘束コンクリート柱のエネルギー伝達経路を提案し、実験的に検証した。
- 5) 応力経路の分析に基づき、受動的拘束コンクリートの等価横応力を提案し、能動的拘束と受動的拘束のコンクリートの相関関係を明確にした。
- 6) コンクリートと鋼管のエネルギー分布を考慮した、CFST 柱の耐力モデルを開発した。

6. 予算

本研究は、大学院博士後期課程の楊迪氏によるもので、予算のほとんどは、副査である趙衍剛客員教授の渡航費に充てられた。

参考文献

- [1] Z.H. Lu and Y.G. Zhao, Suggested empirical models for the axial capacity of circular CFT stub columns, *Journal of Constructional Steel Research*, 66 (6), 850-862 (2010.6).
- [2] X.Y. Zhang, Y. Chen, X. Shen and Y. Zhu, Behavior of circular CFST columns subjected to different lateral impact energy, *Applied Sciences*, 9 (6), 1-15 (2016.1).
- [3] D. Gan, Study of static and seismic performance of short concrete columns restrained by steel tubes, Lanzhou University (2012).
- [4] G.D. Hatzigeorgiou, Numerical model for the behavior and capacity of circular CFT columns, Part I: Theory, *Engineering Structures*, 30 (6), 1579-1589 (2008.6).
- [5] S.Q. Lin, Y.G. Zhao, J.M. Li and Z.H. Lu, Confining Stress Path-Based Compressive Strength Model of Axially Loaded FRP-Confined Columns, *Journal of Composites for Construction*, 25 (1), p. 04020077 (2021).
- [6] A. Nanni and N.M. Bradford, FRP jacketed concrete under uniaxial compression, *Construction and Building Materials*, 9 (2), 115-124 (1995.10).
- [7] Y. Xiao and H. Wu, Compressive Behavior of Concrete Confined by Carbon Fiber Composite Jackets, *Journal of Materials in Civil Engineering*, 12 (2), 139-146 (2000).

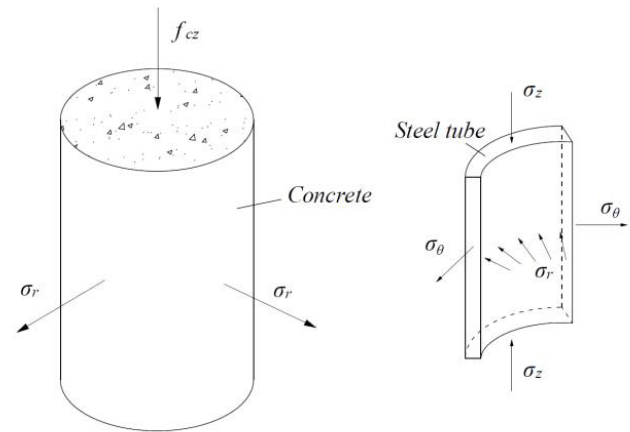


Fig. 1 Stress state of circular CFST column

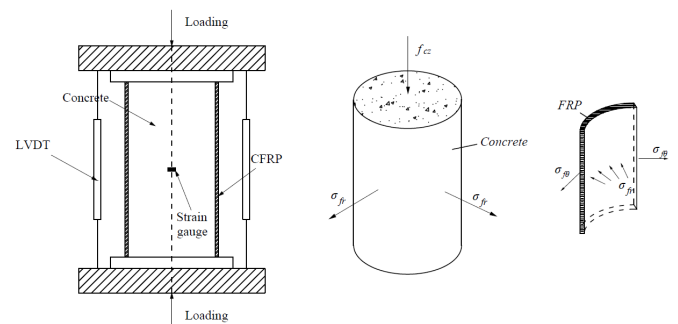


Fig.2 Force state of FRP confined concrete column

- [8] S.Q. Lin, Y.G. Zhao, and L. He, Stress paths of confined concrete in axially loaded circular concrete-filled steel tube stub columns. *Engineering Structures*, 173, 1019-1028 (2018.2).
- [9] Y.G. Zhao, S.Q. Lin, Loading paths of confined concrete in circular concrete loaded CFT stub columns subjected to axial compression. *Engineering Structures*, 156, 21-31 (2018.2).
- [10] F.E. Richart, A. Brandtzaeg, and R.L. Brown, A study of the failure of concrete under combined compressive stresses, University of Illinois. *Engineering Experiment Station. Bulletin*, 185 (1928).
- [11] J.B. Mander, M.J.N. Priestley, and R. Park, Theoretical Stress-Strain Model for Confined Concrete, *Journal of Structural Engineering*, 114 (8), 1804-1826 (1988.9).

研究分野紹介および研究活動

2023 年度

建築学系 構造コース

研究分野紹介

新機能型構法研究室

(島崎和司 教授, 白井佑樹 助教)

新しい機能を持った構造形式の研究, 鉄筋コンクリート構造の耐震性能, 使用性能等の性能設計に関する研究, 鉄筋コンクリート構造の損傷低減構造の実験的研究

耐震・耐風構造研究室

(吉江慶祐 教授, 楊暁雨 助教)

制振構造・免震構造の暴風・地震に対する動的挙動とその予測法に関する研究, 制振構造・免震構造の耐震および耐風構造安全性の検証方法・設計法に関する研究

サステナブル建築構造研究室

(藤田正則 教授, 中村慎 助教)

建築鋼構造分野において, 建築構造を骨組・部材・接合部・材料に分類して総合的に捉える構工法から, 分析的に捉える実験と解析, さらにそれらを実現するための設計までの全般にわたる研究を行っている

地震工学, 災害リスクマネジメント研究室

(朱牟田善治 教授, 落合努 助教)

地盤・構造物の振動特性・劣化特性の評価, サイスマック・マイクロゾーニング手法の開発, 災害リスク評価手法の開発, 地域防災力の評価方法の開発

研究論文 I(レフェリー付き論文)

(欧文誌)

1. H. Zhang, Y. G. Zhao, F. W. Ge, Y. Fang, T. Ochiai, Estimation of input energy spectrum from pseudo-velocity response spectrum incorporating the influences of magnitude, distance, and site conditions, *Engineering Structures*, 274 (2023).
2. H. Zhang, Y. G. Zhao, T. Ochiai, Y. Fang, Relationship between SDOF-Input-Energy and Fourier Amplitude Spectral Amplification Ratios, *Bulletin of the Seismological Society of America*, 13 (3) (2023).
3. M. Fujita, K. Awazu, M. Nakamura, K. Yamasaki, M. Iw

ata, Proposal and Application of Structural Soundness Monitoring System for the Buckling-Restrained Brace Using Steel Mortar Planks, *Steel Construction, Design and Research*, 2023.

(和文誌)

1. 中村慎, 瀧澤裕貴, 藤田正則, 緑川光正, 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースの実験的研究 - 充填材の影響を考慮した拘束材の局部破壊に関する検討-, *日本建築学会構造系論文集*, 88 (807), 844-855 (2023).
2. 佐藤宏貴, 坂上教夫, 白井佑樹, 島崎和司, ボイドスラブの長期たわみに関する実験的研究(その1): ボイドスラブの長期載荷実験, *日本建築学会構造系論文集*, 88 (811), 1391-1398 (2023).

研究論文 II(レフェリー付き Proceedings)

1. 花里利一, 白井佑樹, 落合努, 佐藤孝雄, 森井順之, 佐藤成, 国宝銅造阿弥陀如来坐像の地震対策 -その 1 災害・修復史と微動測定による基本的振動特性-, 第 16 回日本地震工学シンポジウム論文集, Day3-G419-08 (2023.11).
2. 白井佑樹, 花里利一, 佐藤孝雄, 山脇光瑠, 鈴木知晃, 今井連, 島崎和司, 新津靖, 国宝銅造阿弥陀如来坐像の地震対策 その 2 地震モニタリングと 3 次元モデルによる動的解析, 第 16 回日本地震工学シンポジウム論文集, Day3-G419-09 (2023.11).
3. 大鶴駿介, 楊暁雨, 黒澤未来, 吉敷祥一, ALC パネルの取付部における引張力に対する力学挙動, *鋼構造年次論文報告集*, 31, 695-700 (2023.11).

口頭発表

1. 白井佑樹, 伊山潤, 涌井将貴, 島崎和司, 体育館を対象とした継続使用性の判定方法に関する検討 その 2 露出柱脚部におけるモルタルの有無が与える影響, *日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)*, 201-202 (2023.7).
2. 山脇光瑠, 白井佑樹, 花里利一, 島崎和司, 今井連, 鈴木知晃, 佐藤孝雄, 新津靖, 鎌倉大仏保存活用

- に向けた耐震安全性能評価 その1 地震動観測と3次元有限要素解析モデルの作成, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 901-902 (2023.7).
3. 今井連, 白井佑樹, 花里利一, 島崎和司, 山脇光瑠, 鈴木知晃, 佐藤孝雄, 新津靖, 鎌倉大仏保存活用に向けた耐震安全性能評価 その2 3次元有限要素固有値解析と常時微動との比較, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 903-904 (2023.7).
 4. 佐藤信夫, 花里利一, 島崎和司, 白井佑樹, 佐藤宏貴, 三須 基規, 坂本 功:伝統木造建物の柱脚部制振に関する研究 その4 一定軸力下における動の実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 333-334 (2023.7).
 5. 長谷川泉輝, 白井佑樹, 島崎和司, 小橋資子:デッキ合成スラブの構造性能に関する研究 その3 -デッキプレート形状が合成効果に与える影響の実験的検討-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 1399-1400 (2023.7).
 6. 西郷凜太郎, 島崎和司, 白井佑樹, 逆対称曲げを受ける柱の端部境界条件の違いによる耐力の評価 その3 既往実験の解析的検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 129-130 (2023.7).
 7. 鈴木俊裕, 白井佑樹, 島崎和司, 部材端に軸降伏型履歴ダンパーを適用したアンボンドプレストレストコンクリート梁の性能検証 その5 立体骨組みモデルによる解析的検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 583-584 (2023.7).
 8. 陳政昊, 花里利一, 白井佑樹, 島崎和司, 佐藤宏貴, 新津靖, 歴史的組積造建物の動的安全変形限界その1 面内破壊モデルの予備加振実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 625-626 (2023.7).
 9. 楊曉雨, 大鶴駿介, 黒澤未来, 吉敷祥一, 山下泰介, 柴田益弘, ALC パネルにおける埋込みアンカーの引抜き耐力の実験的評価 その 1: 曲げ実験と引張実験の計画, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 699-700 (2023.7).
 10. S. Ozuru, X. Yang, M. Kurosawa, S. Kishiki, T. Yamashita and M. Shibata, Pullout Strength of Embedded Anchors in Autoclaved Lightweight Concrete Panels, 12th International Symposium on Steel Structures, 670-673, Korea (2023.11).
 11. 大鶴駿介, 吉敷祥一, 楊曉雨, 黒澤未来, ALC パネルにおける取付金物の剛性・耐力, 日本建築学会関東支部研究報告集, 94, 105-108 (2024.3).
 12. 藤田正則, 中村慎, 岩田衛, 充填材表面に不陸を有する座屈拘束ブレースの実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 1065-1066 (2023.7).
 13. 中村慎, 藤田正則, 緑川光正, 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースにおける拘束材の局部破壊に関する研究(その4) 芯材強軸方向の局部破壊に関する考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 1063-1064 (2023.7).
 14. 山田龍平, 中村慎, 藤田正則, 曲げ履歴を受けたSS鋼材の機械的性質に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 835-836 (2023.7).
 15. 林佑哉, 湊田安浩, 中村慎, 藤田正則, 鋼プレート付LVL 梁とRC 床の接合部の面内せん断実験—鋼プレートおよび接合材の影響—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 423-424 (2023.7).
 16. 田村和夫, 藤田正則, 浸水被害を受けた木造住宅の復旧に関する調査報告, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 243-244 (2023.7).
 17. 久田嘉章, 片野彩歌, 村上正浩, 田村和夫, 藤田正則, 令和2 年球磨川水害における建築物の被害調査と木造家屋の被害関数の検討 その1: 対象地と調査方法, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 53-54 (2023.7).
 18. 片野彩歌, 久田嘉章, 村上正浩, 田村和夫, 藤田正則: 令和2 年球磨川水害における建築物の被害調査と木造家屋の被害関数の検討 その2: 調査結果と被害関数の検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 55-56 (2023.7).
 19. 朱牟田善治, 村田颯也, 落合努, 道路橋の定期点検記録に基づく劣化要因の特定, 令和5年度土木学会全国大会第78回年次学術講演会, VI-499 (2023.9).
 20. 朱牟田善治, 落合努, 新津靖, 花里利一, 風荷重に対する五重塔の変形特性, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 109-110 (2023.7).
 21. 落合努, 朱牟田善治, 花里利一, 白井佑樹, 佐藤信夫, 郡山市開成館を対象とした地震動の再現解析, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 771-772 (2023.7).
 22. 朱牟田善治, 落合努, 構造物の劣化診断と災害時復旧迅速化に寄与するセンシングデバイスの試作, 2023年電気学会 電子・情報・システム部門大会, OS8-9 (2023.8).
 23. 遠藤尚希, 朱牟田善治, 配電設備の台風被害予測システム(RAMPT)の精度向上に係る検討 -樹木倒壊と土砂災害による被害を考慮した補正手法の検討-, 2023年電気学会 電子・情報・システム部門大会, OS8-2 (2023.8).
 24. 落合努, 朱牟田善治, 白井佑樹, 涌井将貴, 伊山潤, 避難施設を対象とした構造ヘルスマニタリングの試み, 2023年電気学会 電子・情報・システム部門大会, OS8-7 (2023.8).
 25. 落合努, 荏本孝久, 宮野道雄, 生田英輔, 小田義也, 墓石転倒調査による推定加速度と微動観測結果の比較 -1978年宮城県沖地震を対象として-, 令和5年

- 度土木学会全国大会第78回年次学術講演会, CS10-13 (2023.9).
26. 荻本孝久, 落合努, 統計データに基づく地震災害リスクの相対評価と地域間比較, 第16回日本地震工学シンポジウム, Day1-C2-PB01(2023.11).
 27. 落合努, 小田義也, 三辻和弥, 先名重樹, 荻本孝久, ボーリングデータと常時微動観測を活用した三次元地下構造モデル作成手法の検討, 第16回日本地震工学シンポジウム, Day1-G417-20 (2023.11).
 28. 朱牟田善治, 落合努, 地盤増幅率の再現性に関する事例分析, 第16回日本地震工学シンポジウム Day1-G419-14 (2023.11).
 29. T. Enomoto, M. Navarro, T. Ochiai, Importance of using microtremor observations in seismic microzoning studies for understanding soil condition in seismic risk reduction procedures, 13th International Workshop on Seismic Microzoning and Risk Reduction, KL01 (2023.11).
 30. Y. Shumuta, T. Ochiai, T. Tenjin, Reproducibility of seismic ground motion amplification and residential home damage in the Fukushima area, 13th International Workshop on Seismic Microzoning and Risk Reduction, P01 (2023.11).
 31. T. Ochiai, Y. Shumuta, T. Enomoto, Y. Oda, Seismic Microzoning Using Microtremors H/V Spectral Ratios: A Case Study in the Shonai Plain, Northern Japan, 13th International Workshop on Seismic Microzoning and Risk Reduction, P12 (2023.11).
 32. 郷右近英臣, 松川杏寧, 落合努, 島山久, 杉安和也, 寅屋敷哲也, 倉田和己, 河本尋子, 佐藤翔輔, 地域安全学夏の学校2023 -基礎から学ぶ防災・減災- 地域安全学領域における若手人材育成 その7, 2023年地域安全学会梗概集, 53, 61-64 (2023.11).
 33. 朱牟田善治, 落合努, 道路橋の振動特性を把握するセンサネットワークシステムの試作と計測, 第14回インフラ・ライフライン減災対策シンポジウム講演論文集, 122-127 (2024.1).

学術誌

1. 北村春幸, 吉江慶祐, 我が国の鉄骨造の技術的変遷 第15回設計用地震動・風荷重と設計クライテリア(第1回), ビルディングレター, 日本建築センター (2023.4).
2. 吉江慶祐, 北村春幸, 我が国の鉄骨造の技術的変遷 第15回設計用地震動・風荷重と設計クライテリア(第2回), ビルディングレター, 日本建築センター (2023.5).
3. 落合努, 盛土造成地等を対象とした微動観測による地

盤構造の推定事例, 基礎工, 52 (3), 38-40 (2024.3).

調査報告書

1. 藤田正則, 田村和夫, 中村慎, 長野市長沼体育館の水害調査と氾濫時作用外力に関する考察 (2022.11).

講演・展示会

1. 吉江慶祐, 免震建築物の耐風設計法, 第165回フロンティア材料研究所学術講演会 (東京工業大学, 2023.10).
2. 吉江慶祐, 免震・制振建物の耐風設計, 第15回振動技術展・基調講演 (パシフィコ横浜, 2024.2).
3. 朱牟田善治, 自然災害リスクと都市構造, 神奈川県社会連携部高大連携協議会事務局 (2023).
4. 朱牟田善治, 電力ライフラインの近年の災害事例とその対策, 第8回防災推進国民大会, 「デジタルツイン×防災」が紡ぎだす社会の未来予想図, 豊穡な社会のための研究センター「もしも×可視化」研究所主催セッション, 神奈川県の間東大震災から100年の教訓を未来につなぐ (横浜国立大学, 2023.9).
5. 朱牟田善治, 地震災害発生時の停電による被害と影響, 第8回防災推進国民大会, 9Os-7 オリジナルセッション, 神奈川県の間東大震災から100年の教訓を未来につなぐ (横浜国立大学, 2023.9).
6. 落合努, 北網島小学校における防災支援活動, 第8回防災推進国民大会, Os-7 オリジナルセッション, 神奈川県の間東大震災から100年の教訓を未来につなぐ (横浜国立大学, 2023.9).
7. 朱牟田善治, 電力レジリエンス向上に向けた災害情報の活用技術, 2023年度送配電設備の風荷重・応答評価技術研修コース (電力中央研究所, 2023.9).
8. 朱牟田善治, センシング技術を用いた都市の災害リスクマネジメント, 神奈川大学テクノフェスタ2023 暮らしと環境の未来 住み続けられるまちづくりを (神奈川大学, 2023.11).
9. 朱牟田善治, DX時代の空間情報 DX時代の空間情報 -電力ライフラインの課題-, GITA-JAPAN 第34回コンファレンス, DX時代のパネルディスカッション, GITA JAPAN (全国町村会館, 2023.12).
10. Y. Shumuta, Resilience of Electric Power System against Natural Disasters -Lesson from recent natural disasters in electric power systems, 広島大学特別講義 (広島, 2023.12).
11. 落合努, 横浜の地形から見る地域防災×デジタルファブリケーション (ファボラボみなとみらい, 2024.2).

12. 朱牟田善治, 大規模災害時における停電・ブラックアウトの発生可能性とその影響, 2023 年度後期ボウサイ連続講演会, 21 世紀の複合災害のもとで考える防災・減災 (神奈川大学みなとみらい, 2024.2).
 13. 朱牟田善治, 能登半島地震における被害の特徴とその復旧 -電柱被害と建物被害の調査概要報告-, かながわの人と智をつなぐ防災・減災ネットワーク, 関東大震災から令和 6 年能登半島地震まで, 自然災害に関する研究成果から学ぶ (東海大学, 2024.3).
 14. 落合努, 能登半島地震における被害と地盤の特徴について, かながわの人と智をつなぐ防災・減災ネットワーク, 関東大震災から令和6年能登半島地震まで, 自然災害に関する研究成果から学ぶ (東海大学, 2024.3).
- 度検証と豪雪地域への適用による被害軽減への試み, 令和 5 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 23K04034.
 12. 落合努(分担), 表層地盤リスク把握による地震時の墓石転倒及び木造家屋被害に基づく震度推定値の検証, 令和 4 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 22K02117.
 13. 落合努(代表), 地盤の 3 次元グリッドモデルの作成と防災への利活用に関する研究, 公益財団法人高橋産業研究財団, No.355.
 14. 朱牟田善治(代表), 山家京子(分担), 他, アジア地域の災害軽減化と防災・減災ネットワーク構築に関する研究, 神奈川大学アジア研究所共同研究.

助成金

1. 島崎和司(代表), 白井佑樹, 佐藤宏貴(分担), 鉄筋コンクリート柱部材の材端部拘束による曲げ・せん断挙動への影響に関する研究, 令和 3 年度科学研究費補助金, 基盤研究(B), 課題番号 21H01482.
2. 花里利一(代表), 白井佑樹(分担)他, 小樽歴史的木骨石造建造物の耐震調査, 2023 年度(第7回)松井角平記念財団研究助成.
3. 白井佑樹(代表), 鉄骨造体育館の柱脚とブレースを対象としたひずみ計測による損傷検知手法, 2023 年度日本鉄鋼連盟・鋼構造研究支援助成.
4. 白井佑樹(代表), 3 次元点群データを活用した鎌倉大仏の耐震安全性能評価, 2023 年度大林財団研究助成.
5. 島崎和司(代表), 花里利一, 内田青蔵, 野村和宣, 朱牟田善治, 大熊武司, 須崎文代, 白井佑樹, 落合努, 姜明采(共同), 文化遺産の保全・活用・防災に関する研究-指定文化遺産から未指定文化遺産まで-, 神奈川大学分野横断型研究推進事業.
6. 藤田正則(代表), 鋼構造のリユースを想定した部材の損傷評価に関する研究, 令和 4 年度科学研究費補助金, 基盤研究 B, 課題番号 22H01646.
7. 中村慎(代表), 小開口を有する RC 造方立壁の耐震診断・改修設計手法に関する研究, 令和 5 年度科学研究費補助金, 若手研究, 課題番号 23K13446.
8. 藤田正則(代表), 座屈拘束ブレースの実験, 奨学寄附金, インフォメディア(株).
9. 藤田正則(代表), 座屈拘束ブレースの実験, 奨学寄附金, 川金コアテック(株).
10. 朱牟田善治(代表), 建築構造物の劣化特性を把握するセンシング技術の開発, 2023 年度神奈川大学大学院工学研究科共同研究 A.
11. 落合努(代表), ハイブリッドな地盤構造推定法の精

受託研究・共同研究

1. 島崎和司, 白井佑樹, 合成スラブ用デッキプレート
の蟻溝形状の解析的研究, JFE 建材.
2. 島崎和司, 白井佑樹, 木造耐久壁パネルの架構性能実験, 株式会社安藤・間.
3. 島崎和司, 白井佑樹, 耐震・制振機能を有する RC 造二次壁の研究, 株式会社岡部.
4. 島崎和司, 白井佑樹, 耐力壁の増設に頼らない伝統的な木造建築の新たな耐震補強工法の開発, 松井建設株式会社.
5. 藤田正則(代表), 3R配慮建築物のリユース検討(その 2), 共同研究, 大林組(株).
6. 藤田正則(代表), 座屈拘束ブレースにおけるクリアランス調整工法と局部破壊に関する研究, 共同研究, 大和ハウス工業(株).
7. 落合努, 他, 郡山市開成館の振動調査, 松井建設.
8. 落合努, 他, 常時微動を用いた地盤構造評価手法や適用性に関する検討, 防災科学技術研究所.

海外出張

1. 朱牟田善治, 落合努, 13th International Workshop on Seismic Microzoning and Risk Reduction 発表, Alicante, Spain (2023.11).
2. 朱牟田善治, 落合努, TDMRC (Tsunami and Disaster Mitigation Research Center) 現地調査と共同研究の打合せ, Aceh, Indonesia (2024.3).
3. 花里利一, 朱牟田善治, 落合努, National Technical University of Athens 現地調査と共同研究打合せ, Athene, Greece (2024.3).

褒賞

1. 朱牟田善治(他)(代表), 配電設備を対象とした早期電力復旧情報プラットフォーム RESI の開発と社会実装研究業績賞, 一般財団電力中央研究所 (2023.11).

その他

1. 落合努, 白井佑樹, 小学校向け防災ワークショップを開催, 神奈川大学 HP (2023.9).
2. 朱牟田善治, 次世代に残したいという人の思いと地域レジリエアンス, 神奈川大学評論, 104, 203, 168 (2023.11).
3. 朱牟田善治, 災害時の復旧活動支援に期待 情報共有プラットフォーム本格運用へ, エネルギーフォーラム (2024.3).

建築学系 環境コース

研究分野紹介

建築環境工学研究室

(岩本静男 教授, 藤本遼 助手)

室内外気流の数値解析に関する研究, 温冷感指標に関する研究, 空調室内の温熱・空気環境に関する研究, 建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究, 室内外温熱環境における着衣の影響に関する研究

音・光環境研究室

(安田洋介 教授, 森長誠 助教)

音環境設計のための汎用的な音響数値シミュレーション手法の開発, 室内音場予測, 騒音伝搬対策, 建築部材の音響特性の把握・モデル化, 床衝撃音低減機構の開発, 都市騒音の予測・制御, 音響心理実験, 環境騒音に対する社会調査, 音環境・視環境・複合環境の評価など

建築環境・設備研究室

(芹川真緒 准教授, 吉浦温雅 助教)

建築環境・設備分野に関する研究を行っている。特に, 住宅の温熱環境や省エネルギーを中心に扱い, 住宅の室温やエネルギー消費量のシミュレーション, 温熱環境の評価, 省エネルギー方策の提案等を実施している

研究論文 I(レフェリー付き論文)

(欧文誌)

1. T. Masumoto, M. Mori, Y. Yasuda, N. Inoue and T. Sakuma, Fast multipole boundary element method for aerodynamic sound field analysis based on Lighthill's equation, *Journal of Theoretical and Computational Acoustics*, 31 (3), 2350009 (2023.9).
2. M. Morinaga, J. Mori and I. Yamamoto, Aircraft model identification using convolutional neural network trained by those noises in a wide area around an airfield, *Acoustical Science and Technology*, 44 (2), 131-136 (2023).
3. T. T. H. N. Nguyen, B. L. Trieu, T. L. Nguyen, M. Moringa, Y. Hiraguri, T. Morihara, Y. Sasazawa, T. Q. H. Nguyen and Takashi Yano, Models of Aviation Noise Impact in the Context of Operation Decrease at Tan Son Nhat Airport, *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 20 (8), 5450 (2023).
4. T. L. Nguyen and M. Morinaga, Effect of roadside trees on pedestrians' psychological evaluation of traffic noise, *Frontiers in Psychology*, 14 (2023).
5. T. L. Nguyen, K. Nagahata, M. Morinaga and H. Ma, Cross-cultural comparison of soundscape evaluation between Japanese and Vietnamese using standardized attributes, *Applied Acoustics*, 213, 109627 (2023).

(和文誌)

1. 古味由惟, 横島潤紀, 森長誠, 辻村壮平, 山内勝也, 白橋良宏, 山崎徹, 住宅種別ごとの道路交通騒音に対する住民反応への曝露量と非音響要因の影響, 自動車技術会論文集, 54 (5), 880-886 (2023).
2. 芹川真緒, 潜熱蓄熱材が導入された住宅の室温日較差の簡易的な予測方法の提案, 日本建築学会技術報告集, 29(72), 858-863(2023).
3. 芹川真緒, 辻丸のりえ, 佐藤誠, 住吉大輔, 宮田征門, 柳原隆司, 温暖地におけるビル用マルチエアコンの稼働実態調査, 空気調和・衛生工学会論文集, 319, 33-40 (2023).
4. 芹川真緒, 吉浦温雅, 近年の生活の変化を踏まえた関東地方の築浅物件における家電・住宅設備の使用実態調査, 日本建築学会技術報告集, 30 (74), 245-250 (2024).

研究論文 II(レフェリー付き Proceedings)

1. S. Iwamoto, R. Fujimoto, K. Sakaue, T. Mitsunaga, Study on simulation of building drainage systems by CFD, Part 1 Verification based on existing experimental results, the Proceedings of CIB-W062 Symposium

- (Leuven, Belgium, 2023.8).
2. T. Masumoto, M. Mori, Y. Yasuda, N. Inoue and T. Sakuma, Wideband fast multipole boundary element method for flow-induced noise analysis based on Lighthill's equation, Proc. Inter-Noise 2023, 1374-1384 (Chiba, 2023.8).
 3. Y. Yasuda, S. Nishimura, Y. Kamiya and M. Morinaga, Effect of embankment slope on road traffic noise propagation: numerical investigation and construction of correction formula for difference by slope angle, Proc. Inter-Noise 2023, 1519-1528 (Chiba, 2023. 8). [invited]
 4. R. Hagiwara, T. Sakuma, Y. Yasuda and T. Masumoto, Determination of sound-field diffusion indices based on FMBEM incidence directivity analysis, Proc. Inter-Noise 2023, 3162-3168 (Chiba, 2023.8).
 5. S. Hyodo, Y. Yamashita, M. Kobayashi, M. Morinaga and Y. Yasuda, Development of a dry-type double floor with high vibration isolation for improvement of floor impact sound insulation performance on CLT buildings, Proc. Inter-Noise 2023, 4738-4747 (Chiba, 2023.8). [invited]
 6. T. Morihara, Y. Murakami, K. Shimoyama, M. Morinaga, S. Yokoshima, S. Tsujimura, Y. Hiraguri and T. Yano, Effects of step changes in railway noise exposure and earthquakes on sleep disturbance, Proc. Inter-Noise 2023, 322-331 (Chiba, 2023.8).
 7. M. Morinaga, T. Kobayashi, K. Hanaka, K. Shimoyama, T. Nakazawa and N. Shinohara, A laboratory experiment on subjective evaluation of the sound quality of aircraft noise, Proc. Inter-Noise 2023, 3943-3950 (Chiba, 2023.8). [invited]
 8. Y. Koyama, J. Toyotani, M. Morinaga, H. Lee and Y. Shimizu, On a recording method for ambient sounds with a confidential speech, Proc. Inter-Noise 2023, 4163-4167 (Chiba, 2023.8).
 9. B. L. Trieu, T. T. Hong, N. Nguyen, T. L. Nguyen, M. Morinaga, T. Morihara, Y. Hiraguri, T. Yano, Y. Sasazawa, Q. V. Tran, D. T. Bui, H. H. Tran, T. N. D. Nguye, P. Nguye and T. Do, Preliminary survey on the effects of indoor noise in the hospital located close to Tan Son Nhat Airport, Proc. Inter-Noise 2023, 5738-5748 (Chiba, 2023.8).
 10. T. L. Nguyen, T. T. Hong, N. Nguyen, B. L. Trieu, M. Morinaga, T. Morihara, Y. Hiraguri, T. Yano and Y. Sasazawa, A study examining the long-term effects of aircraft noise on the surrounding residents before the opening of Long Thanh Airport, Proc. Inter-Noise 2023, 6077-6087 (Chiba, 2023.8).
 11. N. Shinohara, K. Shimoyama, T. Nakazawa, M. Morinaga, T. Kobayashi and K. Hanaka, Pilot study on evaluation indices for aircraft noise considering sound quality, Proc. Inter-Noise 2023, 6469-6476 (Chiba, 2023.8). [invited]
 12. 古味由惟, 横島潤紀, 森長誠, 辻村壮平, 山内勝也, 白橋良宏, 山崎徹, 住宅種別ごとの道路交通騒音に対する住民反応への曝露量と非音響要因の影響, 自動車技術会論文集, 54 (5), 880-886 (2023.9).
 13. A. Yoshiura, M. Serikawa, Assessing the Heat-shielding Effect of Double Roofing with Air Passage, 20th International Symposium and Conference of Asia Institute of Urban (Seoul, 2023.11).

口頭発表

1. 藤本遼, 岩本静男, CFD 解析による大規模講義室内の温熱環境評価 その 4 JOS-2 モデルを用いた非定常解析, 第 47 回人間生活・環境系シンポジウム(福岡), 35-38 (2023.11).
2. 五十嵐希美, 傳法谷郁乃, 岩本静男, 藤本遼, CFD 解析を用いたファン付き作業服に関する基礎的研究, 第 47 回人間生活・環境系シンポジウム(福岡), 51-54 (2023.11).
3. 福島歩実, 傳法谷郁乃, 岩本静男, 藤本遼, 染谷俊介, 杉山拓真, 藤崎幸市郎, 栗原浩平, 建設作業員の熱中症対策に関する研究 (その 6) ファン付き作業服着用時におけるフルハーネスの装着方法が生理・心理反応に及ぼす影響, 第 47 回人間生活・環境系シンポジウム(福岡), 55-56 (2023.11).
4. 萩原諒, 佐久間哲哉, 安田洋介, [選抜梗概] FMBEM 入射指向性解析に基づく室内音場の拡散性評価, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 211-214 (京都, 2023.7).
5. 兵藤伸也, 山下祐, 小林真人, 森長誠, 安田洋介, CLT 建築物の床衝撃音遮断性能向上のための乾式二重床の開発, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 337-338 (京都, 2023.7).
6. 福島昭則, 安田洋介, 坂本慎一, エネルギー相補性を仮定した鏡面反射予測モデル, 日本音響学会講演論文集(秋季), 503-506 (名古屋, 2023.9).
7. 兵藤伸也, 山下祐, 小林真人, 森長誠, 安田洋介, 箱型モデルを用いた CLT 建築物の床衝撃音に関する研究 —乾式二重床の設置が床スラブと壁面の振動特性に及ぼす影響—, 日本音響学会講演論文集(秋季), 611-614 (名古屋, 2023.9).
8. 萩原諒, 佐久間哲哉, 安田洋介, 榎本貴之, FMBEM 入射指向性解析に基づく拡散性指標のオクターブバンド分析, 日本音響学会講演論文集(秋季), 763-764 (名古屋, 2023.9).
9. 兵藤伸也, 山下祐, 小林真人, 森長誠, 安田洋介,

- CLT 建築物の床衝撃音対策に関する研究 — 乾式二重床の設置が床スラブと壁面の振動特性に及ぼす影響 —, 日本音響学会建築音響研究会資料, AA2023-27 (オンライン, 2023.9).
10. 西野健太郎, 横島潤紀, 森淳一, 森長誠, 山元一平, 魚眼レンズを搭載したカメラを用いた航空機飛行経路把握法の確立, 日本音響学会騒音・振動研究会資料, N2023-35 (横浜, 2023.8).
 11. 小泊楓奈, 森淳一, 森長誠, 山元一平, 花香和之, 川瀬康彰, 航空機騒音の AI 識別: 過去の研究と今後の課題, 日本音響学会騒音・振動研究会資料, N2023-36 (横浜, 2023.8).
 12. 森長誠, 横島潤紀, 小林知尋, 横山栄, 牧野康一, 土肥哲也, 山崎徹, 低周波音による圧迫感・振動感の閾値に関する研究, 日本音響学会騒音・振動研究会資料, N2023-41 (横浜, 2023.8).
 13. 小泊楓奈, 森淳一, 森長誠, 土屋健伸, 山元一平, 花香和之, 川瀬康彰, 航空機騒音の AI 識別: CNN を用いた地上騒音と飛行騒音の分類, 日本音響学会講演論文集 (秋季), 481-484 (名古屋, 2023.9).
 14. 小松史弥, 土屋健伸, 森淳一, 森長誠, 横島潤紀, 西野健太郎, 山元一平, 魚眼カメラを搭載した IoT システムによる航空機測位の計測精度, 日本音響学会講演論文集 (秋季), 491-494 (名古屋, 2023.9).
 15. 横島潤紀, 森長誠, 牧野康一, 土肥哲也, 横山栄, 小林知尋, 山崎徹, 低周波数成分を含む交通騒音の主観評価・その 1 — 圧迫感・振動感及びイベント回数の影響 —, 日本音響学会講演論文集 (秋季), 553-556 (名古屋, 2023.9).
 16. 森長誠, 横島潤紀, 小林知尋, 横山栄, 牧野康一, 土肥哲也, 山崎徹, 低周波数成分を含む交通騒音の主観評価・その 2 — 低周波数成分による「気になる」印象の違い —, 日本音響学会講演論文集 (秋季), 557-560 (名古屋, 2023.9).
 17. 古味由惟, 横島潤紀, 森長誠, 須田直樹, 梅崎良樹, 山崎徹, 居住者視点に基づく調査票による社会反応の基礎検討, 日本音響学会講演論文集 (秋季), 573-574 (名古屋, 2023.9).
 18. 西井朋也, 森淳一, 森長誠, 加振信号を用いた CNN による外壁タイルの健全性評価, 日本音響学会講演論文集 (秋季), 791-792 (名古屋, 2023.9).
 19. 一木智之, 福島昭則, 安田洋介, 最短経路と交差経路による回折計算値の差異について, 日本音響学会騒音・振動研究会資料, N-2024-03 (神戸, オンライン併用, 2024.1).
 20. 萩原諒, 榎本貴之, 安田洋介, 佐久間哲哉, FMBEM 入射指向性解析に基づく不整形残響室の拡散性評価, 日本音響学会講演論文集 (春季), 441-442 (東京, 2024.3).
 21. 岡田恭明, 安田洋介, 坂本慎一, 一木智之, 穴井謙, 山内勝也, 道路交通騒音の予測モデル“ASJ RTN-Model 2023” — 2023 年版モデルの概要 —, 日本音響学会講演論文集 (春季), 1197-1200 (東京, 2024.3).
 22. 安田洋介, 一木智之, 福島昭則, 坂本慎一, 横田考俊, 道路交通騒音の予測モデル“ASJ RTN-Model 2023” — 伝搬計算方法 —, 日本音響学会講演論文集 (春季), 1203-1206 (東京, 2024.3).
 23. 野澤文珠香, 季思雨, 谷口景一朗, 岸本尚子, 芹川真緒, 佐藤誠, 高瀬幸造, 前真之, 井上隆, 実大実験棟を用いたダイレクトゲイン手法の設計法に関する研究 — PCM 敷設と蓄熱用ヒーターを用いた吸熱量に関する検証 —, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿), 969-970 (京都, 2023.7).
 24. 池本和大, 山本正顕, 佐藤誠, 辻丸のりえ, 芹川真緒, ZEH-M 実績調査に関する研究 季節別アンケートによる ZEH-M 導入効果検証 (その 2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿), 1131-1132 (京都, 2023.7).
 25. 芹川真緒, 海塩渉, 中野淳太, 秋元孝之, 伊香賀俊治, 村上周三, SDGs を踏まえたスマートウェルネス住宅の評価に関する研究 その 3 高い断熱性能を有する住宅に関するケーススタディ, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿), 2403-2404 (京都, 2023.7).
 26. 池本和大, 山本正顕, 佐藤誠, 辻丸のりえ, 芹川真緒, ZEH-M Oriented における導入効果検証 (第 1 報) 調査概要及び年間アンケート調査結果, 空気調和・衛生工学会大会 (福井, 2023.9).
 27. 池本和大, 山本正顕, 佐藤誠, 辻丸のりえ, 芹川真緒, ZEH-M Oriented における導入効果検証 (第 2 報) 年間エネルギー消費量の分析, 空気調和・衛生工学会大会 (福井, 2023.9).
 28. 渡邊陽介, 長谷川巖, 飯田玲香, 佐藤誠, 芹川真緒, 村上周三, 外皮・躯体と設備・機器の総合エネルギーシミュレーションツール「BEST」の開発 (その 270) BEST-H (住宅環境・健康評価ツール) の概要・機能, 空気調和・衛生工学会大会 (福井, 2023.9).
 29. 芹川真緒, 吉浦温雅, 住宅の室温・熱負荷計算の結果に影響を与える要因に関する研究 住宅内の建具の開閉状況の把握と影響度の調査, 空気調和・衛生工学会大会 (福井, 2023.9).

学術誌

1. 笹澤吉明, 森長誠, T. L. Nguyen, 騒音環境が及ぼす睡眠, 心身への影響 — 快眠のための騒音への対策 —, 睡眠と環境, 17 (1), 15-24 (2023).
2. 小林真人, 兵藤伸也, 安田洋介, 箱型モデルを用い

- た CLT 造の重量床衝撃音に関する検討, 音響技術, 52 (4), 70-73 (2023).
- 安田洋介, 古賀貴士, 建築音響入門のための文献 20 選, 騒音制御, 47 (6), 254-259 (2023).

調査報告書

- 安田洋介(分担), 高速道路総合技術研究所, 日本音響学会, 令和 4 年度 道路交通騒音の予測精度向上に関する研究 報告書 (2023.4).

講演・展示会

- 芹川真緒, 実機の挙動や部分負荷特性, 住宅・建築 SDGs 推進センター, シンポジウム「非住宅建築物の熱源機器容量設計手法の再考～事例と研究からみた課題と対策～」(東京, 2023.11).

助成金

- 岩本静男, 傳法谷郁乃, 多様化する給湯用熱源の一次エネルギー消費量算定, 令和 2 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 20K04817.
- 小山由美, 豊谷純, 森長誠(分担), 医療施設における環境音の新規測定技術の安全精度と有効性の検証, 令和 3 年度科学研究費補助金, 基盤研究 (C), 課題番号 21K10288.
- 森長誠(代表), 横島潤紀, 山崎徹, 低周波数成分を含む環境騒音の評価指標の確立, 令和 4 年度科学研究費補助金, 基盤研究 (C), 課題番号 22K04437.
- 山崎徹, 森長誠, 安田洋介(分担), 栗原海, 横島潤紀, 白橋良宏, 須田直樹, 道路交通騒音の長期曝露による影響評価のための縦断的調査手法の開発, 2022 年度神奈川大学分野横断型研究推進事業助成金.
- 森淳一, 朝倉巧, 森長誠(分担), 辻村壮平, 先端環境観測技術を応用した長期音響暴露反応に基づく動物の行動管理法の構築, 令和 5 年度科学研究費補助金, 挑戦的研究 (萌芽), 課題番号 23K17778.

受託研究

- 岩本静男, ヒートポンプ給湯機の部分負荷運転時の一次エネルギー消費量の評価法, (一社)日本サステナブル建築協会.
- 安田洋介, 木造建築物の遮音性能向上のための検討,

飛島建設.

- 森長誠, 航空機騒音の音質評価に関する研究, (公財)防衛基盤整備協会.
- 森長誠, 航空機騒音の音質評価に関する研究, (一財)空港振興・環境整備支援機構.
- 芹川真緒, 戸建住宅の外皮性能や導入設備の違いによる光熱費影響, 旭化成ホームズ.
- 芹川真緒, SDGs 達成に資するスマートウェルネス住宅の設計支援ツール開発に係る検討, 日本サステナブル建築協会.
- 芹川真緒, ZEH 住宅のエネルギー利用実態の把握, 共同研究, 旭化成ホームズ.

海外出張

- 吉浦温雅, 20th International Symposium and Conference of Asia Institute of Urban, Seoul, South Korea (2023.11).

その他

- 芹川真緒, 住宅の温熱環境とエネルギー性能の評価, IBECs 機関誌, 248, Vol.44-3 (2023.12).

建築学系・都市生活学系 デザインコース

都市生活学系 住生活創造コース

都市生活学系 まち再生コース

研究分野紹介

建築史研究室

(松隈洋 教授, 姜明采 助教)

モダニズム建築の歴史や, 先駆者となった建築家の思想と設計方法論に関する研究

建築史研究室

(内田青蔵 教授)

日本の明治以降, 欧米の影響を受けて建築はさまざま変化してきた. そうした変容の過程を様々な角度から分析している

建築・都市デザイン研究室

(曾我部昌史 教授, 吉岡寛之 助教)

徳島県美波町における門前町再生支援, 旧回船問屋「谷屋」の保存再生と活用, 日和佐港周辺まちづくり, 愛媛県大三島における島づくりなど, 具体的な地域に関わりな

から、建築設計やまちづくりをテーマとした実践的研究に取り組む

建築計画研究室

(中井邦夫 教授, 鈴木成也 助手)

戦後復興期の防火建築帯に関する研究, 近現代の都市建築類型に関する研究, 都市の水辺空間の構成に関する研究, 都市のスポーツ空間に関する研究, 建築意匠論に関する研究, 建築設計に関する実践的研究など

建築デザイン研究室

(六角美瑠 教授)

建築をとりまく環境と空間の関係を読み解き, 設計デザインへの応用を考察し, 研究している。家具や住宅建築, また町や施設と関わる具体的なプロジェクトまで幅広い活動を通じて, 設計手法の研究を行っている

住宅デザイン研究室

(鈴木信弘 教授, 菊井悠央 助手)

住宅のデザイン, 設計手法, モジュールの研究, 住宅地の開発, 温熱設計と断熱気密施工法の開発

生活デザイン史研究室

(須崎文代 准教授, 印牧岳彦 助教)

住宅史, 近代建築史, 循環型の生活環境デザインに関する研究

居住環境デザイン研究室

(立花美緒 准教授)

住宅, 集合住宅, 集落, 教育環境, 家具, インテリア等をテーマに, 豊かな暮らしと地域社会の関係について, 建築設計と建築計画の観点から研究し, 実践的に提案している

都市計画研究室

(山家京子 教授, 柏原沙織 助教)

人口縮小時代の都市ビジョンの構築, コミュニティ支援ツールの作成, 地域資源を活かしたまちづくりの検討及び実践, 郊外住宅地の持続可能性に関する調査研究

建築保存活用研究室

(野村和宣 教授, 塩脇祥 助手)

都市・集落や建築の歴史的価値を明らかにし, その価値を継承しつつ新たな時代の要求に応じた機能更新を図った保存活用手法に関する研究。また, 歴史的価値を記録しアーカイブスとして発信する手法に関する研究

不動産デザイン研究室

(高橋寿太郎 教授)

「建築学と不動産学の融合」を理念とし, 建築設計に加えて, 建築やリノベーションプロジェクトの成立条件(不動産・マーケティング・ファイナンス)を考える「建築企画」や「プロデュース」を積極的に研究する

まちづくり研究室

(上野正也 准教授)

創造性を活かした地域づくり, エリアマネジメント, 公共

空間利活用をはじめとして, 都市政策から具体的な空間づくりまで実践的な研究を行っている

研究論文 I(レフェリー付き論文)

(和文誌)

1. 茶谷亜矢, 内田青蔵, 姜明采, 建築家・渡辺栄治の経歴と建築作品について, 日本建築学会計画系論文集, 88(806), 1432-1437 (2023.4).
2. 内田青蔵, 住宅地の中の神奈川大学の誕生—神奈川大学(横浜専門学校)の立地する六角橋周辺の住宅地化の動きについて—, 神奈川大学史紀要, 9, 28-58 (2024.3).
3. 吉岡寛之, 佐藤慎也, 大川碧望, 公立美術館におけるボランティア活動に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 88(813), 2876-2886 (2023.11).
4. 鈴木亮太, 鈴木伸治, 上野正也, 横浜都心部における創造産業の集積に関する研究—関内・関外地区におけるアーティスト・クリエイターの動向から, 日本都市計画学会都市計画論文集, 58 (1), 101-109 (2023.4).

研究論文 II(レフェリー付き Proceedings)

1. Saori KASHIHARA, Kyoko YAMAGA and Masaya UENO, Activities of Neighborhood Association and Evaluation of Residential Environment in Suburban Area of Yokohama, Proceedings of 2023 International Conference of Asian-Pacific Planning Societies, 1219-1236 (ダナン, 2023.8).

建築作品

1. 曾我部昌史, 加茂紀和子, 竹内昌義, マニュエル・タルディッツ, I-TOWN A・B 街区(黒部市), 新建築, 180-181, 新建築社 (2023.8).
2. 曾我部昌史, 加茂紀和子, 竹内昌義, マニュエル・タルディッツ, 黒石市図書館, 近代建築, 176-178, 近代建築社 (2023.9).
3. 建築科学研究所(設計監理), 神奈川大学中井研究室(中井邦夫, 鈴木成也ほか, 基本設計協力), 魚津市本江地域交流センター, 富山県魚津市 (2023.8).
4. 神奈川大学中井研究室(中井邦夫, 鈴木成也), ノーデザイン(小倉亮子), 南浦和つながりクリニック内装デザイン, 埼玉県さいたま市 (2023.8).
5. 六角美瑠, 住宅「桜観荘」, 東京都杉並区, 略 (2023.4 竣工).
6. 鈴木信弘, フルハウス(千葉・一宮邸) (2023.6).

7. 鈴木信弘, 家族と外に憧れる猫と暮らす家(三鷹市・掛札邸) (2023.9).
8. 鈴木信弘, 続篠原東の家(横浜市・武藤邸) (2023.5).
9. 渡邊明弘建築設計事務所, オクムラデザイン, キーマン, SOM 事務所, 創造系不動産, 『神田神保町武田ビル再生』の内「建主の事業目的を捉えなおす」, 新建築, 94, 新建築社 (2023.8).

口頭発表

1. 茶谷亜矢, 内田青蔵, 姜明采, 明治期の旧前田家鎌倉別邸に関する研究 -前田育徳会近代史料からの考察(1)-, 日本生活学会第 50 回研究発表大会, 44-45 (横浜, 2023.6).
2. 姜明采, 内田青蔵, 戦前期における山中湖畔の別荘建築について -『別荘建築の志を里』からみる富士山麓土地株式会社の理想的な別荘建築-, 日本生活学会第 50 回研究発表大会, 46-47 (横浜, 2023.6).
3. 池田直也, 内田青蔵, 姜明采, 行幸が行われた和洋館並列形住宅の使用方法について -明治 25 年 7 月 9 日に行幸を迎えた鍋島直大邸を対象に-, 日本生活学会第 50 回研究発表大会, 50-51 (横浜, 2023.6).
4. 池田直也, 内田青蔵, 姜明采, 明治天皇の上流層の私邸に対する行幸時における和館の使用方法について 明治 8 年行幸の池田輝知邸・徳川慶勝邸を事例として, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 283-284 (京都, 2023.7).
5. 茶谷亜矢, 内田青蔵, 姜明采, 渡辺栄治設計の旧前田家世子邸について -前田育徳会近代史料からの考察(2)-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 295-296 (京都, 2023.7).
6. 野々村明佳里, 内田青蔵, 姜明采, 同潤会の分譲住宅事業における敷地境界の特徴について, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 303-304 (京都, 2023.9).
7. 姜明采, 内田青蔵, 戦前期における横浜市隣保館について, 日本建築学会学術講演梗概集(近畿), 343-344 (京都, 2023.7).
8. 内田青蔵, 姜明采, 茶谷亜矢, 前田家の戦前期の「鎌倉貸家絵図」について, 日本生活文化史学会令和 5 年度大会, 1-2 (横浜, 2023.10).
9. 姜明采, 内田青蔵, 建築家・西村伊作が描いたユートピア -大正期の理想郷「一匡邑」の設立過程を中心に(その 1)-, 韓国建築歴史学会秋季学術発表大会, 571-574 (韓国, 2023.11).
10. 黄献根, 中井邦夫, 鈴木成也, 伊藤伸一郎, 増改築された住宅作品における室の接続からみた構成の再編手法, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 9258 (京都, 2023.7).
11. 小澤美月, 中井邦夫, 鈴木成也, 内外の繋がりから見た現代日本のキリスト教会の開放性, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 9334 (京都, 2023.7).
12. 工藤竜久, 中井邦夫, 鈴木成也, 横須賀市中心地域の谷戸地形における造成地の構成, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 9364 (2023.7).
13. 富田響真, 丸山創也, 中井邦夫, 鈴木成也, 建物の用途や分布の移り変わりからみた川崎市池上町の変遷と現状, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 9365 (京都, 2023.7).
14. 池原なつ子, 中澤実那, 中井邦夫, 鈴木成也, 建物高さと壁面要素に着目した東京銀座の路地空間の構成, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 9370 (京都, 2023.7).
15. 工藤大輝, 須崎文代, 印牧岳彦, 明治～大正期の横浜における「避病院」の成立と変遷, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 107-108 (京都, 2023.7).
16. 水野僚子, 印牧岳彦, 須崎文代, 田中和幸, 泉水英計, 姜明采, 内田青蔵, 英国のセツルメント運動に関する建築学的研究 (1)トインビー・ホールの建築的特徴とその評価について, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 229-230 (京都, 2023.7).
17. 印牧岳彦, 水野僚子, 須崎文代, 田中和幸, 泉水英計, 姜明采, 内田青蔵, 英国のセツルメント運動に関する建築学的研究 (2)建築家 Elijah Hoole の活動について, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 231-232 (京都, 2023.7).
18. 須崎文代, 印牧岳彦, 水野僚子, 田中和幸, 泉水英計, 姜明采, 内田青蔵, 英国のセツルメント運動に関する建築学的研究 (3)日本国内におけるトインビー・ホールの理念の受容について, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 233-234 (京都, 2023.9).
19. 井口力哉, 須崎文代, 印牧岳彦, セツルメントハウスにおける共同キッチンの史的研究—その1 ハル・ハウスのコーヒーハウスに着目して, 日本生活文化史学会令和 5 年度大会 (横浜, 2023.10).
20. 横山優莉菜, 山家京子, 上野正也, 関係人口からみた地域づくりに関する研究-その 1: 千葉県いすみ市における民間組織の取組みと活用施設, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1239-1240 (京都, 2023.7).
21. 柏原沙織, 濱田愛, 東京都中央区日本橋横山町問屋街における 1958～1983 年の業種の変遷 -都市部同業者集積空間の景観に関する研究 その 4-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), 233-236 (京都, 2023.7).
22. 野村和宣, 丸ノ内オフィス街における戦時体制下の木造建築について～丸ノ内オフィス街開発の空間形成の研究～, 日本建築学会学術講演梗概集(近畿),

337-338 (京都, 2023.7).

学術誌

1. 内田青蔵, 歴史的ツーバーフォー建築物を訪ねて—明治～昭和初期 第6回 クラーク博士が持ち込んだバルーン・フレーム構法, 一般社団法人日本ツーバーフォー建築協会雑誌 ツーバイフォー, 237, 2-3 (2023.4).
2. 内田青蔵, 歴史的ツーバーフォー建築物を訪ねて—明治～昭和初期 第7回 学園都市に持ち込まれたアメリカ製組立住宅, 一般社団法人日本ツーバーフォー建築協会雑誌 ツーバイフォー, 238, 6-7 (2023.7).
3. 内田青蔵, 関東大震災直後に建てられたアメリカ製組立住宅, ツーバイフォー, 239, 14-15 (2023.10).
4. 内田青蔵, アメリカの新構法の影響を受けた旧宣教師館, 一般社団法人日本ツーバーフォー建築協会雑誌 ツーバイフォー, 240, 12-13 (2024.1).
5. 姜明采, 東京都復興記念館の展示リニューアル及び同潤会に関する特別展の実施について, 非文字資料研究センター News Letter, 51, 2-3 (2024.3).
6. 曾我部昌史, 加茂紀和子, 竹内昌義, マニュエル・タルディッツ, 木の屋根架構—八代保育園, デイテール, 237, 29 (2023.7).
7. 西堀隆史, 曾我部昌史, ウランバートルにおける住空間の 一室空間指向についての一考察 —ゲル地区の住居から民主化後の住居に至る変遷のなかから—, 神奈川大学アジア・レビュー, 11, 29-52 (2024.3).
8. 須崎文代, 論考: 変貌する火廻り・水廻り空間, 住宅建築, 498, 88-93 (2023.4).
9. 須崎文代, 台所史探訪(第4回) 効率化の波が家事に及ぶ, Vesta=食文化誌ヴェスタ, 130, 68-73 (2023.4).
10. 須崎文代, 台所史探訪(第5回) 明治期における台所合理化のはじまり, Vesta=食文化誌ヴェスタ, 131, 64-69 (2023.7).
11. 須崎文代, 食空間のこれまでとこれから, 住総研, すまいろん(113), 26-29 (2023.8).
12. 須崎文代, 台所史探訪(第6回) 米国式台所の導入: 教育者・櫻井ちか子による紹介を契機として, Vesta=食文化誌ヴェスタ, 132, 72-77 (2023.10).
13. 須崎文代, 明治・大正・昭和初期の検定済高等女学校用家事教科書にみる日本の台所の近代化, 家具道具室内史: 家具道具室内史学会誌, 15, 24-35 (2023.12).
14. 印牧岳彦, 非人間主義の建築: 群馬県立近代美術館 1974[群馬県高崎市], 建築ジャーナル, 1349, 27-29 (2023.12).
15. 須崎文代, 台所史探訪(第7回) 大正時代の台所と生活改善運動, Vesta=食文化誌ヴェスタ, 133, 66-69

(2024.1).

16. 印牧岳彦, 協同と創造の論理: 磯崎新とビューロクラシーの問い, 思想, 1197, 83-95 (2024.1).
17. 須崎文代, 基幹共同研究「常民生活誌に関する総合的研究」便所の歴史・民俗に関する総合的研究 活動報告, 神奈川大学日本常民文化研究所 年報 2022, 18-19 (2024.2).

著書

1. 内田青蔵研究室, これまでのあゆみ, 内田青蔵研究室編, 私家版 (2023).
2. 内田青蔵, 姜明采(分担執筆), 同潤会がめざした理想的な住まいと住環境 -新しい都市と郊外の暮らし-, 2, 7-26, (公財)東京都慰霊協会 (2023).
3. 姜明采(分担執筆), 関東大震災 100 年特別展『首都東京の復興ものがたり -未来へ繋ぐ 100 年の記憶-, 94-97, 106-109, 千代田区教育委員会 (2023).
4. 内田青蔵, 「あめりか屋」に関する補遺 -「あめりか屋」創設者橋口信助とその周囲の人々について-, あめりか屋 HISTORY 100 年の道のり, 93-149, 株式会社あめりか屋 (2023).
5. 内田青蔵, 日本の美しい洋館, X-Knowledge (2023).
6. 内田青蔵, 住まいの建築史, 創文社 (2023).
7. 鈴木信弘(編著), 戸高太郎, 岸野浩太, 鈴木利美, 住宅の設計(初学者の建築講座), 市ヶ谷出版 (2023).
8. 印牧岳彦, SSA:緊急事態下の建築ユートピア, 鹿島出版会 (2023).
9. カトリーヌ・クラリス著, 須崎文代訳, キュイジーヌ: フランスの台所近代史, 鹿島出版会 (2024).
10. ハリー・F・マルグレイヴ著, 川添善行監訳, 印牧岳彦他訳, EXPERIENCE: 生命科学が変える建築のデザイン, 鹿島出版会 (2024).
11. 立花美緒(監修), 最高の建物と街を描く技術, 128-133, エクスナレッジ (2023).
12. 立花美緒(分担執筆), 日本建築学会編, 第4版コンパクト建築設計資料集成, 丸善出版 (2024).

調査報告書

1. 中井邦夫, 池原なつ子, 簾内俊希, 長谷川舞, オイン・シャンゲン(翻訳), BA/横浜防火帯建築研究 30, (BA 叢書 01) 類型学について(原著者:ラファエル・モネオ), BA 編集部(神奈川大学中井研究室内)(2023).
2. 立花美緒, 自ら学び共に学ぶ環境とデンマーク等のコモンコア(内部広場)を内包する学校建築, 「創造的な学習空間の創出に関する調査研究」報告書, 129-134

- (2023).
3. 山家京子, 上野正也, 柏原沙織, 横浜市栄区湘南桂台地区「お住まいのまちについての住民意識調査」報告書 (2023).
 4. 柏原沙織・濱田愛, 国土地理協会学術研究助成成果報告書: 都市部同業者集積空間の文化的景観に関する研究—東京都中央区日本橋横山町・馬喰町の間屋街地区に着目して—, 第 21 回学術研究助成 (2024).

講演・展示会

1. 松隈洋, 東衛舎資料館(仮称)開館記念トークイベント「リノベーションの名手 村野藤吾について～旧赤坂離宮から迎賓館への転換～」, 迎賓館赤坂離宮 (東京, 2023.5).
2. 松隈洋, シンポジウム「鬼頭梓の建築から考える図書館の未来像」基調講演「「生活の根拠地」としての図書館を求めて—鬼頭梓の見つめていたこと」, 京都工芸繊維大学 (京都, 2023.6).
3. 松隈洋, とびらプロジェクト建築実践講座第 1 回「都美の建築と歴史—東京都美術館に生きる, 前川建築の3つのキーワード」, 東京都美術館 (東京, 2023.7).
4. 松隈洋, 国立西洋美術館ボランティア(第6期) 候補者養成研修における 講義「ル・コルビュジエと近代建築について」, 国立西洋美術館 (東京, 2023.8).
5. 松隈洋, 近代建築概要, 特定非営利活動法人香川歴史的建造物保存活用会議主催, 香川文化遺産保存活用技術者養成講座 (zoom, 2023.10).
6. 松隈洋, 山口県立山口図書館と建築家・鬼頭 梓, 山口県立山口図書館主催, 山口県立山口図書館開設 120 周年・建築 50 周年記念「見る・聴く・考える山口県の図書館」建築講演会 (山口, 2023.11).
7. 松隈洋, モダニズム建築の意味と現代建築の課題, 愛知県建築士会主催, あいちヘリテージマネージャー養成講座 (名古屋, 2023.11).
8. 松隈洋, 第 45 回歴史を生かしたまちづくりセミナー基調講演『戦後建築の魅力』, 公益社団法人 横浜歴史資産調査会主催 (zoom, 2023.12).
9. 松隈洋, 大江宏と学校建築, 慶應義塾大学アート・センター主催 (東京, 2023.12).
10. 松隈洋, JIA トーク未完としてのモダニズム建築—記憶すること, 伝えることの先に, 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 JIA トーク実行委員会主催 (東京, 2024.1).
11. 内田青蔵, 和室とは何か? -それは未来に失われてしまうのか? -, 日本建築学会主催, パネルディスカッション・モデレーター, 建築会館ホール (東京, 2023.4).
12. 内田青蔵, エコールプチピエ銀座・講座, 旧渡辺甚吉邸の文化財的価値について (東京, 2023.4).
13. 内田青蔵, 自由学園講座, 旧渡辺甚吉邸見学会, (茨城, 2023.5).
14. 内田青蔵, 日本生活学会創立 50 周年記念渡辺甚吉邸特別見学会 (茨城, 2023.6).
15. 内田青蔵, 山本有三邸ガイドボランティア講座 1, 三鷹ネットワーク大学 (東京, 2023.6).
16. 内田青蔵, 山本有三邸ガイドボランティア講座 2, 三鷹ネットワーク大学 (東京, 2023.7).
17. 内田青蔵, パネルディスカッション・モデレーター, 和室とは何か? -それは未来に失われてしまうのか? -, 日本建築学会主催, キャンパスプラザ京都 (京都, 2023.7).
18. 内田青蔵, 軽井沢町制施行 100 周年記念講演, 別荘開発にみる軽井沢の歴史, 中軽井沢図書館 (長野, 2023.7).
19. 内田青蔵, 姜明采, 東京都復興記念館特別展: 同潤会がめざした理想的な住まいと住環境 (関東大震災 100 年記念事業), 東京都復興記念館 (東京, 2023.5-2023.8).
20. 姜明采, 日本生活学会創立 50 周年記念シンポジウム, 総合司会 (横浜, 2023.6).
21. 姜明采, 関東大震災 100 年の街並み, すみだ景観フォーラムシンポジウム, 墨田区役所 (東京, 2023.7)
22. 姜明采, 関東大震災の復興, ユートリヤすみだ生涯学習センター (東京, 2023.8).
23. 内田青蔵, 姜明采, 東京都復興記念館 常設展リニューアル(関東大震災 100 年記念事業), 東京都復興記念館 (東京, 2023.9-).
24. 内田青蔵, 姜明采, 同潤会がめざした 理想的な住まいと住環境 ～新しい都市と郊外の暮らし～, 神奈川大学横浜キャンパス 3 号館企画展示室 (横浜, 2023.9).
25. 内田青蔵, 姜明采, 同潤会がめざした 理想的な住まいと住環境 ～新しい都市と郊外の暮らし～, 神奈川大学みなとみらいキャンパス (横浜, 2023.11-12).
26. 姜明采, 震災記念堂の『日本趣味』の建築, 関東大震災研究についての報告&討論会, 神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センター (横浜, 2023.12).
27. 内田青蔵, 同潤会の事業紹介, 関東大震災から 100 年 震災復興をふりかえって -東京都復興記念館の所蔵資料と関東大震災 100 年特別展を中心に-, 神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センター (横浜, 2023.12).
28. 姜明采, 東京都復興記念館の展示リニューアル紹介, 関東大震災から 100 年 震災復興をふりかえって -東京都復興記念館の所蔵資料と関東大震災 100 年特別展を中心に-, 神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センター (横浜, 2023.12).
29. 内田青蔵, 鎌倉近代建築の保存 -自然災害からどう

- 守るか-, パネラー, 神奈川大学みなとみらいキャンパス, (横浜, 2024.2).
30. 曾我部昌史, 熊本地震震災ミュージアム 体験・展示施設 KIOKU 完成記念シンポジウム, ナースパワーアリーナ大ホール (熊本, 2023.7).
 31. 曾我部昌史, 基于当地资产和问题的设计——Sogabe 实验室的项目, 北京交通大学 (中国, 2023.11).
 32. 伊東豊雄, 曾我部昌史, 柳澤潤ほか, 展覧会・大三島みんなの参道物語, 今治市伊東豊雄建築ミュージアム (今治, 2023.10-2024.9).
 33. 六角美瑠, Y 邸 H 邸設計展示, 「ロッカクと継承」展, 会場ロッカクパッチ (神奈川, 2023.4).
 34. 六角美瑠, 林憲吾, 山室興作, 「ロッカクと継承」シンポジウム (神奈川, 2023.4)
 35. 六角美瑠+六角研究室, 「新嘗興」, Koyart2023 展示, 会場横須賀美術館 (横須賀, 2023.11).
 36. 鈴木信弘, 住宅プランニングの切り口と技術—Architecture live, 間取りの學校春講座 (横浜, 2023.5).
 37. 鈴木信弘, なんのために設計するのか—Architecture live, 間取りの學校春講座 (横浜, 2023.6).
 38. 鈴木信弘, 総括: 家族 4 人の北斜面地における住宅設計—Architecture live, 間取りの學校春講座 (横浜, 2023.7).
 39. 印牧岳彦, 発生するユートピア: SSA とその建築・社会変革構想, 東京都市大学建築理論研究室連続レクチャー「歴史という操作/設計」(東京, 2023.4).
 40. 印牧岳彦, 近代建築運動と社会主義: そのアメリカ合衆国における一展開について, 第 135 回神奈川大学日本常民文化研究所研究会 (横浜, 2023.6).
 41. 須崎・印牧研究室, ARTBAY TOKYO アートフェスティバル 2023「Biotope Circles-生きるものたちの息づかいが聴こえる場所-」制作協力, アートプロジェクト実行委員会主催 (青海, 2023.9).
 42. 藤森照信, 中谷礼仁, 須崎文代, 渡辺甚吉邸特別講演会「今和次郎を語る」, 前田建設工業 ICI 総合センター (茨城, 2023.11).
 43. 立花美緒他, 「みんな」の学校をつくるには?—施設・ひと・コミュニティの特性を活かす学校—, 文部科学省 CO-SHA ミートアップ vol.2 (オンライン, 2023.11).
 44. 立花美緒, 蝶番の家+地域社会の学校, 東洋大学 (東京, 2023.12).
 45. 山家京子, 神奈川大学都市計画研究室, 「想像しようこれからの小町のこと。」-小町通り景観形成シーン集展示- (鎌倉, 2024.3).
 46. 野村和宣, 歴史をつなぎ生まれ変わる建築を考える～継承設計の取組～, 知的オフィス環境推進協議会 (SOEPA) 講演, (東京, 2023.6).
 47. 野村和宣, 姜明采, 関東大震災 100 年特別展 首都東京の復興ものがたり—未来へ繋ぐ 100 年の記憶—, 千代田区立日比谷図書文化館令和 5 年度特別展 (東京, 2023.9-2023.11).
 48. 高橋寿太郎, 公益財団法人不動産流通推進センター, 講師, 不動産エバリュエーション評価書活用講座 (東京, 2023.10).
 49. 高橋寿太郎, 京都工業繊維大学, ヘリテージアーキテクト講義「保存再生と不動産」(京都, 2023.10).
 50. 高橋寿太郎, 神奈川大学テクノフェスタ, 地方の関係人口とくらしの場づくり (横浜, 2023.11).
 51. 高橋寿太郎, 株式会社プライムライフテクノロジーズ, 社内講演「古いほど資産価値が高まる建築と不動産のあいだの法則」(東京, 2024.2).
 52. 高橋寿太郎, 東京都立大学卒業設計講評会 ゲスト講師 (東京, 2024.2).
 53. 上野正也, 六角橋のパブリックのつくり方, 六角橋商店街連合会まちづくり検討会 (横浜, 2023.12).
 54. 上野正也, パネリスト登壇, ACY 感謝祭 第三部「都市と田舎, 生活と表現のあいだを旅することで見えること ～令和の横浜使節団～, アーツコミッション・ヨコハマ (横浜, 2024.3).

助成金

1. 内田青蔵(分担), 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開 最初の民藝館・高林邸の総合研究, 令和 5 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 23K04220.
2. 内田青蔵(代表), 姜明采, 草軽電鉄の北軽井沢別荘地開発とそれに誘発された理想郷・一匡邑について, 令和 5 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 23K04218.
3. 中井邦夫(代表), 曾我部昌史, 内田青蔵, 石黒由紀, 藤岡泰寛, 鈴木成也(分担), 戦後の防火建築帯に学ぶ都市建築類型学の構築と新しい都市建築モデルの探求, 令和 2 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 20K04839.
4. 須崎文代(代表), 印牧岳彦, 田中和幸, 姜明采, 内田青蔵, 泉水英計(分担), 近代日本のセツルメントハウスと公営住宅に関する史的研究—英・米の動向を参考として, 令和 3 年度科学研究費補助金, 基盤研究(B), 課題番号 21H01521.
5. 印牧岳彦, 建築理論における「環境制御」および「環境デザイン」の概念についての歴史的研究, 令和 5 年度科学研究費補助金, 若手研究, 課題番号 23K13487.
6. 須崎文代(分担), 里山再生を通じた事物連関型デザイン知性の開発, 令和 4 年度科学研究費補助金, 萌芽研究, 課題番号 22K18450.

7. 立花美緒(代表), 人口減少社会に対応した日本版コモコア教育環境の開発, 平成 31 年度科学研究費補助金, 若手研究, 課題番号 19K15168.
8. 立花美緒(分担), オープンスペース型学校建築のプランタイプとしてみた有効性の検証, 令和 3 年度科学研究費補助金, 基盤研究(C), 課題番号 21K04402.
9. 山家京子(代表), 他, アジア都市の生活圏, 神奈川大学アジア研究所共同研究.
10. 趙衍剛(代表), 山家京子(分担), 他, アジア地域の災害軽減化と防災・減災ネットワーク構築に関する研究, 神奈川大学アジア研究所共同研究.
11. 山家京子, 上野正也, 柏原沙織(分担), 他, ポストコロナにおける持続可能なまちづくりに関する研究〜「日常生活資本」の新しい概念を中心にして〜, 神奈川大学分野横断型研究推進事業.
12. 柏原沙織(代表), 都市部同業者集積空間の文化的景観に関する研究 -東京都中央区日本橋横山町・馬喰町の間屋街地区に着目して-, 令和 3 年度公益財団法人国土地理協会研究助成.
13. 柏原沙織(代表), ベトナム・ハノイ旧市街の歴史的な商業形態の保全に向けた都市計画的手法の検討, 平成 31 年度科学研究費基金, 若手研究, 課題番号 19K15164.

受託研究・共同研究

1. 内田青蔵, 姜明采, 東京都復興記念館における震災復興事業の展示研究, (公財)東京都慰霊協会.
2. 松隈洋, 姜明采, 公益財団法人ギャラリーエークウッドにおける吉村順三とアメリカ展, (公財)ギャラリーエークウッド.
3. 内田青蔵, 姜明采, 建造物調査委託, 東京都北区飛鳥山博物館.
4. 曾我部昌史(代表), 吉岡寛之, 丸山美紀, 長谷川明「令和5年度 美波町官民連携まちなか再生推進支援事業(未来ビジョン策定)」, 徳島県美波町.
5. 曾我部昌史(代表), 吉岡寛之, 丸山美紀, 長谷川明「2023 年度門前町持続のためのまちづくり」, 徳島県美波町.
6. 鈴木信弘, 菊井悠央, 歴史的建築物(旧柳下邸)の修繕に関する研究, 横浜市建築保全公社.
7. 立花美緒, 研究奨学寄付金, 暮らしと建築社.
8. 立花美緒, 研究奨学寄付金, 総合資格学院.
9. 立花美緒, 研究奨学寄付金, ミリグラム.
10. 山家京子, 鎌倉市との包括協定に基づく小町通り商店街景観形成に関する調査研究, 鎌倉市都市景観課.
11. 山家京子, 上野正也, 柏原沙織, 神奈川大学, 京浜急行電鉄及び川崎市の京急本線及び京急大師線沿線におけるまちづくり推進に関する調査研究, 京浜急行電鉄株式会社, 川崎市.
12. 山家京子, 上野正也, 十日市場駅勢圏におけるまちづくりの推進に関する調査研究, 横浜市.
13. 上野正也, 創造限界拠点にみる社会・地域的インパクトに関する調査研究, 横浜市.

海外出張

1. 内田青蔵, 曾我部昌史, 六角美瑠, 須崎文代, 北京交通大学・北京服装学院との学術交流(特別講義), 北京, 中国 (2023.11).
2. 姜明采, 韓国建築歴史学会秋季学術発表大会発表, ソウル, 韓国 (2023.11).
3. 内田青蔵, 姜明采, ロンドン・パリにおける歴史的建造物の視察, イギリス・フランス (2024.2).
4. 内田青蔵, 姜明采, 韓国における教会建築の視察, ソウルほか (2024.3).
5. 曾我部昌史, 東アジア国際交流ワークショップ, 台北他, 台湾 (2023.8).
6. 曾我部昌史, モンゴル ウランバートル・ゲル地区の調査視察(アジア研究センター), ウランバートル, モンゴル (2023.8).
7. 曾我部昌史, 北京交通大学および北京服装学院との学術交流, 北京交通大学ほか, 中国 (2023.11).
8. 曾我部昌史, マレーシア・ペナンにおける生活圏とまちなみ保全に関する調査, Think City ほか, マレーシア (2024.2).
9. 中井邦夫, パリにおける都市建築事例の視察調査, パリ, フランス (2023.8).
10. 鈴木信弘, 印牧岳彦, アドルフ・ロースの建築視察, 日本建築学会関東支部神奈川支所, ウィーン, オーストリア (2023.3-4).
11. 須崎文代, 印牧岳彦, セツルメントハウス研究におけるアメリカ合衆国・シカゴ現地調査 (2023.8).
12. 印牧岳彦, 上海磯崎新展の視察及び打ち合わせ, 上海, 中国 (2023.11).
13. 印牧岳彦, 科学研究費(課題番号 23K13487)による文献調査, サンフランシスコ, アメリカ (2024.3).
14. 須崎文代, 印牧岳彦, 「生活文化フィールドワーク」授業実施候補地の視察および打ち合わせ, ソウル, 韓国 (2024.3).
15. 印牧岳彦, 建築学科教育・研究費重点配分による研究調査(近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究), パリ, フランス (2024.3).
16. 山家京子, 柏原沙織, 東アジア5大学建築都市国際ワークショップ, 台湾台北・高雄・台東 (2023.8).
17. 山家京子, 柏原沙織, International Conference of Asian-Pacific Planning Societies 2023 発表, Danang City, Vietnam (2023.8).

18. 山家京子, 柏原沙織, アジア研究センター調査, Penang, Malaysia (2024.2).
19. 柏原沙織, ハノイ旧市街都市景観調査, ハノイ, ベトナム (2024.3).

褒賞

1. 曾我部昌史, 加茂紀和子, 竹内昌義, マニュエル・タルディッツ, 横浜市立上郷中学校体育館改修, 令和 5 年度横浜市建築局優良建築設計者表彰, 横浜市 (2023.11).

学位

1. 立花美緒, デンマークの学校建築におけるコモモンコアの空間・機能構成と利活用, 博士(工学), 東京工業大学 (2024.3).

その他

1. 松隈洋, モダニズムが育んだ場所(1) 同潤会青山アパートの面影, 日本経済新聞, 12 (2023.9).
2. 松隈洋, モダニズムが育んだ場所(2) 清新な神奈川県立近代美術館, 日本経済新聞, 12 (2023.9).
3. 松隈洋, モダニズムが育んだ場所(3) 「生活の根拠地」求めた日野市立中央図書館, 日本経済新聞, 12 (2023.9).
4. 松隈洋, モダニズムが育んだ場所(4) 緑と一体 服部緑地都市緑化植物園, 日本経済新聞, 12 (2023.9).
5. 姜明采, 震災 1923 100 年に向け 「同潤会」企画展復興支えた「住」に光, 神奈川新聞, 20 (2023.6).
6. 姜明采, 関東大震災 100 年(2) 慰霊の造形 現代の風景に息づく, 日本経済新聞, 14 (2023.8).
7. 内田青蔵, 創設 100 年を直前にして同潤会を振り返る, DOCOMOMO Japan 会報 34 号 特集「震災復興 100 年」, 2-5 (2023.9).
8. 姜明采, 関東大震災の記憶を継承する唯一無二の場所, DOCOMOMO Japan 会報 34 号 特集「震災復興 100 年」, 10-11 (2023.9).
9. 姜明采, 関東大震災 100 年の先へ 教訓に建築史の視点で向き合う 神奈川大特別助教・姜明采さん, 神奈川新聞, 20 (2023.12).
10. 姜明采, 関東大震災 100 年の先へ 関東大震災の教訓継承に新たな視点は 横浜でシンポ 中国人虐殺にも言及, 神奈川新聞, 22 (2023.12).
11. 松隈洋, NHK 教育テレビ「日曜美術館 戦後新宿・渋谷をつくった建築家 坂倉準三」出演 (2024.1).

12. 松隈洋, 書評(隈研吾『日本の建築』)「伝統と向き合った先人たち」, 日本経済新聞 (2024.2).
13. 内田青蔵, ひと, 現代・和室の会会長に就任する内田青蔵さん, 毎日新聞, 4 (2024.3).
14. 曾我部昌史, 建築逍遙・みんなの家利活用プロジェクト, 神奈川大学評論, 105, 表紙裏 (2024.3).
15. 六角美瑠, 東利恵, クロスレビュー「都市を住み継ぐ」, LIXIL eye, 29 (2023.7).
16. 鈴木信弘, 第 65 回神奈川建築コンクール作品集 選評, 14-17, 神奈川県 (2023.9).
17. 須崎文代, Kitchens, Japanology Plus (TV 番組), NHK World Japan (2023.1-2025.3).
18. 須崎文代, 特集 進化する日本のキッチン, 建材マンスリー, 693, 2-3, 住友林業 (2023.7).
19. 印牧岳彦, 著者に聞く: 建築は社会を捉えるための窓口, 日経アーキテクチュア, 1228, 80 (2023.4).
20. 須崎文代, ハニヤスの子(第 1 回)「ふうど」と暮らし, 味の手帖, 664, 57 (1) (2024.1).
21. 須崎文代, ハニヤスの子(第 2 回)「ふうど」と人をつなぐもの: その 1 便所, 味の手帖, 665, 57 (2) (2024.2).
22. 先生と学生たちは, いまこんなことを考えている。ケンチク学ビバ(vol.57)神奈川大学 建築学部 建築学科 住生活創造コース 生活デザイン史研究室 准教授 須崎文代 特別助教 印牧岳彦, 建築資料研究社, コンフォルト, 195, 124-126 (2024.2).
23. 須崎文代, ハニヤスの子(第 3 回)「ふうど」と人をつなぐもの: その 2 土間, 味の手帖, 666, 57 (3) (2024.3).
24. 立花美緒, 先生ワークショップ 3 生徒の居場所編, 伊那新校ワークショップに向けた研修, 暮らしと建築社・みかんぐみ設計共同体, 長野県教育委員会 (長野, 2023.4).
25. 上野正也, 横浜都市デザインの 50 年『文化芸術創造都市・横浜』, 造景 2023, 株式会社建築資料研究社, 98-103 (2023.8).
26. 上野正也, 書評『世界に学ぶ自転車都市のつくりかた一人と暮らしが中心のまちとみちのデザイン』自転車からみたまちと社会, 神奈川大学評論, 105, 66-67 (2024.3).

講演会開催記録

2023 年度

演題: つくらない時代のつくりかた-自立・活力のある地域社会をもたらすプロジェクト発想法-

講演者: 西村浩(株式会社ワークヴィジョンズ代表取締役)

日時: 2023 年 5 月 8 日(月) 17:10~18:50

場所: 16 号館セレストホール

講演要旨: 新しい建築を作ればよいという時代ではなくなった少子化の昨今において、この街にどういった建築があるとより良くなるか、またその建築はどのように運営されていくか、街の人々にどう活用されていくか等について具体的に検討し、実践していくことの重要性を、「神水公衆浴場」など講師の関わったプロジェクトを通して解説された。

演題: 水害と建築 -新たなデザインコンセプトへの展開-

講演者: 田村和夫(神奈川大学工学研究所客員教授, 日本学術会議連携会員, (一社)防災学術連携体事務局長)

日時: 2023 年 6 月 5 日(月) 17:10~18:50

場所: 16 号館セレストホール

講演要旨: わが国でも地球温暖化の急激な進行に伴い、気象現象は激化し豪雨災害も頻発している。このような環境の中で、快適でかつ安全・サステナブルな空間を提供する建築の実現に向けては、水害対策への配慮もかかせない。わが国における近年の水害被災の実態を踏まえ、建築の水害対策と設計上の配慮について具体的にエピソードを交えて説明された。

演題: デザインと予算のバランス~積算ってなんなん? ~

-大学生が知るべき積算の重要性と影響力-

講演者: 鈴木信正(日本建築積算事務所協会(JAQS)会長)

日時: 2023 年 7 月 10 日(月) 17:10~18:50

場所: 16 号館セレストホール

講演要旨: 市場経済において不可欠な要素である建設産業の中で、建築生産活動は単に建物を建てるだけでなく、企画、設計、施工、保守までの全プロセスにわたり、建築積算が建設産業全体の重要な役割を担っていることを、実際の建築プロジェクトを交え体系的にわかりやすく解説された。また、費用管理の重要性と費用要素を考慮するスキルを身につける大切さを丁寧に説明された。

演題: 換気はむずかしい? 省エネルギー、設計、運用、測り方、感染症対策

講演者: 田島昌樹(豊橋技術科学大学建築・都市システム学系教授)

日時: 2023 年 7 月 3 日(月) 17:10~18:50

場所: 16 号館セレストホール

講演要旨: 1 日に室内で吸う空気の質量など、換気は目に見えず温度のように体感することは難しい。換気はどうして難しいと感じさせるのか、感染症対策と換気における省エネ対策などについて、わかりやすく解説された。換気に関する測定結果などを示しながら換気の重要性、問題となりがちな点や今後の研究についても説明された。最後の質疑応答まで換気の奥深さを丁寧に話された。

演題: 自作・自演・自力建設 54 帖の中庭

講演者: 高原次郎兵衛正伸(うなぎ漁師・建築家/高原正伸建築設計事務所)

日時: 2023 年 10 月 2 日(月) 17:10~18:50

場所: 16 号館セレストホール

講演要旨: 自主施工した講師の自邸「54帖の中庭」の設計について、自身の生い立ちや、資本主義社会への批判などを交えながら解説された。また、講師自身が生活の糧とし、建築家と同様、大切にしている肩書である「うなぎ漁師」としての生き方についても、解説された。

演題: エンジニアリングによる建築のインテグレート

講演者: 村上博昭(株式会社日建設計 DEL (Digital Engineering Lab) 室長)

日時: 2023 年 11 月 6 日(月) 17:10~18:50

場所: 16 号館セレストホール

講演要旨: 本講演では、建築設計におけるエンジニアリングの統合を実事例の紹介を用いて説明された。前半は意匠・構造・設備設計が融合し、豊かな建築空間を実現したプロジェクト数例を講演者の苦労話とともに紹介され、後半は、ファサードデザインに構造、環境、IT 技術を統合して革新的なファサードを開発した設計手法が紹介された。

演題:環境を考えた次世代の家づくりをめざして～大学卒業から「佐藤の窓」を売り出すまでの道のり～

講演者:佐藤大治(株式会社大丸工業レインボーオシャンビュー,株式会社パッシオパッシブ)

日時:2023年11月27日(月)17:10～18:50

場所:16号館セレストホール

講演要旨:住宅の快適性の大きな鍵となる温熱環境や断熱性能について,パッシブハウスの木製サッシ窓をキーワードに解説された.また,学生時代の学びが現在の実務にどのように役立つかなど,自身の経験を学生に伝え建築業界での多様な仕事についても説明された.

演題:サステナビリティ実現に向けた取り組み紹介

講演者:渡辺直哉(旭化成ホームズ株式会社)

日時:2023年12月4日(月)17:10～18:50

場所:16号館セレストホール

講演要旨:「サステナビリティ」をキーワードとして,グループ企業の取り組みについて紹介された.60年間の定期点検サービスの提供,RE100への参加,ZEH・ZEH-Mの推進,防災・減災・復旧力の向上,電力小売事業を含めた再生可能エネルギー活用に係る取り組みや,改修を行い住み継がれている住宅の事例などについても紹介された.

卒業研究(工学部建築学科)・修士論文・博士論文テーマ

2023 年度

構造コース

[卒業論文]

鹿児島県の台風被害想定 主成分分析を用いた風害に弱い観測地点の特定……………(朱牟田・落合研究室)

クロップレンゴムをクリアランス調整材に用いた座屈拘束ブレースの実験……………(藤田・中村研究室)

曲げ変形が卓越する塔状建築物の水平力に対する応答制御 鉛直方向制振ダンパーによる制振効果の検討……………(吉江・楊研究室)

リユース材を用いた逆 T 字形の柱梁接合部実験……………(藤田・中村研究室)

鋼管杭貫入データを用いた基盤層判別に関する研究……………(朱牟田・落合研究室)

構面外変形の有無による座屈拘束ブレースの実験的検討……………(藤田・中村研究室)

地震時における 23 号館の揺れ振動 中地震を対象とした地震規模による挙動変化……………(島崎・白井研究室)

歴史的組積造の振動台実験による動的変形限界 面内破壊モデルの加振実験……………(島崎・白井研究室)

非線形を考慮した地盤のハザード評価法の検討……………(朱牟田・落合研究室)

五重塔の変形特性 風況による変位変化傾向の把握……………(朱牟田・落合研究室)

塑性履歴を受けた座屈拘束ブレースの芯材の機械的性質に関する実験 一定歪振幅 1%および 3% 載荷における性能の比較……………(藤田・中村研究室)

スリット壁に耐力と制振機能を持たせるデバイスの開発 頭付きスタッドの耐力と剛性の検討……………(島崎・白井研究室)

歴史的組積造の対角圧縮試験による安全限界に関する速度効果の検討……………(島崎・白井研究室)

台風による倒木の発生可能性 植生の違いに着目した倒木傾向分析……………(朱牟田・落合研究室)

強震データの H/V スペクトル比の再現性とその地盤増幅特性……………(朱牟田・落合研究室)

デッキ合成スラブの構造性能に関する研究 デッキプレート形状が付着性能に与える影響の実験的検討……………(島崎・白井研究室)

露出柱脚の弾性回転剛性計算式の精度に関する検討……………(吉江・楊研究室)

合成スラブの構造性能に関する研究 デッキプレートの形状が付着性能に与える影響の解析的検討……………(島崎・白井研究室)

鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースの FEM 解析……………(藤田・中村研究室)

クリアランス調整を省力化した座屈拘束ブレースの実験……………(藤田・中村研究室)

体育館を対象とした継続使用の判定方法に関する検討 座屈するブレースの損傷検出……………(島崎・白井研究室)

高密度風圧測定実験による高層建築物の構造骨組用層風力の測定法の検討……………(吉江・楊研究室)

施行角度の異なる機械式亀裂補修部品の FEM 解析……………(藤田・中村研究室)

墓石調査で得られた推定加速度を用いた常時微動の有効性の検討……………(朱牟田・落合研究室)

小開口を有する RC 造方立壁の耐震診断に関する基礎研究 縮小試験体を用いたせん断耐力の検討……………(藤田・中村研究室)

横浜市栄区庄戸地域における地盤特性の継続的な分析 大断面のトンネルの工事の影響……………(朱牟田・落合研究室)

鎌倉大仏の耐震性能評価 一固有値解析と地震動応答解析による鎌倉大仏の 3D 解析モデル作成……………(島崎・白井研究室)

曲げ変形が卓越する塔状構造物の水平力に対する応答制御 制振ダンパーの低層部集中配置による制振効果の検討……………(吉江・楊研究室)

伝統的な木造建物における面格子壁を用いた制振壁の研究開発 ブチルゴムを用いた面格子壁の制震性能評価について……………(島崎・白井研究室)

道路橋のアセッドマネジメントに寄与するセンシング方法に関する研究……………(朱牟田・落合研究室)

座屈拘束ブレースの低コスト化に関する実験……………(藤田・中村研究室)

免震建築物の弾性範囲を超える領域の風応答特性……………(吉江・楊研究室)

境界条件が RC 柱部材性能に与える影響に関する実験的研究 端部が梁とスタブの場合の曲げ耐力……………(島崎・白井研究室)

避難所の許容人数と推定避難人数からのリスクヘッジ……………(朱牟田・落合研究室)

免震建築物の弾塑性風応答による疲労損傷度……………(吉江・楊研究室)

鋼板シヤコネクタを用いた LVL 合成梁の曲げ実験……………(藤田・中村研究室)
 クリアランス調整材を部分貼りとした座屈拘束ブレースの疲労実験……………(藤田・中村研究室)
 道路橋に作用する荷重と劣化モードとの相関性に作用する研究……………(朱牟田・落合研究室)
 部材長さ 12m を想定した座屈拘束ブレースの実験……………(藤田・中村研究室)
 模型実験による木造住宅の浸水特性評価に関する基礎的研究 開口部奥行きによる流速への影響……………(藤田・中村研究室)
 常時微動とボーリングデータを組み合わせた庄内平野の三次元グリッドモデルの作成……………(朱牟田・落合研究室)
 高密度風圧測定実験による高層建築物の外装用風荷重評価法の検討……………(吉江・楊研究室)

戸建て住宅における断熱性能と室温の関係に関する研究……………(芹川・吉浦研究室)
 住宅の暖房方式とエネルギー消費性能、快適性の関係に係る検討……………(芹川・吉浦研究室)
 住宅における省エネ行動の実施状況とその阻害要因に関する研究……………(芹川・吉浦研究室)
 都市部における三階建て住宅の光・温熱環境と光熱費に関する研究……………(芹川・吉浦研究室)
 CFD による天井吊り下げパネル及びパーテーション使用時の事務室内温熱環境評価 在室者数による検討……………(岩本研究室)
 境界要素法を用いた室内音場の可聴化とケーススタディ……………(安田・森長研究室)
 掘り炬燵の温熱評価 夏季送風時の評価……………(岩本研究室)

環境コース

[卒業論文]

CFD による大規模講義室内における暖房時熱環境予想……………(岩本研究室)
 衛生器具・排水管の吐水・排水流れの CFD 解析 洗面器から排水立管までの排水性状に関する実験結果との比較……………(岩本研究室)
 医療施設の音環境調査におけるプライバシー保護のための音声データ断片化の有効性……………(安田・森長研究室)
 家庭用ヒートポンプに含まれる低周波成分が及ぼす圧迫感・振動感の印象評価実験……………(安田・森長研究室)
 CLT パネル壁の空気音遮断性能の弱点に関する実験的検討……………(安田・森長研究室)
 住宅における全館空調システムに関する研究 VAV・CAV の比較……………(岩本研究室)
 自宅における着衣行動調査 Web アンケートによる全国調査……………(岩本研究室)
 HEMS データ分析による戸建て住宅の電力使用実態調査……………(芹川・吉浦研究室)
 電力系統負荷軽減のための住宅における太陽光発電と蓄電池の連携に関する研究……………(芹川・吉浦研究室)
 大学内の空き教室調査と意識・行動調査に基づく省エネルギーの可能性の考察……………(芹川・吉浦研究室)
 住宅における全館空調システムに関する研究 集合住宅における各種空調方式……………(岩本研究室)
 大学講義室における冷暖房負荷低減に配慮した窓開け換気の提案……………(芹川・吉浦研究室)
 二重壁間の地表面が道路交通騒音の伝搬に及ぼす影響 3次元波動数値解析による検討……………(安田・森長研究室)

デザインコース

[卒業論文]

旧道の痕跡から見る横須賀中央駅前の空間構成……………(中井研究室)
 ソルフェージュスクールから見る吉村順三と音楽の関わり……………(松隈・姜研究室)
 シャルロット・ペリアンの棚のデザインに関する一考察 形態と言説の変遷に着目して……………(須崎・印牧研究室)
 木造建築の「基礎」の変容過程についての研究 戦前期の建築書籍を主資料として……………(内田研究室)
 建築家・浜ロミホの設計思想における「日本的」要素の変遷に関する研究……………(須崎・印牧研究室)
 大正時代に「一匡社」が創設した「理想郷」一匡邑についての研究 西村伊作の目指した住宅の建築的特徴と邑内の生活の状況の分析を中心に……………(内田研究室)
 横浜市内の斜面地に建つマンションの構成……………(中井研究室)
 大森山王地区における敷地および建物の変遷……………(中井研究室)
 相模大野駅前における中規模集合住宅を含む街区の構成……………(中井研究室)

[卒業設計 A]

あいまい化された境界 認識による住宅領域の構成……………(六角研究室)
 江の島の町をつなぐ斜面上建築……………(野村研究室)
 人と文化と継承 古民家改修による地域資源の再生と地域コミュニティ拠点の提案……………(曾我部・吉岡研究室)
 お手伝いから広がるコミュニティの構築 心と知識を育み、地域との繋がることも園の提案……………(六角研究室)

立体化路地渋谷 路地と看板類でつくる商業空間の提案・
 ……(曾我部・吉岡研究室)
 水と森の回遊路 愛甲郡愛川町における産業を基盤とした
 体験型施設の提案・……(上野研究室)
 都市に溶け込む 聖と俗が混在する新たな神社の提案・…
 ……(曾我部・吉岡研究室)
 人の居場所をつくる建築 廃校舎の改修で自給自足の拠
 点に・……(曾我部・吉岡研究室)
 住まいを開き街区を繋ぐ 大和市西鶴間における住み開き
 の提案・……(上野研究室)
 居心地の良い都市の実現 原町田における快適に過ごす
 ことができる都市建築の提案・……(曾我部・吉岡研究室)
 独没家(ひとりぼっち) 独りが集まる新しい集合形成・…
 ……(高橋研究室)
 生物多様性を軸に取り戻すまちの風景 団地解体に伴っ
 て生まれる暮らしの共命地・……(鈴木研究室)
 いきている山 山岳の性質を映し出す巡礼建築群の提案・
 ……(曾我部・吉岡研究室)
 居場所を見つける 横浜市緑区十日市場町における複合
 集合住宅の提案・……(山家・柏原研究室)
 街の遊び心を描く 子供の遊び場空間から導く街の新たな
 活動拠点の提案・……(六角研究室)
 地域の家 森林と市街地の境域における地域拠点としての
 小学校の提案・……(立花研究室)
 地域に開かれた人々の居場所 川崎市中原図書館の建て
 替え計画・……(松隈・姜研究室)
 ここだけの風景 横浜市港北区日吉本町におけるこども園
 の提案・……(上野研究室)
 農の景観とコミュニティを形成する集合住宅の提案 鎌倉
 市雪ノ下地区を対象として・……(山家・柏原研究室)
 +Farm Life 牛や鶏と共生するまち・……(鈴木研究室)
 人々をつなげる美術館・……(曾我部・吉岡研究室)
 行き来を豊かにするハブ建築 高速道路と接続した多拠
 点生活を促す中継地・……(高橋研究室)
 体験を撮る 城ヶ島における風景と過ごす美術館・…
 ……(立花研究室)
 TINY BASE in ODAIBA 新しい暮らしや生き方のイメー
 ジを実現するためのファクトリーベース・……(鈴木研究室)
 変化と不変 方丈記から考える可動住居・……
 ……(曾我部・吉岡研究室)
 「居住×拠点」横須賀市船越町仲通り商店街における新
 しい居場所の提案・……(山家・柏原研究室)
 心を紡ぐ 精神的なケアを必要とするこどもの自立を促す
 場の提案・……(六角研究室)
 共鳴のアーキテクチャ 環境音と音楽が織りなす環境に開
 かれた芸術鑑賞の場の提案・……(六角研究室)
 まざりあう対話 神宮前における新たな公共性の空間・…
 ……(曾我部・吉岡研究室)
 まちのかお 地域住民と観光客に向けた新たな大磯駅周
 辺の整備計画の提案・……(山家・柏原研究室)

CAVE STREET 線上の余白 スラム街の日常に根付く避
 難タワー及び避難経路の提案・……(六角研究室)
 Farmland Community 開成町における農地を有する住宅
 地計画・……(山家・柏原研究室)
 隣地建物から広げる公園の活性化 相模原市橋本近辺を
 対象として・……(山家・柏原研究室)
 VANILLA SKY 一自然が教え、自然が決める建築―…
 ……(須崎・印牧研究室)
 ∞ 都市公園における共生型社会の実現と防災拠点・…
 ……(須崎・印牧研究室)
 住宅地と商店街をつなぐ近隣商業施設の提案・…
 ……(山家・柏原研究室)
 立ち寄る音の溜まり場 横浜市保土ヶ谷区星川における
 演奏施設の提案・……(山家・柏原研究室)
 閑日月 瀬戸内海に馳せる自己意識創出の旅のはじまり・
 ……(六角研究室)

【卒業設計 B】

丘ノ上農藝セツルメント セツルメント運動の代表的拠点
 “ハル・ハウス”(1889-1964)の建築群の変遷に関する史的
 研究をもとに・……(須崎・印牧研究室)
 共用空間を中心とした集合住宅群の提案 神奈川県宮羽
 沢グリーンハイツを対象として・……(松隈・姜研究室)
 記録される街並み -駅前再開発を再考する 一室ヴォリュ
 ムを含む現代住宅作品の構成研究を踏まえて・…
 ……(中井研究室)
 共生 横浜郊外におけるエコビレッジの提案・…
 ……(立花研究室)
 横須賀市汐入町の谷戸地形における、シーンの連なりから
 みる坂の構成・……(中井研究室)

修士論文

繋がりを生み出す街 Bus-HUB から生まれる街のコミュニ
 ティ形成の提案・……(六角研究室)
 漁村を支える見えない壁 日和佐漁港周辺における防潮
 堤を利用した新たな親水空間の提案・…(曾我部研究室)
 明治天皇の行幸が行われた住宅とその行幸時の使われ方
 に関する研究 近代日本の上流層の住宅における洋館の
 導入過程について・……(内田研究室)
 島を憶える 沖縄県与那国島の風土に呼応する建築の提
 案・……(六角研究室)
 マレーシア・ペナン島ジョージタウンにおけるショップハウス
 街区の外部空間を活かした観光交流施設の提案 ショップ
 ハウス以外の建物の混在と外部空間からみた街区構成を
 踏まえて・……(中井研究室)
 境界のふるまいによる木造密集地域の更新法 東京都墨
 田区京島地域を対象として・……(山家研究室)

個から集へ 新宿若葉地区における住宅密集地の更新法の提案……………(六角研究室)

中国成都市都心の大規模街区における住棟が形成する外部空間の構成 太昇地区を対象として……………(中井研究室)

高度経済成長期の再開発を手がかりとした都市の更新手法 鶴見駅東口地区を対象として……………(山家研究室)

スポーツチームとまちを共鳴させる井戸端的建築 川崎市等々力陸上競技場周辺を対象として……………(山家研究室)

精神を癒せる環境がある道路空間プロジェクト 徳島県美波町を題材として……………(曾我部研究室)

少子高齢化中の子どもたちを学校から解放 「旧」ヒマラヤセンターの「新」利用……………(曾我部研究室)

城中村における公共空間のあり方についての研究 深圳市鶴洲旧村を対象として……………(山家研究室)

蘇る故郷の風景 富山県山王地区矢部を対象としたヴァナキュラー・オブジェクトの提案……………(六角研究室)

土を建材として用いた建築 中国における土を用いた循環型建築の設計……………(曾我部研究室)

近代土木遺産としての新たな保存活用手法の提案 旧住吉浄水場施設群(1931年竣工)の地域産業博物館としての活用計画……………(内田研究室)

[スキマ]から考える居場所あるまち 閉じながらも開く住まい方の提案……………(六角研究室)

水辺街並み地域の魅力の復活について 観光と住民の暮らしが共生する環境の研究……………(曾我部研究室)

戦後沖縄におけるコンクリートラーメン構造の住宅の外形成成……………(中井研究室)

機械式亀裂補修部品のせん断疲労実験……………(藤田研究室)

歴史的組積造建物の動的変形限界……………(島崎研究室)

鋼板シャコネクタを用いた LVL 梁と RC 床板の接合部耐力に関する研究……………(藤田研究室)

リユースを想定した鋼材の機械的性質に関する基礎研究 解体工事による曲げ損傷の影響……………(藤田研究室)

リユース材を用いた山形ラーメン架構の柱梁接合部実験……………(藤田研究室)

博士論文

Optimal placement of dampers in structures based on target-oriented krill herd algorithm……………(島崎研究室)

Energy path analysis of circular confined concrete stub columns subjected to axial compression……………(島崎研究室)

研究室紹介

建築学部 建築学科

- 【新機能型構法研究室】……………島崎和司、白井佑樹……………
- 【耐震耐風構造研究室】……………吉江慶祐、楊暁雨……………
- 【サステナブル構造研究室】……………藤田正則、中村慎……………
- 【災害リスクマネジメント研究室】…朱牟田善治、落合努……………
- 【建築環境工学研究室】……………岩本静男、藤本遼……………
- 【音・光環境研究室】……………安田洋介、劉金雨……………
- 【建築環境・設備研究室】……………芹川真緒、吉浦温雅……………
- 【建築史研究室】……………松隈洋、姜明采……………
- 【都市デザイン研究室】……………曾我部昌史、吉岡寛之……………
- 【建築計画研究室】……………中井邦夫、鈴木成也……………
- 【建築デザイン研究室】……………六角美瑠……………
- 【建築史研究室】……………内田青蔵……………
- 【住宅デザイン研究室】……………鈴木信弘、菊井悠央……………
- 【生活デザイン史研究室】……………須崎文代、印牧岳彦……………
- 【居住環境デザイン研究室】……………立花美緒……………
- 【都市計画研究室】……………山家京子、柏原沙織……………
- 【建築保存活用研究室】……………野村和宣、塩脇祥……………
- 【不動産デザイン研究室】……………高橋寿太郎……………
- 【まちづくり研究室】……………上野正也……………
- ……………Stanley Russell……………
- 建築系実験室……………
- 建築ものづくり工房……………

研究室紹介

大学院 工学研究科 建築学専攻

[博士前期課程・博士後期課程]

【新機能型構法研究室】	島崎和司
【耐震耐風構造研究室】	吉江慶祐
【サステナブル構造研究室】	藤田正則
【災害リスクマネジメント研究室】	朱牟田善治
【建築環境工学研究室】	岩本静男
【音・光環境研究室】	安田洋介
【建築史研究室】	松隈洋
【都市デザイン研究室】	曾我部昌史
【建築計画研究室】	中井邦夫
【建築デザイン研究室】	六角美瑠
【建築史研究室】	内田青蔵
【都市計画研究室】	山家京子
【不動産デザイン研究室】	高橋寿太郎
	Stanley Russell
建築系実験室	
建築ものづくり工房	

新機能型構法研究室

しまざき かずし

島崎 和司 (教授)

しらい ゆうき

白井 佑樹 (助教)

最終学歴／島崎 和司

1995 年 3 月 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程
社会開発工学専攻修了 博士 (工学)

最終学歴／白井 佑樹

2016 年 3 月 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程
環境理工学創造専攻修了 博士 (工学)



島崎 和司



白井 佑樹

研究分野 建築構造工学、鉄筋コンクリート構造、合成構造、耐震設計法、新機能性構法、

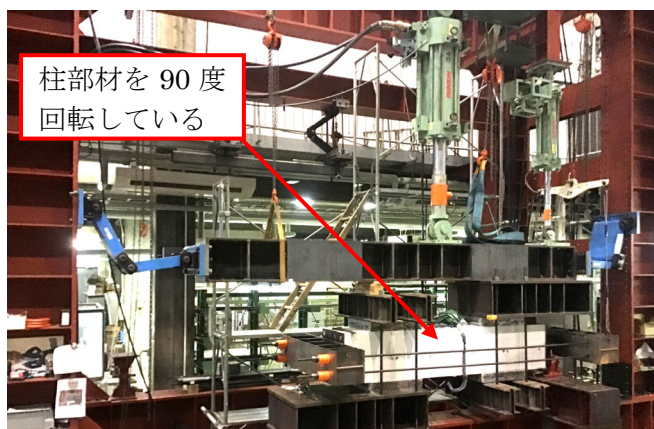
研究内容 鉄筋コンクリート構造、耐震設計法、免震・制振構造、損傷制御型新機能性構法

研究題目 鉄筋コンクリート構造物の地震時や常時の安全性能、振動制御型鉄筋コンクリート構造の研究、損傷制御型新機能性構法の開発、鉄筋コンクリート構造物の使用性能に関する研究、既存鉄筋コンクリート構造の地震時損傷リスクの検討

研究紹介

建物の設計法は、その建物が持つ性能を評価する性能設計法へと変化してきています。建物の性能のうち最も重要なのは安全性です。特に阪神淡路大震災以降、地震に対する安全性の要求性能は変化してきています。大地震時に鉄筋コンクリート造建物などのように抵抗し、変形するか、中小地震時にはどの程度の被害レベルになるのかなどの研究を進めています。地震に対して最も安全性の高いとされる免震建物の長期にわたる変動が耐震性能に与える影響についても研究しています。さらには、新しい構造形式としてエネルギー吸収・損傷制御型 RC 構造やハイブリッド構造等の新機能型建築構法についても研究をしています。

建築物の“性能”が評価される今、社会の安心の礎を築く



鉄筋コンクリート造柱部材の構造性能検証実験

卒業研究テーマ

損傷低減型構造システム／アンボントプレストレスト構法／RC 制振部材／RC 造の地震後の損傷・性能評価／複合構造の接合法

発表論文

- 1) Yuki SHIRAI, Kazushi SHIMAZAKI, Performance of Prestressed Concrete Beam Incorporating an Axial Yield Damper Using Unbonded Rebar, Proceedings of International Structural Engineering and Construction, Volume 7 Issue 2, STR-30, New Zealand (2020.11)
- 2) 白井佑樹, 島崎和司, 粘弾性ダンパーを付加したアンボンド圧着型 PC フレームの水平載荷性能 その 1 静的・動的載荷実験による評価, 日本建築学会技術報告集, 26(62), 136-140 (2020.2)
- 3) 島崎和司, 白井佑樹, 平行配筋されたアンボント PCaPS 梁の変形に伴う軸方向力増大を考慮したせん断力-部材角関係, コンクリート工学年次論文報告集, 41 (2), 511-516 (2019.7).

所属学会 島崎 和司 日本建築学会、日本コンクリート工学会、ACI、日本地震工学会、EERI、日本免震構造協会
白井 佑樹 日本建築学会、日本コンクリート工学会

現研究室構成員：教授 1 人 助教 1 人 大学院生 4 人 学部生 9 人

研究室構成員募集：客員研究員 特別研究員 大学院学生 (社会人)

耐震耐風構造研究室

よしえ けいすけ
吉江 慶祐 (教授)

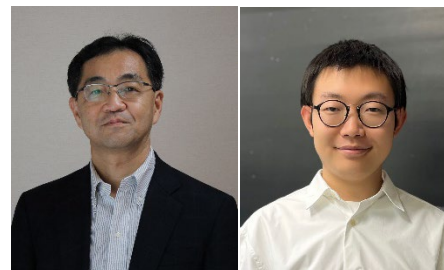
やん しゃおゆう
楊 暁雨 (助教)

最終学歴／吉江 慶祐

2007 年 3 月 東京工業大学大学院環境物理工学創造専攻博士課程修了
博士 (工学)

最終学歴／楊 暁雨

2022 年 3 月 東京工業大学大学院建築学系博士後期課程修了
博士 (工学)



吉江 慶祐

楊 暁雨

研究分野 (構造耐震耐風安全性・構造解析)

制振構造・免震構造の暴風・地震に対する動的挙動とその予測法に関する研究, 制振構造・免震構造の構造安全性の検証方法・設計法に関する研究を行う。

研究内容

制振構造・免震構造の暴風・地震に対する動的なふるまいの分析を通じ, 風荷重や地震荷重の性質と構造物の応答の関係を調べ, 制振構造・免震構造の地震・風に対する応答予測方法や構造安全性の検証方法や設計法に関する研究を行っています。

研究紹介

- 免震構造物の弾性限界を超える領域の風応答予測手法・設計法と, 地震・風などの不規則な振動を受ける免震部材の疲労特性を調査し, 免震部材の健全性評価方法を研究します。
- 曲げ変形が卓越する塔状比の大きな構造物の制振構造の方法を, 制振時の骨組みの変形の追跡し変形制御のメカニズムを調べ, 効果検証を行います。
- 数値流体力学 (CFD) の構造設計へ応用するために, 建物周りの風圧力・風力を調べ, CFD モデリングの基礎資料を構築します。
- 構造部材・非構造部材の力学的挙動を実験的に調べ, 耐震性能の評価方法, 設計法を研究しています。

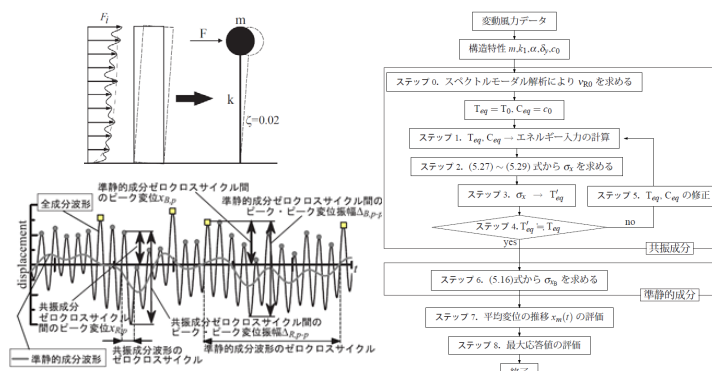


図1 弾塑性構造物の確率統計的風応答予測法

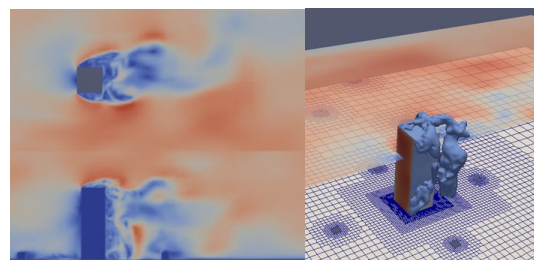


図2 建物周りの風の流れ

発表論文

- 吉江 慶祐: 変動風力を受ける弾性構造物のレインフロー振幅の確率分布モデル, 日本建築学会構造系論文集, 第 818 号, pp.367-376, 2024.4
- 吉江 慶祐, 北村 春幸, 大熊 武司, 和田 章: エネルギーの釣合に基づく平均成分を有する広帯域性変動風力を受ける弾塑性構造物の応答予測手法, 日本建築学会構造系論文集, 第 608 号, pp.21-28, 2006.10
- 吉江 慶祐, 北村 春幸, 大熊 武司: 変動風力による弾塑性構造物への総エネルギー入力に関する研究, 日本建築学会構造系論文集, 第 572 号, pp.31-38, 2003.10
- Xiaoyu Yang, Shoichi Kishiki: Evaluation of ultimate strength of exposed column bases considering the bearing stress of foundation concrete. Engineering Structures, Vol.268, 114712, ELSEVIER, 2022.10

所属学会 吉江 慶祐 日本建築学会, 日本風工学会, 日本免震構造協会, 日本建築構造技術者協会
楊 暁雨 日本建築学会, 日本鋼構造協会

現研究室構成員: 教授 1 人 助教 1 人 大学院生 1 人 学部生 10 人

サステナブル構造研究室

ふじた まさのり

藤田 正則 (教授)

なかむら まこと

中村 慎 (助教)

最終学歴／藤田 正則

2000年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科 環境物理工学専攻
博士課程修了 博士(工学)

最終学歴／中村 慎

2022年3月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻
博士(工学)



藤田 正則



中村 慎

研究分野 建築構造工学, 建築鋼構造, サステナブル構造, 耐震設計法

研究内容 制振部材の開発, 鋼と木質材料のハイブリッド構造の開発, 鋼構造の長寿命化技術の開発

研究題目 座屈拘束ブレース, 鋼木質複合構造, 鋼構造のリユース, 鋼材の耐久性, 機械式亀裂補修工法

研究紹介

鋼構造分野における環境負荷削減を目指して下記のテーマについて研究開発を行っています。

1) 座屈拘束ブレースに関する研究

座屈拘束ブレースは軸方向力を伝達する部材(芯材)が座屈しないように, その外周を拘束材で補剛したもの(写真1)で, 耐震・制振要素として優れた構造性能を有しています。損傷制御設計により地震時のエネルギーを座屈拘束ブレースで吸収できるため, 建物を長寿命化することができます。

2) 鋼構造の部材リユースに関する研究

鋼構造の部材リユースは, 材料再生のためのCO₂排出をとまなわないので, 環境負荷を小さくすることができます。その実用化を踏まえ, 設計・加工・施工・解体の領域において, 部材リユースのための鋼構造技術の提案・分析・評価を行っています(写真2)。

3) 鋼木質複合構造に関する研究

鋼木質複合構造は, 木質材料をできるだけ多く使用して森林再生に貢献することを考え, 同時に構造物としての機能性と安全性を損なうことのないシステムを目指しています。鋼と木質材料をハイブリッドにすることで, 各々の材料の長所と短所を補完しています(写真3)。

4) 鋼材の耐久性に関する研究

鋼材の耐食性を高めるため, 溶融亜鉛めっきが用いられますが, 長期に渡る自然環境下では, 腐食が進行する場合があります。ボルトのめっき層の劣化状況などを観察し, その耐久性の評価を行っています。

発表論文

1) 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースの実験的研究 -充填材の影響を考慮した拘束材の局部破壊に関する検討, 日本建築学会構造系論文集, 第88巻, 第807号, pp.844-855, 2023年5月, 2) Proposal and application of structural soundness monitoring system for the buckling-restrained brace using steel mortar planks, Steel Construction, Design and Research Vol.15, pp.1-9, 2023, 3) 鋼モルタル板を用いた座屈拘束ブレースにおける芯材と拘束材のクリアランス調整工法に関する研究, 日本建築学会構造系論文集, 第87巻, 第791号, pp.20-30, 2022年1月, 4) Effects of the clearance between the core plate and restraining part on the structural performance of the buckling-restrained brace using steel mortar planks, Steel Construction, Design and Research Vol.15, pp.1-12, 2022, 5) 鋼構造環境配慮設計指針(案)-部材リユース-, 日本建築学会, 2015.12

所属学会 日本建築学会, 日本鋼構造協会, 日本免震構造協会, 日本技術士会, IABSE, STESSA

現研究室構成員: 教授1人, 助教1人, 学部生13人, 大学院生5人



写真1 座屈拘束ブレース



写真2 部材リユース



写真3 鋼木質複合構造

災害リスクマネジメント研究室

しゅむた よしはる
朱牟田 善治 (教授)

おちあい つとむ
落合 努 (助教)

最終学歴/朱牟田 善治

1991年3月 東京都立大学 博士(工学)

最終学歴/落合 努

2022年3月 神奈川大学 博士(工学)



朱牟田 善治

落合 努

研究内容 地域の災害リスクの軽減化

研究分野 地震工学、構造工学、都市防災工学、地盤工学

研究題目 地盤震動特性評価、建物の地震応答特性評価、災害危険度評価、センシング応用技術
サイスミック・マイクロゾーニング、自然災害リスクの評価と低減に関する研究

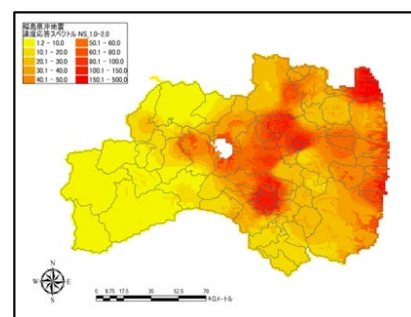
研究紹介 地震・気象災害に関連して地盤構造と建物被害の関連性、地域の防災対策を調査研究し、災害予測と防災対策をソフト面・ハード面から検討して効果的な災害リスク軽減化手法の研究



センシング技術の開発



被害調査 (液状化)



地震動強度の空間スペクトル特性

当研究室は、地震工学、地盤工学および都市防災工学をベースとして、地震によって引き起こされる地盤と建物被害発生メカニズム、気象・地震災害に関する被害予測と防災対策について研究を行っています。我が国は、これまで様々な自然災害に見舞われてきましたが、社会環境や災害環境も常に変化し続けています。例えば、2011年に発生した東日本大震災は、これまで経験したことのない未曾有の大規模地震でしたし、現在では南海トラフ地震や首都直下地震の発生可能性が高まっています。また、地球温暖化の影響により、近年、日本近海の海水温が上昇し、気象関連の災害が多発しています。2019年の台風15号や19号のような記録的な台風、爆弾低気圧、大雨や洪水など、これまであまり経験したことがない規模で、人々の暮らしを脅かすような激甚災害がたびたび発生するようになってきています。このような自然災害に対して、建築構造物をいかに守るか？、時代によってどんどん変化する人々のくらしや建築構造物をふまえ、災害に強いまちづくりとはなにか？、災害発生時にどう対処すれば被害を最小限に抑えられるのか？など、最新のセンシング技術なども応用し、ハード対策とソフト対策を組み合わせることで都市の災害リスクをいかにマネジメントしていくかという視点で、研究を行っています。

発表論文 1) 朱牟田善治、永井 淳也、落合 努、荏本 孝久: 福島地域の地震動スペクトルの分布特性, 第12回インフラ・ライフライン減災対策シンポジウム, p. 140-145, 土木学会, 2022. 2) Yoshiharu Shumuta: Practical seismic upgrade strategy for substation equipment based on performance indices, Earthquake Engineering & Structural Dynamics, Special Issue: Earthquake Engineering for Electric Power Equipment and Lifeline Systems, Volume 36, Issue 2 pp209-226, 2007. 3) 落合 努、荏本 孝久、松田 磐余: 地形発達史が異なる地形区の常時微動H/Vスペクトル比と堆積層厚の関係 ハザードマップに常時微動を適用する一考察, 日本地震工学会論文集, 第21巻、第5号、2021. 4) T. Ochiai et al.: CREATION OF A HAZARD MAP CONSIDERING REGIONAL CHARACTERISTICS BY MICROTREMOR, Journal of Japan Association for Earthquake Engineering, Vol.20, No.8, 2020.

所属学会 日本建築学会、土木学会、電気学会、地震工学会、地盤工学会、地域安全学会、物理探査学会

現研究室構成員: 教授 1 人 助教 1 人 大学院生 0 人 学部生 12 人

建築環境工学研究室

いわもと しずお

岩本 静男 (教授)

ふじもと りょう

藤本 遼 (助手)

最終学歴／岩本 静男

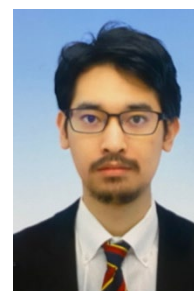
1989 年 3 月 明治大学大学院工学研究科博士後期課程建築学専攻修了
(工学博士)

最終学歴／藤本 遼

2022 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻
博士前期課程修了 修士(工学)



岩本 静男



藤本 遼

研究分野 建築環境工学

研究内容 1) 建築内外の温熱環境・空気環境に関する研究、2) 住宅設備・建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究

研究題目 建築内外の気流分布を数値解析により予測する方法に関する研究、人体の温冷感を予測する方法に関する研究、建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究、住宅の冷暖房・給湯設備に関する研究

研究紹介

1. 建築内外の温熱環境・空気環境に関する研究

簡単に紹介すると、「暑くもなく寒くもない」温熱環境と「汚れていない清浄な」空気環境を作り出すための研究を行っています。主として数値計算と実験室実験の2つを大きなテーマとしています。大学院生・卒研生ともども、数値計算もしくは実験による研究を自主的に進めています。実験が深夜におよんだり、計算結果が得られずに苦しむこともありますが、新たな発見を目指して積極的に取り組んでいます。実験室内には室内気候実験用チャンバーを設置して多種多様な空調方式・暖房方式による室内気候を再現できるようになっています。①実験室内に気温、湿度、気流などを計測するセンサーを多数設置し、空調方式・暖房方式の違いによる室内気温分布や気流の分布を計測し、温冷感の違いを評価する、②実験条件を与えて数値計算を行い、計算結果と実験結果の比較・検証を行う、③被験者やサーマルマネキンを実験室内に入れて暖房方式の違いによる温冷感や快適感の評価を行う、などの研究に活用しています。

2. 住宅設備・建築設備における省エネルギー・地球環境負荷削減に関する研究

住宅や事務所・ホテルなどの業務用建物に設置される設備では、冷暖房・空調・給湯のために大きなエネルギーを消費しています。省エネルギーのため、さらには地球環境負荷を削減するためにはどんな方策が考えられるかをテーマとし、ホテルや住宅の給湯設備、住宅暖房設備を中心に検討しています。また、実験室内には住宅用の給湯設備実験室を設置し、流量や湯温等を計測して消費エネルギーを求めたり、被験者実験による節湯効果を確かめる実験を行っています。

卒業研究テーマ 住宅用・業務用給湯システムの評価法に関する研究／室内空気分布計算における計算法・壁面境界条件に関する研究／各種暖房方式による室内温熱環境と消費エネルギーに関する研究／室内環境と着衣に関する研究／他

発表論文 1) S.Iwamoto, R.Ohnishi et al., The prediction method of supply water temperature for energy simulation of hot water supply systems Part 4, the Proceedings of CIB-W062 Symposium(2021). 2) Y. Misawa, S. Iwamoto, M. Iwata et al., Diagonally arranged louvers in integrated facade systems - effects on the interior lighting environment, Journal of Facade Design and Engineering, vol. 2(3-4), pp. 163-182 (2015). 3) 寺西翔平・岩本静男他、業務用ビルを対象とした結露リスク評価に関する研究：気密性能および断熱性能の違いによる結露リスク評価、日本建築学会環境系論文集、第80巻、第718号、pp.1133-1142(2015).

所属学会 岩本 静男 日本建築学会、空気調和・衛生工学会、生理人類学会、太陽エネルギー学会、人間－生活環境系学会
藤本 遼 日本建築学会、空気調和・衛生工学会、人間－生活環境系学会

現研究室構成員：教授 1 人 助手 1 人 大学院生 4 人 学部生 8 人

研究室設備：給湯設備実験室、室内気候実験用チャンバー、サーマルマネキン

卒業学生数：学部生 347 人 博士前期課程 28 人 (2022 年度末まで)

音・光環境研究室

やすだ ようすけ

安田 洋介 (教授)

りゅう じんゆう

劉 金雨 (助教)

最終学歴/安田 洋介

2004 年 3 月 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻
博士課程修了 博士(環境学)

最終学歴/劉 金雨

2022 年 3 月 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻
博士課程単位取得退学 博士(環境学)



安田 洋介

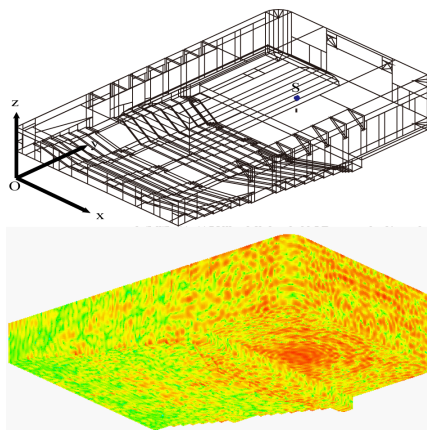


劉 金雨

研究分野 建築環境、音環境、騒音制御

研究内容 建築内外の音響設計のための数値シミュレーション手法の開発、床衝撃音低減のための遮音機構の開発、音響部材の特性把握、建築内外での騒音伝搬予測・対策、都市騒音の制御、音環境・視環境・複合環境の評価など

研究紹介 昨今、環境といえば CO₂ 削減や省エネといったいわゆる環境問題のことが頭に浮かびますが、建築に携わる上では、我々が日々の生活を営む器としての環境、またそれがもたらす QOL (Quality of Life) も同様に重視し、考えていく必要があります。当研究室ではこれらに密接に関わるものとして、建築環境工学の中でも音環境と光環境、特に前者を中心に研究を行っています。具体的には、より良い音環境の創出や騒音制御のための汎用的な数値シミュレーション手法の開発、それを応用した具体的な音場の予測、音場を形成する建築部材の音響特性の把握、建築内外での騒音伝搬予測・対策などに関わる研究を行っています。近年は、集合住宅で問題になりやすい床衝撃音の低減のための遮音機構の開発や、木造建築における音響透過問題、道路交通騒音や工事騒音といった都市騒音の予測・低減といった実務的な研究にも力を入れています。



発表論文 1) 日本音響学会道路交通騒音調査研究委員会, 道路交通騒音の予測モデル“ASJ RTN-Model 2023”, 日本音響学会誌, **80**, pp. 170-234 (2024). 2) T. Masumoto, *et al.*, Fast multipole boundary element method for aerodynamic sound field analysis based on Lighthill's equation, *J. Theor. Comput. Acoust.*, **31**, Article No. 2350009 (2023). 3) Y. Yasuda, *et al.*, A basic study on incidence directivity analysis using multipole and local expansions, *Acoust. Sci. & Tech.*, **43**, pp. 77-80, 2022. 4) Y. Yasuda, *et al.*, Effects of the convergence tolerance of iterative methods used in the boundary element method on the calculation results of sound fields in rooms, *Appl. Acoust.*, **157**, 106997, 2020. 5) Y. Iwane, *et al.*, Study on reduction of tunnel blasting infrasound using silencer with tube resonators, *Acoust. Sci. & Tech.*, **39**, 428-431, 2018. 6) J. Liu, *et al.*, Validation of the low-frequency procedure for field measurement of façade sound insulation, *Buildings*, **11**, No. 547, 15p., 2021.

所属学会 日本建築学会、日本音響学会、日本騒音制御工学会

現研究室構成員：教授 1 人 助教 1 人 大学院生 1 人 学部生 8 人

建築環境・設備研究室

せりかわ まお

芹川 真緒 (准教授)

よしうら あつまさ

吉浦 温雅 (助教)

最終学歴 / 芹川 真緒

2018 年 9 月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
博士課程修了 博士 (工学)

最終学歴 / 吉浦 温雅

2012 年 3 月 山口大学大学院理工学研究科情報・デザイン工学専攻
博士後期課程退学 博士 (工学)



芹川 真緒



吉浦 温雅

研究分野 建築環境工学、建築設備、住宅温熱環境、省エネルギー

研究内容 シミュレーションプログラムを用いた室温とエネルギーの計算、住宅の温熱環境の評価、壁体や建物の熱特性の評価、民家の温熱環境改善に係る提案等。

研究紹介

近年、省エネルギーや省CO₂に対する意識が、世界的に高まっています。エネルギー消費の内、住宅・建築物での消費は小さくない割合を占め、建築分野での省エネルギーは喫緊の課題です。一方、日本の住宅は、断熱性能が低く、冬期の寒さのために、居住者の健康に望ましくない影響が生じていると指摘されています。これらの解決に向けて、高い環境性能を有する住宅・建築物の普及が望まれます。

環境性能に優れた住宅の普及のためには、一般の居住者にその良さを認識してもらう必要があります。しかしながら、省エネルギーや光熱費削減の訴求力には限界があります。そこで、近年注目されているSDGs（持続可能な開発目標）と関連付けた住宅性能の評価を実施しています。また、住宅の温熱環境を、居住者の関心の高いと考えられる健康性に関連付けた評価方法の提案を行っています。

一方、住む人の快適性や健康性の向上のためには、新築の建物の性能向上のみではなく、既築建築の使われ方も、重要な検討事項です。歴史的に価値のある民家が活用されていますので、そこで生活する方々に、冬を暖かく過ごしてもらう技術を提案しています。

感染症対策に関連し、大学の講義室での換気の状態を調査しています。CO₂濃度を測定して、屋外の新鮮な空気と室内の空気が入れ替わっているか判断します。講義室の大きさや在室者数によりますが、換気設備が設置されていない講義室でも、少し窓を開けるだけで、適切に空気が入れ替わる状況が確認されました。一方、冷房時に窓が閉め切れ換気が不十分である状態や、反対に冷房時に窓を全開にして冷房エネルギー増加に繋がっていると考えられる状態の発生も確認されました。今後、運用の改善に繋げていく必要があります。

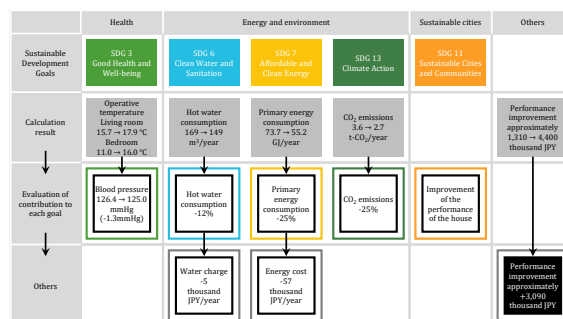
今後も引き続き、住宅・建築物の省エネルギーや環境性能向上に係る研究を進めていく予定です。

発表論文 1) Mao Serikawa, *et al.*, "Quantitative evaluation of the contributions of improved housing performances toward delivering sustainable development goals by a building energy simulation tool", *Sustainable Cities and Society*, Volume 79, April 2022. 2) 吉浦温雅, 奥山博康: 蒸発冷却利用の環境親和型クラディングのための基礎実験と予測計算, 日本ヒートアイランド学会論文集, 第13巻, pp.1-6, 2018.7

所属学会 日本建築学会、空気調和・衛生工学会

現研究室構成員: 准教授 1 人 助教 1 人 学部生 9 人

卒業学生数: 12 人



SDGs と関連付けた住宅性能の評価例



農家が活用された調査対象の福祉施設

建築史研究室

まつくま ひろし

松隈 洋 (教授)

かん みよんちえ

姜 明采 (助教)

最終学歴／松隈洋

1980年3月 京都大学工学部建築学科卒業

博士(工学・東京大学)

最終学歴／姜明采

2019年3月 神奈川大学工学研究科博士課程建築学専攻修了

博士(工学)



松隈 洋



姜 明采

研究分野 近代日本建築史・近代韓国建築史

研究内容 モダニズム建築、建築設計方法論、建築アーカイブ、建築・建築家の史的調査研究、別荘地研究、関東大震災後の復興建築

研究紹介

1:近代建築史・建築設計方法論に関する研究

現代の身近な生活環境を形作ってきた工業化を前提とするモダニズム建築 (Modern Architecture) の歴史と先駆者となった建築家の思想と設計方法論についての研究を行っています。特に、ル・コルビュジエとアントニン・レーモンドに師事し、戦前戦後の日本のモダニズム建築を牽引した前川國男や、同じくル・コルビュジエに師事した坂倉準三などを中心に、村野藤吾、坂倉準三、丹下健三、大高正人、鬼頭梓らについて、残された設計原図や写真など、建築アーカイブ資料を元に考察を進めています。また、それらの蓄積を元に、保存や改修の方法についても研究しています。



前川國男 京都会館 1960年

2:近代日本建築史・近代韓国建築史研究

近代日本建築史研究として、建築の史的調査をはじめ、建築家の活動や住宅地・別荘地の開発などを取り挙げ、歴史的観点から分析を行っています。また、戦前期韓国で活躍した日本人建築家の建築活動に注目し、近代韓国建築史に関する研究も積極的に行っています。関東大震災による横浜市の街並みの変化について、震災復興期建築の建設過程やデザインの特徴を中心に研究しています。

3:横浜の近代建築史・都市史研究

横浜の旧居留地に注目し、擬洋風建築から始まる建築のデザインの変化、あるいは、運河を中心とした景観の様相といった、街並みの変化に関する研究を行っている。このほか、日本が中国や韓国に開いた租界地などの調査も実施し、東アジアにおける建築の近代化の比較研究なども行いたいと考えています。

発表論文

松隈 洋 1) 松隈洋『建築の前夜 前川國男論』みすず書房、2016 (日本建築学会論文賞受賞)、2) 松隈洋『建築家・坂倉準三「輝く都市」をめざして』青幻舎、2021、3) 松隈洋『ル・コルビュジエから遠く離れて』みすず書房、2016、4) 松隈洋『モダニズム建築紀行』全2巻、六耀、社 2016、5) 松隈洋『残すべき建築—モダニズム建築は何を求めたのか』誠文堂新光社、2013、6) 松隈洋『坂倉準三とはだれか』王国社、2011、7) 松隈洋編『前川國男 現代との対話』六耀社、2006、8) 松隈洋『近代建築を記憶する』建築資料研究社、2005、9) 松隈洋『ルイス・カーン—構築への意志』丸善、1997 ほか

姜 明采 1) 姜明采・内田青蔵・須崎文代「復興記念館の建設経緯について—横綱町公園内建造物に求められた『日本趣味』について—」『日本建築学会計画系論文集』第84巻757号、日本建築学会、pp.661-669、2019.3、2) 姜明采・内田青蔵・須崎文代「震災記念堂(1930年竣工)の建設経緯について」『日本建築学会計画系論文集』第82巻734号、日本建築学会、pp.1028-1037、2017.4、3) 姜明采「震災記念堂の設計競技応募図案に見る大正期建築デザインの傾向」『非文字資料研究』14号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、pp.275-319、2017.3

所属学会 松隈 洋 日本建築学会 / 姜 明采 日本建築学会、建築史学会、日本生活学会、日本生活文化史学会、大韓建築学会、韓国建築歴史学会

現研究室構成員：教授1人 助教1人 大学院生1人 学部生4人

都市デザイン研究室

そがべ まさし
曾我部 昌史 (教授)

よしおか ひろゆき
吉岡 寛之 (助教)

最終学歴/曾我部 昌史

1988年3月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了

最終学歴/吉岡 寛之

2001年3月 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了 (修士(工学))



曾我部 昌史



吉岡 寛之

研究分野 建築設計

研究内容

都市やまちへの新しい視点での考察により、建築・都市デザインの可能性を実践的に追求する

研究題目

人の活動と地域との関係でみる建築・都市デザイン、まちづくり。

研究紹介

新しい可能性を一緒に探究するための場

都市の現実を相手に、われわれはどのような関わりをもつことが可能なのか。建築デザインやまちづくりの実践を通してその可能性を追求することが、この研究室の目標です。そのためには、具体的にコミュニケーションの場を構想するようなことから、新しいミーティング環境を創出することなど、さまざまなアプローチが考えられるでしょう。多様な探求を目指したいと考えていますが、その前提として、可能な限り実践的であること、そして、常識にとらわれない独自の視点を獲得することを基本的なスタンスにしたいと思っています。学生のみなさんには、このような探求に集中力をもって積極的に関わることを期待します。つまり、この研究室は、何らかの知見を受け取るだけの場ではなくて、新しい可能性を一緒に探求するための場である、ということです。

現在は、徳島県美波町での古民家再生や門前町の景観づくり、愛媛県今治市大三島での地域づくりに関連した建築プロジェクトを中心に、アートプロジェクトなどにも参加をしています。



来島海峡SA 店舗ゾーン/愛媛/2019



赤松防災拠点家具デザイン/徳島/2017



古民家永晴邸改修プロジェクト/徳島/2018

発表論文 1)著書：「アジアのまち再生-社会遺産を力に」(分担執筆、鹿島出版会、2017。 2)著書：「通りからはじまる“まち”のデザイン」(分担執筆) 建築資料研究社、2019。 3)作品：「来島海峡サービスエリア店舗ゾーン」、愛媛県今治市、2019。 4)作品：「美波町赤松防災拠点」、徳島県美波町、2017。 5) 論文：Hiroyuki Yoshioka, Masashi Sogabe, Miki Maruyama, and Akira Hasegawa /Study of town making using features of the current situation - Part 1

所属学会 曾我部昌史 日本建築学会、日本建築家協会、日本生活文化史学会、日本文化デザインフォーラム
吉岡 寛之 日本建築学会

現研究室構成員：教授 1人 助教 1人 大学院生 15人 学部生 12人

建築計画研究室

なかい くにお

中井 邦夫 (教授)

すずき なるや

鈴木 成也 (助手)

最終学歴／中井 邦夫

1999 年 3 月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程修了
博士(工学)

最終学歴／鈴木 成也

2013 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程修了
修士(工学)



中井 邦夫



鈴木 成也

研究分野 建築意匠、建築設計

研究内容 建築および都市の空間構成に関する研究

研究題目 ・都市建築タイポロジーに関する研究 ・戦後復興期における防火帯建築の構成に関する研究 ・空間配列による都市港湾地域の再構築に関する研究 ・住宅作品における空間構成に関する研究

研究紹介

人間は、家や病院で生まれ、学校や会社へ通い、住宅で家族と暮らし、そしてお墓に入るまで、一生を通じていつも建築とともに生活しています。あらゆる人間活動は建築や都市がつくり出す空間なしには成立しません。では、これらの多様な活動を支える空間は、どのような豊かさをもつべきでしょうか。人々の生活が多様化し、持続的な都市環境が求められるなか、私たちはどのような観点から空間をデザインしていくべきでしょうか。本研究室では、こうした問題について、実践的な活動や事例調査に基づく体系的な分析と理解を通して考察を深めます。そのことを通して、建築や都市の空間をデザインするうえでの独自の視点を発見し、研究論文や計画案としてまとめます。



台東区立浅草文化観光センター設計コンペティション佳作入賞案 (2008)



富久町の家 (リフォーム, 2013)

発表論文 1) 藤岡泰寛, 中井邦夫他, 横浜防火帯建築を読み解く—現代に語りかける未完の都市建築, 花伝社, 2020.3. 2) 鈴木成也, 中井邦夫, 都市中心市街地における建物の外形タイプとその立地および建設年代—横浜市伊勢佐木町一帯を対象にして-, 日本建築学会計画系論文集, No.754, pp.2313-2323, 2018.12. 3) 中井邦夫, 横浜の防火帯建築における空所の構成, 日本建築学会計画系論文集, No.708, pp.323-330, 2015.2. 4) 中井研究室, 富久町の家 (スノコ・ハウス), 第 30 回住まいのリフォームコンクール入賞, 公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター, 2013.10. 5) 坂本一成, 中井邦夫他, 建築構成学—建築デザインの方法, 実教出版, pp.84-93, 103-112, 2012.3. 6) 中井研究室+NODESIGN, 台東区立浅草文化観光センター設計コンペティション佳作入賞案, 2008.12.

所属学会 中井 邦夫 日本建築学会, 都市住宅学会

鈴木 成也 日本建築学会

現研究室構成員: 教授 1 人 助手 1 人 大学院生 7 人 学部生 8 人

卒業学生数: 学部生 104 人 博士前期課程 29 人

建築デザイン研究室

ろっかく みる

六角 美瑠 (教授)

最終学歴 / 六角 美瑠

2011 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了博士(工学)



六角 美瑠

研究分野 建築設計・建築意匠

研究内容 建築・環境・空間におけるデザイン・設計手法の研究

研究題目 空間フレーミング研究 (視環境・窓と空間に関する研究)、伝家研究 (家の歴史や生活などの継承の研究)、素材研究、建築物の改修・利活用に関する研究

研究紹介

私たちがとりまく環境と対話し、設計によって魅力的な空間として視覚的世界を構築することが建築デザインの面白さであり、役割の一つだと思います。「空間フレーミング研究」においては、建築を取り巻く外部環境を建築の「窓」を通じていかにデザイン操作できるかを研究しています。このように本研究室では、建築における構成要素と空間の関係を読み解き、距離感やスケール、人の感性に響くデザイン手法の設計への応用を考察し研究しています。また、建築の造作についても学び、素材や仕上げを探究したいと試みています。その先には、実際の住宅や地域の施設などを対象に、人やまちと関わる場としてプログラムと共に設計表現をしていくことを目指したいと考えています。



ORU 折織居 外観



BentBox 浅間観荘 外観



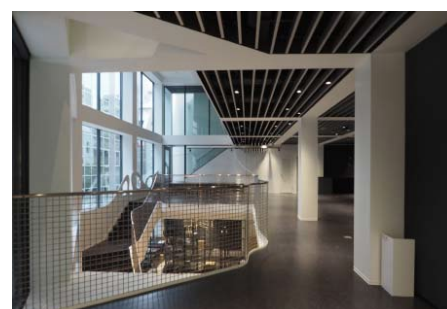
SeaForce bldg, 外観



ORU 折織居 内観



BentBox 浅間観荘 内観



SeaForce bldg, 内観

発表論文 1) 論文:「地域生態圏における空間フレーミング研究」特別教育・研究報告集 芝浦工業大学 2019 年 9 月 2) 論文:「全球マド全史 1・2」窓学アーカイブ 2014-2016 YKKap 窓研究所 2018 年 3 月 3) 窓に秘められている力「静と動」「名作住宅から学ぶ窓周りディテール図集」オーム社 2016 年 4 月 4) 作品:「光恩寺弁天堂」『SD 2019』鹿島出版会 2019 年 12 月

所属学会 日本建築家協会、臨床美術学会

現研究室構成員: 教授 1 人 大学院生 9 人 学部生 6 人

建築史研究室

うちだ せいぞう

内田 青蔵 (特任教授)



内田 青蔵

最終学歴／内田 青蔵

1983 年 3 月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻
博士課程満期退学(工学博士)

研究分野 日本建築史・近代建築史・日本住宅史

研究内容 建築の史的調査研究、住宅の史的調査研究、建築家に関する史的調査研究、建築保存再生計画、住宅地の史的調査研究、技術革新に関する史的研究、別荘地研究、日本及び海外（東アジア）の居留地研究、海外移民研究

研究紹介

1: 近代日本住宅史・近代日本建築史研究

近代日本建築史研究として、住宅の変遷をはじめ、建築家の活動や住宅地・別荘地の開発などを取り挙げ、歴史的観点から分析を行っています。

2: 横浜の近代建築史・都市史研究

大学の立地する横浜の建築史ならびに面的変化を扱う都市史研究として、旧居留地に注目し、擬洋風建築から始まる建築のデザインの変化、あるいは、インフラ整備から運河を中心とした景観の様相といった、街並みの変化に関する研究も積極的に行っています。近年は、横浜居留地と日本が開いた租界地などの調査も実施しながら、今後は東アジアにおける建築の近代化の比較研究なども行いたいと考えています。

3: 保存・再生に関する研究

欧米はもちろんのこと、わが国でも、近年、歴史的建造物の保存・再生の事例が増えています。こうした海外の事例や日本事例を取集し、その方法の整理分類といった研究も進めたいと考えています。



移築保存に携わった旧本多邸 (岡崎市)



「あめりか屋」手がけた、
日本初の女優・川上貞奴の自邸 (名古屋市)

発表論文

- 1) 茶谷亜矢・内田青蔵・姜明采「建築家・渡部栄治の経歴と建築作品について」『日本建築学会計画系論文集』第 88 巻第 806 号、pp.1432-1437、2023.4、2) 内田青蔵「明治 43-44 (1910-1911) 年の『東京朝日新聞』連載記事「時代の家屋」に見られる住宅間取り図について-わが国戦前期の中流住宅勃興期における住宅に関する一考察-」『常民文化研究』第 1 巻、pp.3-30、2023.3、3) 野々村明佳里、内田青蔵、姜明采、「同潤会の分譲住宅事業に関する研究 (その 2) -入居者選定のプロセスと広報活動について-」『日本建築学会計画系論文集』第 88 巻第 804 号、pp.657-665、2023.2、4) 内田青蔵ほか『和室礼讃——「ふるまい」の空間学』晶文社、2022、5) 下山美月・内田青蔵「建築家・竹腰健造の建築活動について-戦後の代表作品である聖心女子大学キャンパス計画を中心として-」『宗教と文化』第 38 号、聖心女子大学、pp.7-53、2022.3、6) 淵上貴由樹・内田青蔵「座敷の配置と用途にみる 2 階建て住宅の間取りの機能分化-戦前期刊行住宅書にみる 2 階建て独立住宅の理念形成に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第 86 巻第 790 号、日本建築学会、pp.2720-2730、2021.12、7) 「日本近代における『民家』へのまなざしと民芸運動について」『歴史と民俗：神奈川大学日本常民文化研究所論集』第 37 号、神奈川大学日本常民文化研究所、pp.463-505、2021.3、8) 内田青蔵他『和室学：世界で日本にしかない空間』平凡社、2020.10

所属学会 日本建築学会、建築史学会、日本生活学会、日本生活文化史学会、家具道具室内史学会、日本家政学会、日本産業技術史学会

現研究室構成員：特任教授 1 人 大学院生 1 人 学部生 2 人

住宅デザイン研究室

すずき のぶひろ

鈴木 信弘 (教授)

きくい ひさひろ

菊井 悠央 (助手)

最終学歴／鈴木 信弘

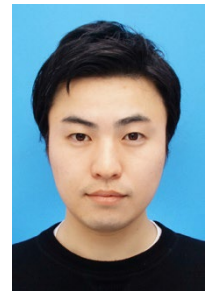
1988年3月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
修士 (工学)

最終学歴／菊井 悠央

2016年3月 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
修士 (工学)



鈴木 信弘



菊井 悠央

研究分野 住宅設計・設計手法・モジュール・建築家アーカイブ研究

研究内容

住宅の設計を通して、地域・環境・暮らしの可能性と魅力を考える。

研究題目

敷地の魅力を活かし、居場所を生み出し、暮らしやすい住宅の設計。

研究紹介

暮らしの器である「住宅」と人間の関係を考えることは大変楽しいものです。住宅は建築の中でも最も初源的な空間ですから、家族の生活行為を包み込むだけではなく、環境・周囲との対峙を意識し、精神の充足を感じる空間ともなり「住宅」は人間らしく生きていくためのすべての要素が含まれている建築行為なのです。本研究室は実際の住宅設計、住宅と地域の間を計画することを通して、1) 暮らしの要素である生活行為・しつらえの検証、2) 循環型社会と居住の構想、3) 住宅における空間性の模索、4) 敷地環境に合わせた計画の組み立て、5) 伝統構法における現代性の検討、6) 環境の変化と持続に対する調査、7) 環境・地域とのつながり方の模索、8) 建築家による設計アーカイブの収集など、実際の設計、見学、体験、視察、調査を通して各自が新たなテーマを見出し、研究や創作にまとめていきます。



図1：港北E邸（横浜市）在宅ワークの夫婦と2匹の大型犬が住むための住宅。リビングスペースの音環境に配慮して天井の形状と吸音の方法をデザインしている。



図2：古民家のリノベ。架構の雰囲気を残したデザインのまま、耐震改修、断熱改修、間取りの変更を行いBELSの5つ星を獲得。



図3：建築家の設計した住宅を訪ねて、設計者に直接インタビューを行うゼミの風景。事前に模型や図面を検討して質問を考えて臨む。

発表論文 1)著書：「住宅の設計（第二版）」（編著・執筆）市ヶ谷出版社,2023。2)著書：「最高の二世帯住宅をデザインする方法」（分担執筆）株)エクスナレッジ,2021。3)著書：かたづけの解剖図鑑」株)エクスナレッジ,2013。4)作品：「青山学院附属英和学院学生センターオーリーブ」,横浜市,2022。5)作品：「戸塚H邸」,横浜市,2019,感境建築コンペ優秀賞,神奈川建築士会。6)作品：「明治期140年民家の再生U邸」,東京都,2021, JIA 環境建築賞,2023,第6回日本エコハウス大賞リノベ部門最優秀賞,エクスナレッジ社。7)作品：鈴木信弘+神奈川大学建築学科デザインコース教員「神奈川大学29号館」,横浜市,2015,神奈川建築コンクール環境賞,神奈川県。8)作品「黒の巣箱」,横浜市港北区,2005,神奈川建築コンクール入賞,神奈川県。9)作品：「篠原東M邸」,横浜市港北区,2023。10)作品：「上連雀の家K邸」,東京都三鷹市,2023。11)作品：「つかずはなれずの家ー緑園都市T邸」,横浜市泉区,2024。

所属学会 鈴木信弘 日本建築学会、神奈川建築士会、新木造住宅技術研究協議会

現研究室構成員：教授1人 助手1人 学部生5人

生活デザイン史研究室

すぎき ふみよ
須崎 文代 (准教授)

かねまき たかひこ
印牧 岳彦 (助教)

最終学歴/須崎 文代

2014 年 3 月 神奈川大学大学院工学研究科建築専攻博士後期課程修了
博士 (工学)

最終学歴/印牧 岳彦

2021 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了
博士 (工学)



須崎 文代

印牧 岳彦

研究分野 建築史、住宅史、生活史

研究内容 住宅および生活デザインに関する建築史研究

研究題目 I：身体、II：技術、III：芸術、IV：共同性の4点に着目した生活デザインの建築史的研究

研究紹介 人間生活を成立させる建築と生活デザインの歴史について、主に住宅史、建築史、生活史の観点から研究を行っています。また地球環境にも目を向け、人間生活と自然環境との関係性の再構築を目指した調査研究を、実践的活動と合わせて追求しています。具体的な研究課題は、たとえば近代衛生論の展開、住宅の水まわり（台所・風呂・トイレ）の変容、生活共同体と相互扶助、ブラジル日本人移民住宅、旧渡辺甚吉邸など歴史的建造物の保存再生、環境やエコロジーといった視点からの近代建築史・建築理論の再検討などがあります。

(1) 近代衛生、水まわり空間の史的 연구——近代以降に展開した衛生論とその実践、および住宅の台所・風呂・トイレ等の水まわり空間の歴史に関する研究。

(2) セツルメントハウスの史的 연구——19 世紀後期以降の英米で相互扶助や共同生活を目的に実践されたセツルメントハウスの、国内外での展開に関する研究。

(3) 「小さな地球プロジェクト・里山スクールオブデザイン SSD」でのサーベイ——[人間-建築-自然環境]の事物連関に関するフィールドサーベイと新たなデザインの提案。

(4) 近代の建築言説・表象における「環境」概念についての研究——20 世紀初頭を中心とした近代建築の議論における、人間を取り巻く「環境」を制御するという発想の形成・展開過程についての研究。

発表論文

- 1) 須崎文代：居住生活の境域と縁—ドメスティック・ディスタンス II，現代思想，Vol. 50 No.2, pp. 123-134, 2022.2
- 2) 須崎文代：生活の《解体》考—暮らしと住まいを見つめる学問の軌跡，歴史と民俗，Vol.37, pp. 301-325, 2021.3
- 3) 内田青蔵，須崎文代，中谷礼仁，三浦清史：旧渡辺甚吉邸の建築的特徴に関する歴史的調査と評価，VSPORT 研究助成共同研究成果報告書，2021.9
- 4) 印牧岳彦：コーウィン・ウィルソンによる「移動住宅」の提案とその思想的背景，日本建築学会計画系論文集，Vol.85, No.774, pp. 1801-1808, 2020.8
- 5) 印牧岳彦：アドルフ・ロースの論考「劇場」の執筆背景および歴史的 position 付けについての研究，日本建築学会計画系論文集，Vol.85, No.769, pp. 743-751, 2020.3

所属学会 須崎 文代 日本建築学会，日本生活学会，日本生活文化史学会，建築史学会，家具道具室内史学会，日本産業技術史学会，日本家政学会 / 印牧 岳彦 日本建築学会，建築史学会，表象文化論学会，日本生活学会

現研究室構成員：准教授 1 人 助教 1 人 学部生 5 人



図 1：フランクフルト・キッチン（フランクフルト・アム・メイン、エルンスト・マイ・ハウス）：近代における台所空間の効率化の例



図 2：再生民家「ゆうぎつか」（鴨川市釜沼、小さな地球プロジェクト）のコンポストトイレ：環境やエコロジーに配慮した循環型トイレのサーベイとデザインスタディ

居住環境デザイン研究室

たちばな みお

立花 美緒 (准教授)

最終学歴 / 立花 美緒

2006 年 3 月 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了
博士 (工学)



立花 美緒

研究分野 建築設計、建築計画、建築意匠

研究内容 居住環境、住宅、集合住宅の建築設計、学校建築計画、図書館建築計画

研究題目 地域社会に貢献する住宅及び集合住宅の設計手法、コロナ禍における執務空間の家具配置計画、小中高等学校における内部広場の空間構成と利活用、課題解決型図書館の設計手法 他

研究紹介

地域社会とともに暮らす居住環境をデザインする

コロナ禍で、リモートワークやワーケーションといったように、住まいと仕事の関係や、暮らしの価値観は大きく変容しています。このような社会的背景と居住環境の関係を、現在と過去から学び、未来の豊かな暮らしを支える住宅を、実践的に提案する研究室です。近現代の住宅と集合住宅、国内外の集落、生産と消費を再縫合する暮らし等について、文献とフィールドワークでリサーチし、地域社会に貢献する建築とインテリアをデザインします。居住環境の在り方について、学生も教員も、自ら学び、共に学ぶ姿勢を大切にしています。現在は、エコヴィレッジ、執務空間、国内及びヨーロッパの小中高等学校及び図書館の空間構成と家具に関するリサーチ、住宅と集合住宅の設計を行っています。



蝶番の家 写真 : 太田拓実



長押の室

発表論文

- 1)立花美緒; 蝶番の家, 新建築住宅特集 2018 年 10 月号, pp. 146-151, 2018.
- 2)M. Tachibana et al.; "HINGE HOUSE": Space embracing plural people, activities, and objects by devising a timber frame joint, Japan Architectural Review, vol.4, no.1, pp.22-27, 2021.
- 3)立花美緒他; デンマークのギムナジウムにおけるコモンコアの空間構成と使われ方, 日本建築学会計画系論文集, Vol.85, No.775, pp.1841-1851, 2020.
- 4)立花美緒他; デンマークの学校における英語の授業活動とセッティングのシステム, 日本建築学会計画系論文集, Vol.87, No.793, pp.510-520, 2022.
- 5)山崎鯛介, 小林正泰, 立花美緒; 日本の美しい小学校, エクスナレッジ, 2016.

所属学会 立花 美緒 日本建築学会

現研究室構成員 : 准教授 1 人 学部生 5 人

都市計画研究室

やまが きょうこ
山家 京子 (教授)

かしはら さおり
柏原 沙織 (助教)

最終学歴/山家 京子(e-mail: yamaga@kanagawa-u.ac.jp)
1992年3月 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了
博士(工学)

最終学歴/柏原 沙織(e-mail: kashihara@kanagawa-u.ac.jp)
2018年3月 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了
博士(工学)



山家 京子



柏原 沙織

研究分野 山家 京子 建築・都市計画 柏原 沙織 歴史的都市景観・都市デザイン

研究内容 都市空間に関する研究、まちづくりに関する実践的取組み

研究題目 都市居住とコミュニティに関する研究と設計的検討、地域資源を活かしたまちづくりに関する調査研究及び実践的取組み、郊外住宅地の持続可能性に関する調査研究、公共空間の利活用に関する研究と設計的検討、関係人口の創出を促進する空間に関する調査研究、商業地における創造型景観形成に関する調査研究

研究紹介

都市空間における場の生成をテーマとし、フィールドワークに基づく調査研究を実施するとともに、持続可能なまちづくりに実践的に取り組んでいます。

本研究室では2016年度より、横浜市との協定に基づき横浜市十日市場駅周辺地域におけるまちづくりに取り組んでいます。たからもの探しワークショップ+マップづくり、住民のヒアリングに基づく思い出・生活カード作成などを実施し、それらを報告書としてまとめました。「たからもの探しワークショップ」(図1)では、学生と地域住民が地域の魅力を再発見する場として、まち歩き、個人たからものマップづくりなどを行い、そこで抽出された地域たからものを建築学科生の観点から「十日市場たからものマップ」としてまとめました。また、これらの取組みから、愛着のある場所に関する考察を行い、住宅地計画を検証するとともに、今後の持続可能なまちのあり方を検討します。

2022年度からは鎌倉市との包括協定に基づき、小町通りにおける景観形成支援に取り組んでいます。古都でありながら分かりやすい景観形成の規範がない中で、現地調査から景観特徴を抽出したほか(図2)、学生からの設計提案を元に商店会会員や市民、学生がワークショップを通して小町通りらしさについて議論し、キーワードを抽出してシーン集を作成しました。引き続き、鎌倉らしい景観形成に向けた合意形成に資する手法やツールを検討していきます。

卒業研究テーマ

郊外住宅地における生活圏および愛着のある場所・居場所に関する研究/民間空地活用事例に関する調査研究/コロナ禍を契機とした地域交流・施設に関する調査研究/海外の都市再生に関する事例研究 他

発表論文 1) Activities of Neighborhood Association and Evaluation of Residential Environment in Suburban Area of Yokohama, 共, Proceedings of 2023 International Conference of Asian-Pacific Planning Societies (ICAPPS), 1219-1236, 2023年8月. 2) 自治体による二地域居住に関わる取り組み-全国二地域居住等促進協議会の加盟自治体を対象としたアンケート調査から-, 共, 日本建築学会技術報告集29(71), 418-423, 2023年2月. 3) 民有空地の活用検討プロセスに関する実践的研究-川崎市八丁畷駅前空地における実験的取組みを事例として-, 共, 日本建築学会技術報告集26(64), 1173-1178, 2020年10月. 4) A Research on Community Involvement Complementing Residents' Association -A Case of Voluntary Community Activities in Yokohama Residential Suburb, 共, ICAPPS 2019 (Seoul), 2019年8月.

所属学会 山家 京子 日本建築学会、日本都市計画学会

柏原 沙織 日本建築学会、日本都市計画学会、都市住宅学会、日本環境心理学会



図1:「たからもの探しワークショップ」の様子



図2: 鎌倉小町通りでのフィールドワークの様子

現研究室構成員: 教授1人 助教1人 大学院生7人 学部生9人

建築保存活用研究室

のむら かずのり

野村 和宜 (教授)

しおわき しょう

塩脇 祥 (助手)

最終学歴/野村 和宜

1988年4月～ 三菱地所設計 (現在: エグゼクティブフェロー)

2019年3月 東京工業大学大学院 博士課程修了

最終学歴/塩脇祥

2015年3月 神奈川大学工学研究科建築学専攻博士前期課程修了
修士(工学)



野村 和宜



塩脇 祥

研究分野 建築保存活用、リノベーション、継承デザイン、都市再開発、歴史的景観、まちづくり

研究内容 歴史的建造物などの建築ストックを使い続けるためには、歴史をはじめとする多様な価値を顕在化させた上で、安全などの課題への対応、まちづくりへの対応、諸制度の活用などを検討することで、的確な方法によって価値継承と時代の要求に応えた機能更新を両立させる必要があります。そのための検討プロセスや技術的手法をはじめ、アーカイブスの構築による歴史的価値の発信方法などについて研究しています。

研究紹介

(1) 保存と活用・開発の検討プロセス

歴史的価値の継承、機能更新、まちづくりなどの与件を整理し最適案を生み出す検討プロセスの研究。

(2) 煉瓦造建造物の耐震・防火対策

明治期に建設された煉瓦造建造物の耐震・防火対策の手法における実践的研究。

(3) 歴史的な都市・集落のアーカイブス構築

都市や集落の歴史的価値を後世に残し発信するためのアーカイブスの構築と活用に関する研究。

(4) 実証実験型のまちづくり

地域ごとの特性や課題を発見し、持続的なまちづくりを目指す実験的な手法に関する研究。



図1 日本工業倶楽部会館の保存再生

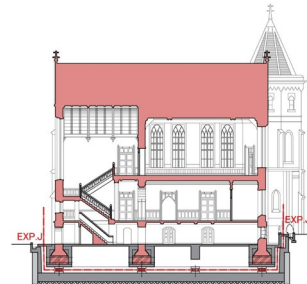


図2 煉瓦造の耐震・防火改修方法

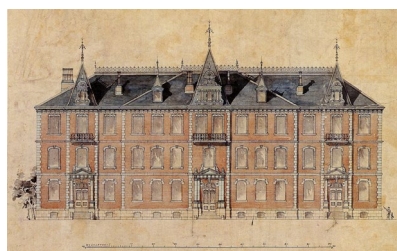


図3 街全体の建築アーカイブス



図4 空家の実験的活用(芸術展示)

発表論文

- 野村和宜, 山崎鯛介: 日本工業倶楽部会館の活用・継承検討プロセスについて -民間再開発において歴史的建造物を活用・継承する手法の検討プロセスに関する研究 (その1), 日本建築学会技術報告集, Vol. 23, No. 55, pp. 1043-1048, 2017. 10
- 野村和宜, 山崎鯛介: 歌舞伎座の活用継承検討プロセスについて -民間再開発において歴史的建造物を活用継承する手法の検討プロセスに関する研究 (その2), 日本建築学会技術報告集, Vol. 25, No. 59, pp. 477-482, 2019. 2
- 野村和宜, 山崎鯛介: 東京中央郵便局の活用継承検討プロセスについて -民間再開発において歴史的建造物を活用継承する手法の検討プロセスに関する研究 (その3), 日本建築学会技術報告集, Vol. 25, No. 59, pp. 491-496, 2019. 2

所属学会等 日本建築学会, 日本イコモス国内委員会

現研究室構成員: 教授 1 人, 助手 1 人, 学部生 5 人

不動産デザイン研究室

たかはし じゅたろう

高橋 寿太郎 (教授)

最終学歴/高橋 寿太郎

2000年3月 京都工芸繊維大学 工芸科学研究科 博士前期課程修了
修士 (経営学)



高橋 寿太郎

研究分野 建築企画、不動産マーケティング・ファイナンス、地方創生

研究内容 建築と不動産のあいだの領域にある諸事象についての研究

研究題目 建築企画のための不動産マーケティング調査に関する研究、リノベーションの企画と実現可能性
についての研究、建築プロジェクトの収益性とデザインに関する研究、地方における空き家バンクシステムの改善の研究

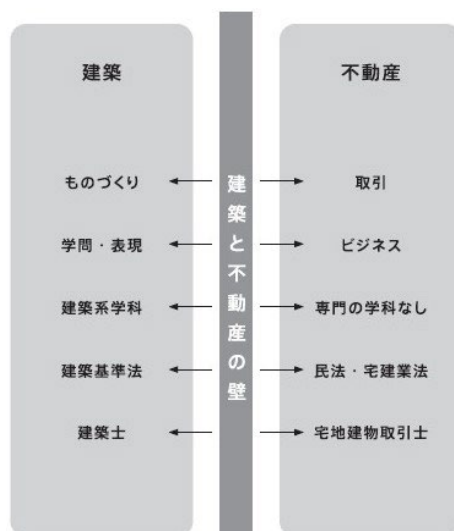
研究紹介

不動産デザイン研究室は「建築学と不動産学の融合」を理念とし、建築やリノベーションプロジェクトの成立条件 (不動産・マーケティング・ファイナンス) を考える分野である「建築企画」を積極的に行う日本で初めての研究室です。

少子高齢化が加速し、空き家が急増するなど、ストック社会に向かう産業構造が大きく変化する時代には、この建築企画と建築デザインやまちづくりを同時に考える人材が求められます。学生のみなさんには、こうした幅広い分野に興味を持ちつつ、さらにチームビルディングやプロデュースといった新しい領域の開拓を期待します。

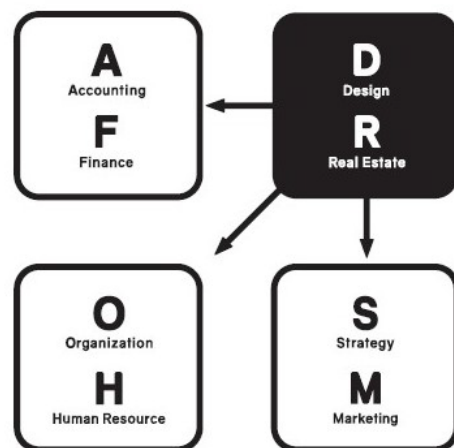
研究室が特に重視するのは、社会課題を解決させるための「広義のデザイン思考」です。社会やユーザーの課題解決に向けて、モノだけでなく、コトを構想・設計することを目指します。

リノベーションの企画と実現可能性
地方における空き家バンクシステム



建築と不動産のあいだの壁と融合

- A: 会計戦略・お金の仕組み
- D: 設計・建築計画
- F: ファイナンス・キャッシュフロー
- R: 不動産コンサルティング



- O: 組織構造・企業文化
- S: 経営戦略・市場分析
- H: 人材マネジメント・インセンティブ
- M: マーケティング・販路計画

建築不動産とマネジメント領域の関係性



建築企画事例『イマケンビル一棟リノベーション』2018

発表論文 1) 著書『建築と不動産のあいだ』学芸出版社 2015 2) 著書『建築と経営のあいだ』学芸出版社 2020 3) 著書 (監修)『建築学科のための不動産学基礎』学芸出版社 2021 4) 著書 (共著)『建築系のためのまちづくり入門』学芸出版社 2021

現研究室構成員:教授 1人

まちづくり研究室

うえの まさや
上野 正也 (准教授)

最終学歴/上野 正也
2015年3月 横浜市立大学都市社会文化研究科博士後期課程修了
博士(学術)



上野 正也

研究分野 まちづくり、創造都市、都市計画

研究内容 創造性を活かしたまちづくり、公共空間の利活用、エリアマネジメント

研究題目 創造性を活かした都市政策・都市づくりに関する研究、創造的産業と都市に関する研究、地域資源を活かしたまちづくりの検討及び実践、郊外住宅地の持続可能性に関する調査研究、公共空間の利活用に関する研究と設計的検討

研究紹介

複雑化する今日の都市・地域における課題に対して、様々なアプローチを検討し、その解決方法を探る必要があります。ここでは、ハード(建物)だけでなく、その場所での活動を考えることや管理・運営(マネジメント)といったソフト面を含めて考えることが大切です。

そこで、本研究室では、地域に求められる建築やこれからの都市像を考えるにあたって、その検討プロセスを重視し、地域調査を経て空間づくりに取り組みます。

また、まちづくりの実践的取組みとして、2022年度より都市計画研究室と協働し、横浜市十日市場駅周辺地域におけるまちづくりの推進にかかわっています。本取組みは横浜市との協定に基づき実施しているものであり、地域への愛着を育むことを目的として、地域資源(魅力)を発掘・発信する取組みを実施してきました。さらには、十日市場地区におけるエリアマネジメント活動の支援を行っています。

このほか、京急電鉄と川崎市、そして神奈川大学にて産学官連携協定を結び、川崎市内の京急沿線におけるまちの活性化および将来ビジョンの形成に向けて、実践的なまちづくり活動を展開しています。その中の具体的な活動として、八丁駅駅前空地の活用検討を進めています。民間の空地でありながら公共性の高い場所の活用方法を検討するにあたって、社会実験を通じて地域ニーズを調査するとともに当該敷地の管理・運営方法について検討しています。また同時に、空地のデザイン(舗装面やストリートファニチャー)を検討し、実際に施工した上でさらなる実証実験を実施します。



図1: 十日市場地区におけるエリアマネジメント活動の支援: 活動の方向性を検討するワークショップの様子



図2: Park Line 870(パークラインはっちゃん): 学生が中心となって検討したデザイン案を学生自らが施工し実現した広場

発表論文 1) 民有空地の活用検討プロセスに関する実践的研究 -川崎市八丁駅駅前空地における実験的取組みを事例として-, 共, 日本建築学会技術報告集, 第26巻64号, pp1173-1178, 2020年10月 2) A Research on Community Involvement Complementing Residents' Association -A Case of Voluntary Community Activities in Yokohama Residential Suburb, 共, Asia-Pacific Planning Society 2019 国際会議(Seoul), 2019年8月. 3) 横浜市における創造都市政策と創造産業の立地動向に関する研究, 共, 日本都市計画学会, 49(1), pp.11-18, 2014年4月

所属学会 日本建築学会、日本都市計画学会、文化政策学会

現研究室構成員: 准教授 1人 学部生 4人

スタンリー・ラッセル

Stanley Russell (特任教授)

最終学歴/Stanley Russell

1985年5月 Master of Architecture, University of Pennsylvania Philadelphia, PA.
修士(建築)



Stanley Russell

研究分野 建築デザイン

研究題目 建築デザインプロセス Architecture Design Process, サステナブル建築
Sustainability in Architecture, 建築職人技 Craftsmanship, 日本建築 Japanese Architecture

研究紹介

創造性を活かした建築設計をするためのプロセス- 芸術作品と建築デザインプロセスの関連性の研究,新しいテクノロジーを生かした建築デザインプロセスの研究。

サステナブル建築- サステナブル建築の設計の研究及び実践,サステナブル建築の材料の研究と検討。

建築職人技- 日本木造建築の研究, 日本の建築職人の技術の研究及び実践, 日本現代建築における職人技の研究

日本建築-日本建築の歴史の研究, 日本現代建築の研究。

発表論文 1) Design Process Studio, Presentation/Proceedings S-Arch Conference Hong Kong University, 2017年7月 2) Japanese Architecture in the 21st Century: The Role of the Craftsman, Presentation/Proceedings, IaSU2016 conference, Mukogawa University, Nishinomiya, Japan 2016年7月 3) Cultivating the Craftsman's Eye in Architecture Education, International Journal of Arts and Sciences, Vol. 4, Number 21, 2011年

所属学会 American Collegiate Schools of Architecture

建築系実験室

さとう ひろき

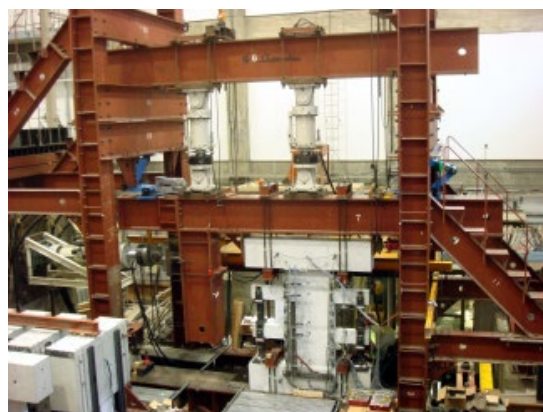
佐藤 宏貴 (教務技術職員)



佐藤 宏貴

建築学科実験棟

建築学科実験棟 (神奈川県 12 号館) は、1967 年に竣工した国内有数の実験施設です。各実験に精通したスタッフと教員、学生が共同して、大型構造実験をはじめ、音・光環境、温熱空気環境、建築設備などに関する最先端の実験・研究を行っています。本実験施設を利用した企業との産学共同研究も行われており、制振構造や消音機構などの最先端の技術が実物件へ適用されています。



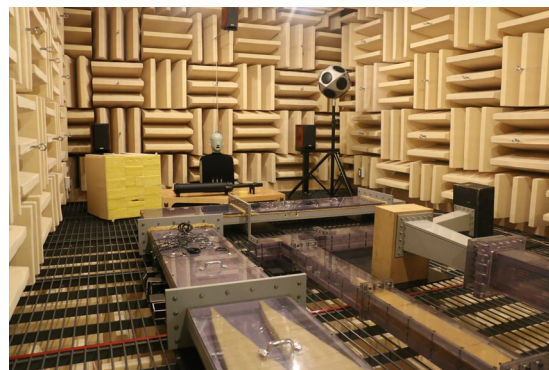
主な保有設備

【構造コース】

- ・ 構造物用動的試験装置 (島津製作所製) 最大能力: $\pm 1,000$ kN (動的: ± 750 kN) $\times 1$ 台、 $\pm 1,000$ kN $\times 2$ 台 (軸力)
- ・ 1軸振動台装置 (島津製作所製) 積載能力: 10 kN ストローク: ± 200 mm、最大載荷速度: 25 cm/sec
- ・ 多軸仮動的応答実験システム (理研精機製) 最大能力: ± 700 kN $\times 1$ 台、 ± 200 kN $\times 2$ 台
- ・ 5,000kN長軸圧縮試験機 (東京衡機製造所製) 最大圧縮能力: 5,000 kN
- ・ 1,000kN万能試験機 (島津製作所製) 圧縮、引張、曲げ載荷 (2.5 mスパン程度)、最大能力: 1,000 kN
- ・ 1,000kN材料試験機 (島津製作所製) 圧縮、引張、最大能力: 1,000 kN
- ・ 2方向永久磁石地震波振動台載荷設備 (サンエス製) 最大積載重量: 3 kN、最大変位: X・Y方向共150 mm
- ・ 起振機 加振力: 3 kN $\times 3 = 9$ kN、加振方向: 水平最大振幅 ± 250 mm、最大速度: ± 1500 mm/sec
- ・ 疲労・耐久試験システム (島津製作所製) EHF-EV101K1 最大試験力: 100 kN ストローク: ± 25 mm

【環境コース】

- ・ 音響実験施設 (無響室、半無響室、低騒音送風装置、統合音響計測システムなど)
- ・ 仮想現実立体視システム (プロジェクター MARQUEE8500/3D、120 インチスクリーン、反射ミラーなど)
- ・ 室内環境実験用チャンバー (冷凍機: 日立 RCUJ75A1, 6.7kW、コイルユニット: クボタ DSCM-1、蒸気発生器: 0~2.5 kg/h)
- ・ 給湯実験室 (実験室: 幅 4.4 m \times 奥 2.7 m \times 天井高 2.4 m)
- ・ インパルス応答の計測及び実時間畳込演算システム (B&K Type 4292-L、7841、Lake Huron、RME TDIF-1 など)
- ・ 多孔質材料垂直入射音響特性計測システム (B&K Type 4206)
- ・ サーマルマネキン (PT-Teknik 社) 身長 168 cm、体重 20 kg、放熱量 0~200 W/m²、最小単位 0.1 W/m²、表面温度 18~42 °C
- ・ ダミーヘッド & トルソシミュレータ (B&K Type 4100)
- ・ FFT アナライザ (HP3566A-32ch、小野測器 DS3000-8ch)
- ・ 非接触レーザー振動計 (B&K Type 3544)



建築ものづくり工房

かわち ゆき

河内 由希 (教務技術職員)



河内 由希

建築ものづくり工房

当該建物は、建築実習室として竣工しました。1 階は大型木工機械を配置し様々な木材の加工に対応し、2 階には、教室が二部屋あり、研究内容や授業内容によって天井高さの違う二部屋を用途に合わせて使い分けることができる教室を兼ねた工房 B 工房 C があります。

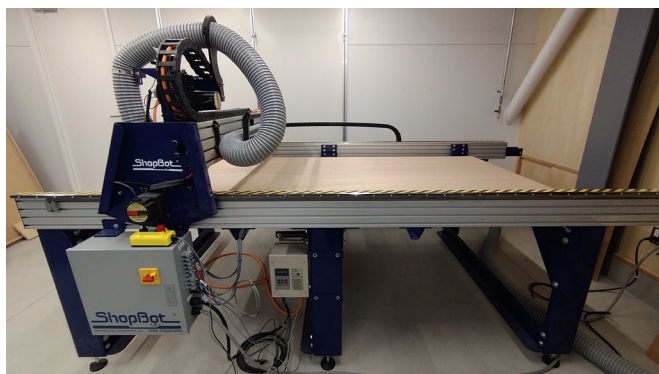
木工機械は、木材料の製作に必要とされる基本的な機械を有し、ものづくりの現場で行われている実際の製作過程が実感を持って体験できます。また CNC ルーターは、デジタルデータを元に 1200×2400 (mm) サイズまでの木材加工を可能としており複雑な形状もデータ通り加工することができます。

主な業務は当学科の授業内容に合わせた木材料の木取・製作・試作と卒業制作や研究室プロジェクトに関わる、様々な試作品の製作・検討の為に利用されます。

主な保有設備

【大型木工機械】

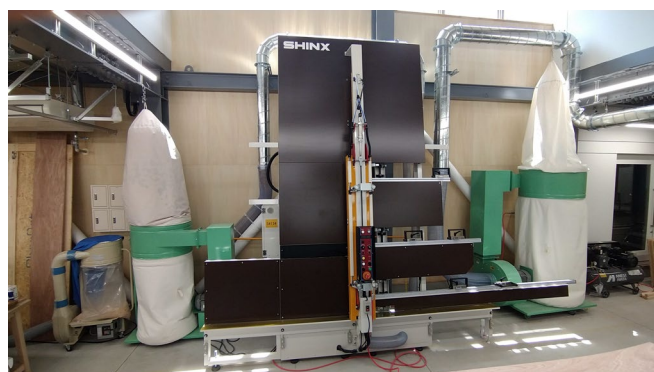
- ・ 軸傾斜横切り盤 (東海製作所製 SFJ-1300) 1 台
- ・ 手押し鉋盤 (桑原工業製 KPN-400) 1 台
- ・ 自動一面鉋盤 (鈴三工業製 GN-45) 1 台
- ・ 軸傾斜昇降盤 (東海製作所製 NSJ-16) 1 台
- ・ パネルソー (シンクス製 SPN1-2400) 1 台
- ・ 集塵機 サイレンサー付き
(鈴木工業製 型番: DT-5M II 型番: DT-30M II)
- ・ CNC ルーター (ShopBot 製 PRSstandard96-48) 1 台
- ・ コンプレッサー (アネスト岩田製 TLP22EG-10) 1 台
- ・ 卓上ボール盤 (HIKOKI 製 B13S) 1 台
- ・ 糸のこ盤 (マキタ製 MSJ-401) 1 台
- ・ バンドソー (京セラ製 TBS-80) 1 台



CNC ルーター



手押し鉋盤



パネルソー



軸傾斜横切り盤

北京交通大学との学術交流（JST さくらサイエンスプログラム）実施報告

須崎 文代* 内田 青蔵** 曾我部 昌史*** 中井 邦夫**** 山家 京子***** 六角 美瑠***** 柏原 沙織*****

The International Academic Exchange (JST Sakura Science) Program with Beijing Jiaotong University

Fumiyo SUZAKI* Seizo UCHIDA** Masashi SOGABE***, et al.

1. 本プログラム実施の経緯

本稿は、2023年12月に実施した北京交通大学（+北京服装学院）との学術交流の報告である。北京交通大学とは2019年、北京服装学院とは2014年以来、デザインコース（現在の住生活創造コース、まち再生コースを含む）の教員を中心とした学術交流の蓄積がある。これまでの交流については両校および中国政府からの評価を受けていると知らされている。本年度のプログラムもその継続性のなかで実施されたものである。

2. 実施内容

本プログラムは以下の内容で実施した。

- ・期間：2023年12月4日～13日
- ・助成：JST さくらサイエンスプログラム（2回目）
宿泊・交通費、見学科、査証手数料、TA謝金、日当
- ・テーマ：スマートシティ構想導入のための日本建築および都市・景観デザインの研究
- ・実施担当者：須崎文代（住生活創造コース准教授）
- ・受入れ対象者：北京交通大学教員1名、大学院生8名
北京服装学院教員1名 合計10名
- ・目的と趣旨：（以下はJST申請内容）

今回の交流計画では、現代社会が直面している地球環境保護および居住環境改善の観点から、スマートシティ構想を導入するための知見を修得することを目標に、日本国内で実践されている事例の視察・見学および日中相互の専門家による講義の受講や意見交換を通して、高度な知識と実装のための視点を身につけることを目的とする。

具体的には、建築・都市・環境デザインの専門家である教員の講義を受講し、基本的知識と最新の動向について学習するとともに、横浜・京都・大阪における近現代の建築・都市計画・環境デザインの事例の視察によって先駆的デザインに関する知見を深め、また横浜・京都における歴史的建造物の視察を通じて、スマートシティ構想における歴史的文化的価値の重要性を認識する機会とする。

*准教授 建築学部建築学科

Associate Professor, Dept. of Architecture

**特任教授 建築学部建築学科

Special Appointed Professor, Dept. of Architecture

- ・実施内容：①特別連続公開講演会の実施（全6回）

「空間デザインにおける伝統文化要素の応用と思考」

李政教授（北京服装学院）

「中国大学のグリーンキャンパス文化景観建設研究と対策：北京交通大学の例」

魏泽崧（北京交通大学教授）

他、内田青蔵、山家京子、中井邦夫、柏原沙織

②横浜、京都、大阪の都市・建築の視察調査

③大学院生によるプレゼンテーションと講評

3. 今後の展望

デザインコースでは、この学術交流プログラム実施以前から、大学院生を中心とした東アジア国際ワークショップの開催・参加を毎年実施している。こうした学術交流は教員・学生・留学生および各国の建築文化にとって重要な機会であり、今後も積極的に進めたいと考えている。



図1 参加者集合写真



図2 JST さくらサイエンスプログラム修了証授与式

神奈川大学建築学研究執筆規程

2023年 07月 31日

1. 名称

本誌の名称は、和文名で『神奈川大学建築学研究』、
英文名で『Reports for Architecture and Building
Engineering, Kanagawa University』とする。

2. 目的

本誌は、本学で建築学分野の研究を行う学部・大
学院研究科および研究所・センター等組織の記事を
掲載する建築学系の機関誌であり、各組織の事業お
よび研究の成果を公表することを目的とする。

3. 運営および原稿の採否

本誌の編集・発行および原稿の採否は、建築学部
広報委員会および建築学研究所所報編集委員会が合
同で組織する神奈川大学建築学研究編集委員会（以
下、編集委員会という）が行うものとする。

4. 投稿資格

本誌に対する投稿資格は、以下（1）～（6）に
該当する者がこれを有する。ただし、（5）に掲げる
者および（6）で原稿執筆を依頼する学外者につい
ては、編集委員会が定める執筆承諾書を建築学研
究所へ提出することにより、建築学研究所への原稿の
著作権の譲渡に同意すると共に、神奈川大学研究倫
理綱領（以下、倫理綱領という）の遵守を誓約する。

（1）本学建築学部の教授、准教授、助教、助手お
よび教務技術職員

（2）建築学部以外に所属する本学専任教員で建築
学分野を専攻する教授、准教授、助教および助手の
うち、建築学研究所所員として登録されている者

（3）建築学部以外に配属されている本学教務技術
職員で、前号に掲げる建築学研究所所員と共に建築
学分野の研究や業務にあたる者

（4）建築学研究所共同研究または建築学研究所プ
ロジェクト研究に研究分担者として参画している研
究所客員教授、客員研究員、特別研究員

（5）前号に掲げる研究分担者以外の者で、建築学
研究所共同研究または建築学研究所プロジェクト研
究に研究分担者として参画している外部機関（大学、
研究所、企業等）に所属する者。

（6）その他、編集委員会から原稿を委嘱された者。

5. 記事の区分

本誌が掲載する原稿（以下、記事という）は報告
書としての性格を持つものとし、原著性を要求しな
い。記事の種類は、以下（1）～（13）の通りと
する。

（1）論説

学問・技術・建築学系各組織の事業・動向等に関
する論説、意見を綴った記事である。原則として 4
頁。

（2）総説

特定の分野や主題について、関連する文献や資料
に基づいて総括的に論評した解説的色彩の強い記事
である。原則として 4 頁。

（3）受賞研究の紹介

第 4 条に掲げる投稿資格を持つ者が所属学会等
から顕著な功績のあったことを評価された研究や業
績について紹介した記事である。前年度に受賞等の
対象となった研究や業績の内容を要約する。原則と
して 4 頁。

（4）建築学科教育・研究費重点配分採択研究報告

神奈川大学より学部特別予算として学科重点配分
採択を受けた研究の報告書である。採択年度から 2
年間で得られた成果を要約する。原則として 2 頁。

（5）科学研究費間接経費を資源とする研究報告

神奈川大学建築学部教員が獲得した科学研究費の
間接経費より助成を受けて実施した研究の報告書で
ある。原則として 2 頁。

（6）私学助成関連研究報告

国や地方自治体等所管の機関より教育研究装置等
施設整備費の助成を受けた研究の報告書である。導
入年度から 2 年間で得られた成果を要約する。原則
として 2 頁。

（7）建築学研究所共同研究報告

建築学研究所より研究費の助成を受けた研究の報
告書である。共同研究 A・B 共に前年度の成果を要
約するが、研究期間 2 年の共同研究 A の場合、2 年
目の成果は次年度の建築学研究で要約する。原則と
して共同研究 A・B 共に 4 頁。

（8）建築学研究所プロジェクト研究報告

建築学研究所の事業であるプロジェクト研究

A・B・C の制度を利用して実施された研究の報告書である。プロジェクト研究の種類によらず、前年度の成果を要約する。原則として 2 頁。

(9) 随想

建築学分野を専攻する教職員の研究・開発等の思い出、意見、感想、経験談等を綴った記事である。原則として 4 頁。

(10) 研究紹介

前年度 4 月から当該年度の 3 月末までの建築学部各研究室の研究分野および研究活動、講演会記録、および前年度の博士論文、修士論文、卒業論文を体系的にまとめた記事である。頁数は任意。

(11) 研究室紹介

当該年度の建築学部各研究室の研究活動を紹介する。頁数は任意。

(12) 建築学内イベント

前年度の建築学研究所活動状況をまとめた記事である。頁数は任意。

(13) その他、編集委員会が設けた特別記事

記事の詳細は編集委員会が必要に応じて定める。

6. 原稿の作成および提出

(1) 原稿は本規程および編集委員会が提供する『神奈川大学建築学研究』原稿執筆要領に基づき作成する。

(2) 用語は和文、英文どちらも可とする。ただし、和文原稿については英文目次作成のため、原稿には英文題目の他、著者氏名および職名・所属の英文名をつける。

(3) 著者自身の公表済み著作物については、原稿中で出所を明示する等の正当な措置を講じること(著作権法第 32 条および第 48 条)により引用することができる。

(4) 原稿は神奈川大学建築学研究所事務局に提出する。そこで受理した日を原稿受付日とする。

(5) 原稿の提出期限は各年度により定める。

(6) 原稿の提出は、Word、PDF 等の電子データで行う。

(7) 図版や特殊文字等に関する編集上の注意事項がある原稿については、電子データに添えて詳細を朱書きした出力原稿を合わせて提出する。

7. 原稿の責任と権利

(1) 原稿に記載する資料の中で著作権に関わるものがある場合は、著者が自らの責任(費用を含む)で事前に許諾を得ることとする。

(2) 前号に示した許諾には、論文等の電子化およびインターネット公開に関わる掲載許可も含むものとする。

(3) 記事の著作権・編集出版権(複製権、公衆送信権)は神奈川大学建築学研究所に属する。

(4) 著者は記事が神奈川大学学術機関リポジトリにおいてインターネット公開されることに同意する。

8. 不正行為への対応

(1) 提出された原稿、または記事に神奈川大学における研究に係る不正行為等の防止及び対応に関する規程(以下、不正行為規程という)第 2 条第 5 項各号に掲げる不正行為に該当する疑義が生じ、別に定める不正行為に対する編集委員会取り扱い内規に定める手続きを経て、編集委員会が不正行為に該当する事実があると認定した場合、編集委員会は不正行為規程第 25 条「論文等の取り下げ等の勧告」に準じ、著者に対し、当該原稿については以下 i) または ii) の処分、また当該記事については以下 iii) および iv) の処分を行う場合がある。

i) 当該原稿の書き直しの指示

ii) 当該原稿の不採録

iii) 当該記事の掲載取り消し

iv) 編集委員会が不正行為の程度に応じて決定した期間の本誌への投稿禁止

(2) 提出された原稿、または記事に倫理綱領に定める研究倫理の理念と研究者の行動規範からの逸脱が著しい等の重大な不正行為に該当する事実があると本学当局が認定した場合、当該原稿または記事の著者は、前項各号の処分の他、本学当局より学内諸規程にのっとった罰則を科される場合がある。

9. 校正

(1) 校正は原則として初校までとする。

(2) 投稿原稿は完成原稿とし、原則として校正時の文言の一部修正のような軽微な修正以外、内容修正は認めない。

10. 抜刷・その他

(1) 抜刷は発行しないが、希望する著者には本誌の PDF 版を提供する。

(2) 原稿の枚数が第 5 条に定める規定限度を大幅に超過する場合は編集委員会の承認を要するが、状況により超過分の実費を徴することがある。

「神奈川大学建築学研究」原稿執筆要領

建築学 太郎* 建築学 花子**

Preparation of Manuscripts for “Reports for Architecture and Building Engineering, Kanagawa University”

Taro KENCHIKUGAKU* Hanako KENCHIKUGAKU**

1. 緒言

原稿は、テンプレート（A4判）に従って執筆し、提出の際は原稿のデジタルデータ（ファイル）を建築学研究所事務局に提出する。ファイルはMS Word（WindowsまたはMac）またはTeX（PDF提出）とする。原稿記載の順序は、標題、本文、文献、付録、である。

2. 本文及び原稿の体裁全般

A4判用紙を用い、本文レイアウト（1ページあたりの文字数）は、30字×50行×2段＝3000字とする。ただしタイトルのみは1段組である。

MS Wordの“ページの設定”の“文字数と行数”のタブ中の設定はフォントサイズ8、段数2で文字数30、行数50とし、“余白”のタブ中の設定は上29下22左13.7右13.7としてある。

和文文字はMS明朝、英文文字はTimes New Romanとする。ただし、記号などにSymbolを用いることが出来る。

本文、図、表及び式は原則として左右の段にまたがらないように書く。小数点は[.]を用い、カンマ[,]を用いない。句読点は[,] [.]または、[,] [。]で統一する。注釈の使用はなるべく避ける。

3. 見出し

諸記号の字体は次のとおりとする。

(種別)	(字体)	(例)
数学的演算記号	立体	sin, sinh
単位記号	立体	cm, kg, MΩ
ベクトル量	斜体	速度 V , 力 F
量記号	斜体	周波数 f , 長さ l
化学記号	立体	H ₂ O, BaTiO ₂

文字の大きさは表1に示すとおりとする。

4. 図、写真及び表の作成

図、写真及び表は全てカラー表示が可能であるが、製本印刷はモノクロで統一し、PDF版のみカラー掲載とする。このため、カラー表示を希望する場合は、モノクロ印刷時に識別できるよう留意する。

*教授 建築学部建築学科
Professor, Dept. of Architecture

**助教 建築学部建築学科
Assistant Professor, Dept. of Architecture

図、写真及び表が単段（片側）に収まらない場合は2段（両側）にまたがって書くことができる。

図、写真及び表の横に空白ができて、その空白部には本文を記入しない。

図、写真、表の見出しは本文と同一言語とする。図及び写真の見出しはその下に、表の見出しは上に書く。

図、表中の記号類は、小さすぎて判別不能にならないようにする。また、複雑な記号類は、大きめに描くようにする。

写真は本文に貼るだけでなく、写真のファイルを添付する。

5. 数式

数式エディタを用いて記載する。

式は単列に書くように整形する。

字体はTimes New Romanを使う。ただし、Symbolは使用できる。

数式は原則として文章の行の中に入れていない。やむを得ず挿入する場合には、1行高さを守る。

例1 [分数式の例]

…これは $(a + b) / (c + d)$ の形を取る。

例2 [指数式の例]

…電流は $i = I \exp(-t/x)$ の形となる。

文中でなく、式を別行にする場合には、次のように書いても良い。その結果、[上例の式]は次の形を取る。

例1 [分数式の例]

…その結果、これは次式の形を取る。

$$\frac{a+b}{c+d} \quad (1)$$

例2 [指数式の例]

…その結果、電流は次式の形となる。

$$i = Ie^{-t/x} \quad (2)$$

6. 文献記載方法

文中の文献引用は、引用箇所¹に文献ナンバーを上付きカッコでつける。

参考文献(References)はナンバーに()や[]を付して本文末に列記する。

引用文献は原則として以下のように記載し、Vol., No., pp.等は省

く (Vol. 30, No. 5, pp. 177-182 ではなく 30 (5), 177-182). また, 太字, 斜体を用いない.

著者名は原則として全員記述し, あまりに多い場合は「他」や「et al.」と略してもよい. また, [,] で列挙し, 欧文著者の場合, 最後のつなぎに「and」を加える.

例1 論文の場合

(和文誌)

[1] 松原茂樹, 加藤芳秀, 江川誠二, 英文作成支援ツールとしての用例文検索システム ESCORT, 情報管理, 51 (4), 251-259 (2008).

(欧文誌)

[2] J. E. Lee, M. L. Fusco and A. J. Hessel, Structure of the Ebola virus glycoprotein bound to an antibody from a human survivor, Nature, 454 (7201), 177-182 (2008).

例2 プロシーディング (Proceedings) の場合

[3] C. Büttner, S. Weinzierl, M. Yabushita and Y. Yasuda, Acoustical characteristics of preserved wooden style Kabuki theaters in Japan, Proc. Forum Acusticum 2014, R03D_1 (Krakow, 2014. 9).

例3 書籍・著書の場合

[4] 坂村健, グローバルスタンダードと国家戦略 (日本の<現代> 第9巻), NTT出版 (2005).

[5] D. Frenkel and B. Smit, Understanding Molecular Simulation (2nd ed.), Academic Press (2002).

表1 文字及びサイズ

題目	MS明朝	14 ポ
著者名	MS明朝	10 ポ
欧文題目	Times New Roman	12 ポ
欧文著者名	Times New Roman	9 ポ
本文	MS明朝	8 ポ
本文の各節・小項目	MSゴシック	8 ポ
図・表の見出し	MSゴシック	8 ポ
参考文献・脚注	MS明朝 Times New Roman	8 ポ

7. 原稿作成上のヒント

このテンプレートはWindows MS Word97-2003文書で作成してある. 著者が別に書いた原稿をコピーペーストすれば, 自動的に割付が決定する.

Word からコピーペーストする際, 書式情報無しテキストのみをペーストするには, 対象の文字または一文をコピーした後にメニューの“ホームタブ”から“形式を選択して貼り付け…”を選択し, “テキスト”を選ぶ.

第1ページ標題部分は1段組である. この部分では, 項目ごとにコピーペーストが必要である.

本文は著者原稿から図, 表, 脚注を除いてコピーし, テンプレートにペーストする. その後で, 図等のスペースを作ってテキストボックスを挿入し, その中に図などをペースト, あるいはファイルからの挿入をする,

第1ページの脚注(著者所属など)には, 直接入力しても, コピーした内容をペーストしても良い.

このテンプレートについて不明な点がある場合は, 建築学研究所事務局に問い合わせる.

8. 結言

校正は著者に依頼するので, 校正刷りが到着後, 速やかに校正を済ませて, 建築学研究所事務局まで返送する. 校正は内容が著者提出のハードコピーと一致することを確かめるものであって, 軽微な修正点を除き, 変更を加えることはできない.

著者の責任による修正が生じた場合には, その修正に必要な実費を徴収する.

付録

[参 考] 神奈川大学建築学研究の配布

刷り上がった神奈川大学建築学研究は以下の各者に1部宛贈呈する.

- (1) 本学理事および建築学部所属教職員.
- (2) 建築学を有する国内の大学またはそれに準ずる学校.
- (3) 官公庁の研究機関.
- (4) 主要の学協会.
- (5) 民間の主要研究機関.
- (6) その他, 編集委員会が認めたもの.

[資 料] 英文用語一覧

Reports for Architecture and Building Engineering, Kanagawa University

神奈川大学建築学研究

Faculty of Architecture and Building Engineering	建築学部
Institute for Architecture and Building Engineering	建築学研究所
Department (Dept.) of	学 科
Architecture and Building Engineering	建築学
Professor	教 授
Professor Emeritus	名誉教授
Associate Professor	准教授
Assistant Professor	助 教
Research Associate	助 手
Technician	技術員
Graduate (M.C.)	大学院 (博士前期課程)
Graduate (D.C.)	大学院 (博士後期課程)
Research Student	研究生
Dean	学部長
Chairman of Dept. of ...	学科主任
Abstract	概 要

注: 准教授, 助手, 技術員, 研究生などについては種々の呼称があるが, 上記のように統一する.

神奈川大学建築学研究 第 2 号

神奈川大学建築学研究 編集委員会

委員長 岩本 静男 (教授, 建築学部)
委員 姜 明采 (助教, 建築学部)
藤本 遼 (助手, 建築学部)
河内 由希 (教務技術職員, 建築学部)

REPORTS FOR ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY (No. 2)

Editorial Board

Chief Editor Shizuo IWAMOTO (Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering)
Editors Myungchae KANG (Assistant Professor, Dept. Architecture and Building Engineering)
Ryo FUJIMOTO (Research Associate, Dept. Architecture and Building Engineering)
Yuki KAWACHI (Academic Affairs Technical Staff, Dept. of Architecture and Building Engineering)

神奈川大学建築学研究 第 2 号

2024 年 7 月 31 日 発行

編集兼発行者 神奈川大学建築学研究所

221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3 丁目 27 番 1 号

INSTITUTE FOR ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING, KANAGAWA UNIVERSITY
3-27-1, Rokkakubashi, Kanagawa-ku, Yokohama 221-8686, Japan